金正日指導哲学

朝鮮・平壌

チュチェ88（1999）

金正日指導哲学

趙成伯　著

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ88(1999)

編集部まえがき

1997 年、南朝鮮の著述家趙成伯が著した本書について、発行者たちは「偉人の指導哲学の核心をえぐった最初の名著」と評している。

もちろん著者の言うように、主観的な欲望ないし意図にもかかわらず、問題の設定と叙述が相応のレベルにいたっていないという点は認められるが、「金正日(キムジョンイル)将軍のことを世に伝えるうえでいささかなりとも役立てば」という著者の意図を汲んで、本社編集部は本書を各国語に翻訳して出版することにした。

目　次

総　論

レーニンはつとに 1920 年代、「アジアがめざめる時期」に入ったとし、アジアが「全世界の運命を決定する、そのような時期が近づいている」と指摘している。

金日成（キムイルソン）主席はチュチェ思想を創始して人類の思想・精神生活に根本的な転換をもたらし、自主の旗なびく世界史の新しい章を開いた。文字通りアジアが世界の運命を決定づける新しい時代がここに到来したのである。

それから数十年がすぎた 1980 年代初、米国の『ニューヨーク・タイムズ』は「朝鮮はいま一人の英雄を生んだ」と題する記事をかかげ、金正日（キムジョンイル）将軍が世界の運命に大きな影響力を及ぼす世界的な偉人として登場したことを世に伝えた。

今日、人類は地球村で進行している地殻変動にもたとえられるべき衝撃的な出来事を体験しながら、アジアが世界の運命を決定する時代に入っていることを認め、この激動する時代の操縦桿をにぎって多難な歴史を正しく導いている人物はほかならぬ金正日将軍であると痛感している。

歴史をかえりみると、人類は最初河川文明を開いた。遠く 5～6,000 年の昔から、黄河、インダス川、ティグリス・ユーフラテス川、ナイル川などの流域で人類を驚嘆させた河川文明が起こり、その後は地中海におけるような海洋文明が起こった。つづく三百余年間は大西洋文明が世界を支配した。そしてこの歴史の流れのなかで世界的な偉人たちが現れ、政治、経済、文

化など諸領域で地球村の発展に大きな影響を及ぼした。
なかでも世界史の発展に大きく寄与したのは、マルクス、エンゲルス、レーニンであったといえる。かれらは世界文明の発展に寄与した他のすべての偉人とは違って労働者階級の領袖であり、かれらによって被抑圧民衆の解放にかんする思想・学説が創始されて世界が沸き立ち、ついにはその産児として社会主義が現出したのである。
ところで、今日、世界は新しい太平洋文明の時代につき進んでいる。
アジア・太平洋時代と呼ばれる今日、北朝鮮はその主役を担当し、世界の発展に大きな影響力を行使している。それは北朝鮮で偉大な金日成主席によって人類思想発展の最高の精華―人間中心のチュチェ思想が創始され、いまや金正日将軍がチュチェの光で世界を照らし、遠い将来を展望しながら人類を自主の道に導いているからである。時代の中心に立って人類を自主と正義に向けて導く金正日将軍は、実にわれわれの世紀が生んだ傑出した偉人である。
トーマス・カーライルは『英雄崇拝論』で、すべての英雄の第一の特徴は誠実、深くも真正な誠実にあるとし、マキアヴェリはそれを勇気、確信、威圧的な性格、権謀術数の能力、冷徹、偽善などに求めている。他方、ハロルド・ラスキは、政治家は当然「大衆消費用の特殊な人格」の所有者であるべきだとし、マクスベビーは情熱、責任感、洞察力を、ラスウェルは集団結合能力を指導者の気質であるとし、米国のマリアムは、雄弁、勇気、社会的感受性、作為力、集団結合能力が英雄の資質だとしている。いずれにせよそれらの指摘は、傑出した偉人になるの

は決して容易でないことを強調しているものと理解すべきであろう。

ある人たちは、1917 年、ロシア革命の苦難の時期に示したレーニンの沈着と 1930 年代の恐慌期に見せたローズヴェルトの明るい微笑、フランスの敗北後「フランスが偉大な進取的機能を失うときは、もはやフランスではない」と叫んで国民を再び糾合したド・ゴールの指導力などに見られる余裕しゃくしゃくとした心の持ち方こそ偉人の気質であるべきだと指摘している。

もっとも、偉人ないし指導者の偉大さや傑出ぶりを規定する要因はさまざまの角度から考察されうるであろうし、また、指導者ごとにそれぞれの特有な資質を指摘できるであろう。しかし、指導者の偉大さを特徴づける基本的かつ決定的な表徴は、その思想的・精神的偉大さ、哲学の偉大さにあるといってよい。

これについて、17〜18 世紀の英国の著名な文学者ディズレーリの言葉は注目に価する。かれは、「偉人とはその時代の精神に影響を与える人間」であると正しく指摘している。ソクラテスは「現実を救済するには二つの道がある。一つは正義を知る哲人が政権を取ることであり、いま一つは権力をにぎった者が正義の知恵をそなえた哲人になることである」と言った。

ディズレーリやソクラテスの指摘は、時代精神に影響を与えるような哲学を持つ偉人だけが傑出した指導者になりうるということである。

ところで、偉人一般ではなく、真の人民的領袖の場合は、その偉大さを規定する根本的表徴が思想の偉大さにあるといってよい。実際、今日世界が金正日将軍をそれほど尊敬し、敬慕してやまないのは、将軍が偉大な哲学を持って時代を導いている

からである。
　金正日将軍の偉大さはその哲学の偉大さにある。将軍の哲学はもっとも熱い人間愛にみちた人間中心の哲学、民衆の自由と幸福の徹底的な擁護で貫かれた人間解放の哲学である。
　金正日将軍が偉大な哲学を持つ傑出した指導者となりえたのは、その歴史的な出生と切り離しては考えられない。
　将軍の生地は世界に広く知られた革命の聖山白頭（ペクトウ）山である。白頭山は、偉大な金日成主席がチュチェの旗を高だかとかかげて植民地民族解放の最初の砲声をあげた革命の聖地であり、チュチェ思想発祥の地である。
　将軍は金日成主席の子としてここに生まれ、人間解放、民族解放の銃声が高らかに響いていた白頭の聖地で幼年時代を送った。
　金日成主席の人間中心のチュチェ思想と被抑圧民衆へのこよなき愛がこもるこの歴史の地白頭山は金正日将軍の誕生と成長を偉大なものとならせた源であり、ゆりかごである。
　白頭山は太陽の輝きのもとに数千数万年のあいだ積み重なった深雪と千古の緑の大密林がみごとにとけあって、神秘の境、無我の境をなした名山、祖宗の山である。
　金正日将軍はこの歴史の山で、自然の恵んだあの強く清純な霜花の世界と、抗日革命の祝福のなかで出生し、輝かしい生涯の第一歩を踏み出した。白頭山はうちに秘める偉大、崇高、美のすべてをその子金正日将軍に与えた。
　白頭山の思想は人間の自主性と尊厳を擁護する人間愛の最高の思想であり、白頭山の精神はいかなる逆境のなかでもいささかの動揺やしりごみもなく、自己の思想と理想を実現するために最後までたたかいつづける不屈の革命精神であり、白頭山の

胆力は最高の地でもっとも偉大なものを創造していく無比の胆力であり、白頭山の気象は天下を掌握してこの世のいっさいの不正と悪を容赦なく懲罰し、制圧して自由と正義の世界を開いていく勝利の気象である。

金正日将軍は白頭山が秘めているそのことごとくを身につけた白頭の子、革命の子である。

世界史にたぐいないあの苦難にみちた抗日大戦と、世界の帝国主義列強を相手どった苛烈な6・25戦争(朝鮮戦争)、そして半世紀の長きにわたってつづけられたきびしい反帝闘争の歴史は、金正日将軍をして今世紀の政治的・軍事的対決の最先端に立たせた。ほかならぬこうした歴史の日びが、金正日将軍をもっとも革命的な哲学と不屈の意志と無比の胆力をもって勤労者大衆の自主偉業に心魂を傾ける偉大な闘士に鍛えたのである。

それゆえに将軍の哲学は、もっとも熱い人間愛、人間擁護思想で特徴づけられ、自分の手で土地を耕作し、機械を作り、自力でたえず社会を改造し、変革していく勤労者大衆の偉業への無限の忠実性で貫かれているのである。

正しい哲学を持つ指導者は成功し、そうでない指導者は失敗するというのが歴史の真理である。そして、どのような哲学を持つかによって指導の科学性と成否が規定されるのである。

歴史をかえりみると、その間出現した支配者、統治者はかれらなりの哲学を持とうとした。なかには当代の有名な哲学者の学説を自分の統治哲学として利用する者もいた。

古代ローマの政治はゼノンのストア哲学を基盤としており、紀元 6 世紀にはスペインの大司教イシドルスがこの哲学をキリ

スト教時代に適用した。

孔子の「正名」や「仁」の思想は当代の奴隷所有者階級の支配を合理化することに利用された。

プロシア皇帝はヘーゲル哲学を統治哲学として利用した。ヘーゲルの観念論的弁証法哲学はプロシア専制政体を合理化し、擁護することに供せられた。ヘーゲルはプロシア国家を「地上における神の行進」としてたたえた。

従来ほとんどの支配者たちが他人の哲学をその統治理論として利用したのにひきかえ、真正な労働者階級の領袖たちは自ら創始した思想をもって被抑圧民衆の解放闘争を指導した。

労働者階級の最初の領袖であるマルクスとエンゲルスは唯物弁証法哲学を創始して、社会・歴史と人民の指導で根本的な転換の契機をもたらした。

マルクス主義唯物弁証法哲学は資本主義の滅亡の不可避性と社会主義・共産主義の勝利の必然性を論証して、労働者階級の解放偉業に貢献した。レーニンはマルクス主義哲学を社会主義革命と社会主義建設のたたかいの旗じるしとした。

しかし、かつて搾取階級に服務したもろもろの観念論哲学はいうまでもなく、マルクス主義唯物論哲学もそれが科学的かつ革命的であったにもかかわらず、その限界性のゆえに国家と社会を導く正しい指導哲学にはなりえなかった。こうして、歴史の発展にそう正しい指導哲学を創始することは現代にいたって猶予を許さぬ緊要な課題となった。

この時代的要請にこたえて、史上最初の真に科学的な指導哲学を創始したのは、敬愛する金日成主席である。

主席は人間中心のチュチェ思想を創始して、人間の運命開拓

の正しい進路を示す指導理論、指導方法を定立した。そして、金正日将軍は主席によって創始された科学的なチュチェの指導思想・理論を深め、発展させて、歴史をおし進め、人間の運命を正しく開拓するための完成された指導哲学をうちだした。

金正日将軍のユニークな指導スタイルと抜きんでた指導力の根底には、将軍の独創的な哲学がある。

人間第一主義・人間中心論

古代ギリシアの神話によれば、プロメテウスが人間に火をもたらしたという。プロメテウスは人間に火を与えるとき、「おまえたちはこの火のあるじだ。この火を正しく使えば、おまえたちはこの世の主人になれる」と言った。

けれども、プロメテウスは人間に運命開拓の道を示す思想的・精神的な火を与えることができず、したがって人間を世界の主人にならせることができなかった。

人間を世界の主人とならせるためには、人間に世界の主人としての自覚と責任感、世界の主人となるために必要な思想的・精神的武器をいだかせなければならない。しかしこれまでどの哲学も、人間が世界の主人になるための道を明らかにすることができなかった。

1 世紀に出現したキリスト教、7 世紀のイスラム教、前 5～前 4 世紀に出現した仏教のような宗教観念論はいずれも、人間に救いと解放の道をさし示すとされたが、実際には荒唐な説教にすぎなかった。

古代ローマのルキウス・アナエウス・セネカは、「運命は望む

者を伴って行き、望まない者は引っ張って行く」として、人間が運命に従わなければならないことを説いた。このような宿命論的世界観は、長い世紀、人間を無力にし、搾取社会を合理化することに尽くした。

ヒトラーは獣的、強盗的なニーチェ哲学を侵略・戦争政策合理化の用具として利用し、米国はウィリアム・ジェームズやジョン・デューイのプラグマティズムを搾取と収奪、世界制覇の統治哲学として利用してきた。

支配者、搾取者、収奪者の哲学は例外なく人間の本性と歴史の法則にたいする歪曲と人民への欺瞞で貫かれている。

そうした非科学的な世界観に終止符を打ち、哲学を現実的な土台の上にすえたのはマルクス主義である。弁証法的唯物論と史的唯物論の創始は、疑いなく哲学における一つの革命であり、歴史に新しい紀元を開いた画期的な出来事であった。

マルクスは長い世紀支配的であったいっさいの非科学的な論議に打撃を与え、科学的な哲学を創始することによって、それを、世界を変革し民衆を解放する現実的な武器とならせた。かれは、哲学が世界をさまざまに解釈することに目的があるのではなく、「問題は世界を変革すること」にある、と正しく指摘している。

マルクスが『独仏年誌』の誌上で「哲学がプロレタリアートを自己の物質的武器と認めるように、プロレタリアートは哲学を自己の精神的武器と認めている」とし、「哲学はプロレタリアートを廃棄することなしには実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現せずには自身を廃棄することができない」と指摘しているのは、科学的な哲学の定立と具現が被抑圧人民の解放偉業

で重要な意義を持つものであることを強調したものだといえよう。

しかし、マルクス主義哲学はその革命的な性格にもかかわらず、物質世界の一般的な姿と世界の変化発展の客観的合法則性を明らかにしただけで、哲学を論ずる主体である人間を中心にすえて世界の改造・変革の合法則性を明らかにするまでにはいたらなかった。それはマルクス主義哲学が物質中心の世界観であることに起因している。このことは、マルクスが『神聖家族』で「物質はあらゆる変化の主体である」と指摘していることからも明らかである。

マルクス主義哲学は人間を物質世界の一部分としてのみ考察し、人間を世界の主人の地位にすえることができなかった。また、人間がその本性と役割の見地からして世界でもっとも貴重な存在であり、世界の主人であり、世界でもっとも発達した有力な存在であるということを科学的に解明することをしていない。だから、人間はたんに客観的な必然性を認識し利用するとき自由な存在になりうる、と強調するにとどまり、世界を現実的に改造・変革するための科学的な方法論をうちだせなかったのである。

実際において、唯物弁証法の原理からは自然と社会を改造・変革するうえで堅持すべき指導原則・方法を導き出せない。スターリンが指導方法問題を論じながらも、それを「ロシア的情熱とアメリカ的実務」と指摘した一つの事実からも、マルクス主義哲学の限界性がうかがえるであろう。

人間が自己の運命を開拓するためには、物質世界の一般的な姿とその運動法則を解明することにとどまらず、人間自身がど

のような存在であり、人間と世界の関係で作用する合法則性はなにかということまで解明すべきである。つまり、人間が世界を認識し改造する方法論まで明らかにすべきである。そうしてはじめて人間が世界を目的意識的に改造・変革してゆけ、自己の運命の主人になれるのである。

こうした見地からして、人間の本性と世界発展の合法則性にかなった科学的な哲学的世界観を定立し、具現するのは、民衆の運命を開拓するうえで特に重要な意義を持っているといえる。

東欧諸国で社会主義が挫折した原因はいろいろと挙げられようが、その要因はそれらの国が物質・経済中心のマルクス主義哲学をそのまま国家の建設と指導に適用したことにある。実際それらの国では、社会発展の主体をしっかり固め、その役割を高めることに関心を向けなかったために、結局は帝国主義者の破壊策動にうちかつことができなかったのである。

金正日将軍はそれとは根本的に異なる科学的な人間中心の哲学的世界観、革命哲学を定立し、それを国家建設と人民の指導に徹底して具現し、りっぱな成果をおさめている。

その実り豊かな指導の根底にある哲学は、たんに世界観を明らかにすることにとどまらない、歴史を導くことに尽くす政治哲学、人民の自主性の実現に奉仕し、その進路を示す革命哲学である。

では、金正日将軍の哲学が政治哲学、革命哲学とされるゆえんはなんであろうか。それは、将軍の哲学が人間愛の哲学であり、人間の運命開拓の進路を照らす改造と変革、創造と革新の哲学だからである。一言でいって将軍の哲学は人間、人民のための哲学である。

人間愛の哲学の本質的内容をなすのは、人間第一主義・人間中心論である。

金正日将軍はすべてのことに先立ってまず人間を見、無条件人間を愛せよということが人間愛の哲学であるとし、人間愛は自分の総体的目的であり、生の理想であると強調している。人間をなによりも大事にし、人間を絶対的に崇拝し愛する将軍の哲学は、哲学の使命と本性、役割をもっとも科学的に定立したものといえる。

哲学が人間の必要から作られ、人間の運命の開拓に尽くすことを使命としているということを念頭におくとき、もっとも科学的な哲学がほかならぬ人間愛の哲学として定義され、体系化されるのはまったくの必然であり、当然のことであろう。哲学はあくまでも人間愛の哲学になるべきだとし、人間愛が自分の総体的目標、生の理想であるとする思想には、偉大な人間、偉大な指導者としての将軍の思想、意志、徳望が内包されている。

では、人間愛の哲学の本質的内容をなす人間第一主義・人間中心論とはなにか。

人間第一主義・人間中心論は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するというチュチェ思想の原理を科学的に集約して表現した哲学的範疇である。

人間第一主義・人間中心論とは、人間が世界の主人であり、世界でもっとも貴重な存在であるということである。

人間はたんなる物質的存在ではなく世界を支配する地位にある、世界発展の最高の所産である。もっとも発達した物質的存在である人間は、より低い発達状態にある他の物質的存在を支配し、それを自分たちに有利に従わせていく、世界で唯一の自

主的な存在である。人間は世界の主人であるがゆえに、この世でもっとも貴重な存在である。人間は世界の主人であるがゆえに、世界に存在するすべてのものは人間の要求と利益にかなう限りにおいて意義と価値を持つ。人間は世界の主人であり、世界でもっとも貴重な存在であるがゆえに、世界のすべてを自分たちに奉仕させる権利を持つ。これが人間第一主義・人間中心論である。

人間は世界でもっとも貴重な存在であるだけでなく、世界でもっとも発達した有力な存在である。

人間は世界でもっとも発達した有力な創造的存在であるために、世界を能動的に改造し自分たちに有用なものに変えていくことができる。世界の改造と発展で決定的役割を果たすのは人間である。自然と社会を成功裏に改造し発展させるためには、世界で唯一の創造的存在である人間の力によらなければならず、したがって人間を動かさなければならない。これが人間第一主義・人間中心論である。

人間が世界の主人であり、この世のもっとも貴重な存在であるがゆえにすべてのものを人間に奉仕させ、また人間が世界でもっとも発達した有力な存在であるがゆえに人間を信頼し、人間の力に依拠してすべてを解決していかなければならないというのが、人間第一主義・人間中心論の基本的要請である。金正日将軍は人間第一主義・人間中心論の基本的要請を哲学的方法論として、自然と社会の改造を指導している。

人民をこのうえなく愛し、人民に最大の配慮をめぐらし、人民のなかへ入って人民に依拠しながら奇跡的な革新を起こしていく将軍の抜きんでた指導力は、人間第一主義・人間中心論の

基本的要請を指導原則としていることにその秘訣がある。
　将軍のすぐれた指導のもとに朝鮮で達成されたすべての成果は、人間第一主義・人間中心論が具現された結果なしとげられたすぐれた所産である。
　他方、人間の貴重であること、人間の能力の無限であることを否定して、「人類の危機説」や「成長限界論」などといったものを流布し、経済的破局、勤労者の貧困を歴史の必然であるかのようにねじまげる帝国主義者の試みは、なんと愚かなものであろうか。
　米国のパーフェンハイムが「疎外は今日の時代の流行」であるとし、新しい機械技術、情報技術の発展が人間そのものを疎外し、破滅させる要因であるかのようにねじまげているのは、人間の偉大さを無視する誤った論議である。現代の人間は「疎外」されていく存在ではなく、ますます有力な存在に発達していく存在、世界をよりいっそう自分たちに有用なものに変えていく存在である。
　今日、人間はその支配領域、知識の範囲をたえず拡大している。
　自然科学の発展がそれを物語っている。
　現代の人類の視野は、巨視的には二百億光年に達し、微視的には素粒子の内部深くまで及んでいる。人類はすでに第一宇宙速度を越え、地球を離れて「天宮」に達したばかりか、ひきつづき第二宇宙速度をもって遊星軌道に入り、九つの遊星のあいだを飛行しており、さらには第三宇宙速度を突破して太陽系を抜け出し、探測機をもって無限の宇宙空間に入りこんでいる。レーザー工学、細胞工学、遺伝子工学などの発展を通して、人間は新しい世界の領域をたえず切り開き、あるいは創造しながら

自らの運命をりっぱに開拓している。

新羅の僧慧超はインドの遍歴に七年をかけたが、いまやニューデリーからソウルまでは一日の旅程である。人間の創造的な知恵と能力は地球村を一つの広場に作りあげた。これは、現代技術の発展によって人間は決して疎外されるのではなく、かえってその支配領域をますます拡大していく有力な存在であることを示すりっぱなあかしである。

こうした事柄は、人間が世界の主人であり、世界でもっとも発達した有力な存在であるがゆえに、すべてを人間を中心にして考え、人間に奉仕させるべきであるとする方法論こそ自然と社会を改造し、国家と社会を指導するうえで指針とすべきもっとも科学的で革命的な方法論であることを雄弁に物語っている。ほかならぬここに、金正日将軍が具現している人間第一主義・人間中心論の正しさ、無限の活力があるのである。

人間第一主義・人間中心論は人間にたいする科学的な理解にもとづいている。

金正日将軍はつぎのように指摘している。

「人間は自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在である」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 366 ページ)

将軍は、人間が自分を知れば革命家になり、自分を知らなければ奴隷になると指摘している。人間は自分自身がなんであるかを把握するとき、人間自身のため、人類のためにりっぱなことをなしうる。ところが人間の本質についての正しい理解は、従来なされていなかった。

古代ローマの哲学者フィロンは、人間についての当時までの見解が 208 に及んでいると指摘している。そうした指摘は、古

代から人間にたいする理解が哲学的論議の対象として重視されていたことを示している。人間にたいするさまざまな理解は互いに異なる政治的・道徳的見解を生み、それはまた、当代社会の性格と支配方式を規定した。

古代奴隷制社会におけるデモクリトス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの人間論などから中世のアウグスティヌスの人間論やトマス・アクィナスの人間論にいたるまで、そして近世ルネサンス時代の人間論からドイツ古典哲学派のカント、シェリング、ヘーゲル、フォイエルバハの人間論にいたるまで、久しい世紀にわたっておこなわれてきた人間についての論議はそのいずれも正しい理解に到達していなかった。したがってそれらの時代には、人間的な本性を実現しうる社会の姿の設計や政治方式の確立など想像すらできなかったのである。

フォイエルバハが人間を肉体を持った生物学的存在とみなし、はなはだしくは「人間はパン」であるといったふうに理解したのはその端的な例である。18 世紀のフランス唯物論者ラ・メトリは「人間は機械である」と規定し、人間のすべての活動を機械的なものとして考察したが、そうした立場からは正しい指導原則や方法論が提起されるものではない。

人間の本質についてのいっさいの誤り、転倒された理解は、それを精神的支柱とする王や君主のような統治者たちに非人道的、非民主的な方法による民衆支配の合理化を許す余地を与えた。

人間にたいする理解を科学的な土台に乗せたのはマルクス主義哲学である。マルクス主義は人間を社会的諸関係の総体であると規定した。マルクス主義は人間の本質をその内的属性に求めたのではなく、人間の外つまり人間の存在と活動を規制する

社会的諸関係のなかで考察したのであった。人間が社会的諸関係の総体であるという理解からは、人間の存在を制約する物質的・経済的および社会的・政治的条件を変え、発展させれば、それにつれて人間の解放、発展がなされるという結論が引き出される。

人間の本質にたいする理解でのこのような限界性を克服して、人間にたいする科学的な理解を確立したのはほかならぬ金正日将軍である。

将軍は人間の本質を自主性と創造性、意識性を持つ社会的存在と規定している。

いかなる束縛や従属をも退け、自己の運命の主人となって自由に生きようとする属性が自主性であり、人間はそうした自主性を生命とするがゆえに世界の主人となり、この世でもっとも貴重な存在になる、というのが将軍の人間観である。将軍はまた、創造性すなわち世界を目的意識的に改造し変革していく属性と、すべての活動を規制する属性である意識性を人間の特性と見ている。ここから将軍は、人間を愛し、人民に尽くすためには党と国家のすべての活動が人間の自主性と創造性、意識性をともに重視し、高く発揚させることに向けられなければならないという原則をうちだした。

将軍のすべての思索と活動は人民の自主性を擁護し、人民の創造性と意識性を高めることに向けられている。これがほかならぬ将軍の指導の科学性と不敗の活力を規定する根本的要因なのである。

実に人間第一主義・人間中心論はその科学性と現実性のゆえに、人間的な社会の建設をめざすすべての指導者が国家の指導

で指針とすべき、普遍的意義を持つ貴重な思想的・理論的指針である。

思想論

金正日将軍の実りある指導を可能にしているいま一つの基礎原理は思想論である。自然と社会を改造し、変革する歴史の運動発展で決定的役割を果たすのは思想であり、したがって人びとの思想意識を動かす方法ですべての問題を解決していかなければならない、というのが思想論の基本的な要請である。

これまで資本主義社会にいたるまでのすべての搾取階級社会では、カネやモノによって人間を動かすのがもっとも効果的な方法であるとする理解が不滅の真理とされてきた。資本主義社会はカネが中心の拝金主義社会であるために、カネやモノなど物質的財貨による刺激ないし動員の方法が国家経営、企業運営の基本的な方式として利用されているのは周知の事実である。

しかし、金正日将軍はそうした見解に終止符を打ち、まったくユニークな社会発展の原理を示した。

それがほかならぬ思想論である。

では思想論とはなにか。

金正日将軍は、われわれは革命闘争と建設事業で人間の思想が基本であり、人間の思想によってすべてを決定するという思想論を主張する、と指摘している。

思想論とは一言でいって、思想がすべてを決定するということである。思想が人間の価値とそのすべての活動を規制し、自然と社会を改造し変革するすべての運動で基本をなす、という

のが思想論である。人びとの要求と利害関係を反映した思想意識は、人間の道徳的風格と人格を規制し、また人間のすべての活動をコントロールする。人間の価値はカネやモノによって評価されるのではなく、思想によって評価される。

かれがりっぱな人間であるか否かは、その容姿やカネ、財産の大きさによってではなく、かれの思想意識の水準と内容の深さ、社会と集団にたいする役割の大きさによって規定される。すぐれた先進思想を持つ人間は高尚な人格の持ち主であり、社会と集団、祖国と民族のための偉業に献身する。いかに目鼻立ちが整い、またいかに大きな財産を持っていても、よくない思想を持ち、反民族的・反人民的立場に立っている人間は、まっとうな人間とはいえない。

つぎに、人間のすべての活動は一定の思想意識によってコントロールされる。どのような思想を持つかによって、人間の活動の目的と方向、性格が規制されるというのは周知の事柄である。

同様に、自然と社会を改造し変革するたたかいは、思想によって規制される。自然と社会の改造の目標と方向も思想によって設定され、また、そうしたたたかいに参加する人たちがどのような思想意識を持つかによって、社会の発展速度が規制される。歴史的運動に参加する人たちが自分の活動に誇りを持ち、高い自覚的熱意と創意を発揮するとき、すべての活動が順調に運び、そうでないときは成功がおぼつかない。このことは社会的運動の成否がすべて思想によって決まることを物語っている。

ところが従来労働者階級の領袖たちは、意識にかんする問題を考察しながらも、思想意識が社会の発展で果たす決定的な役割については解明できなかった。マルクス主義創始者たちの基

本的な見解は、社会・歴史の発展で決定的な役割を果たすのは経済的なもの、物質的生産様式であるとするものだった。かれらは意識の役割についても強調しているが、その場合も、それをたんに意識が物質的なものに反作用するという理解にとどまっていた。

エンゲルスはシュミットに宛てた手紙で、社会の発展で物質的存在方式を一面的に強調してはならないとし、「物質的存在方式が一次的ではあるが、このことは、イデオロギー分野が今度はこの物質的条件にたいして二次的にせよ反作用をすることを排除しない」(『マルクス・エンゲルス全集』第 2 巻 567 ページ)と指摘している。ところでエンゲルスは、意識の反作用についてこのように強調しながらも、歴史的な過程における「決定的要素」はあくまでも経済的要素であるとし、その主張を譲らなかった。それは、エンゲルスが 1890 年ブロッホに宛てた手紙で「唯物史観によれば、歴史的な過程で決定的な要素は結局現実的生活の生産と再生産」(同上 569 ページ)であると指摘していることからも知ることができる。かれは、「すべての社会的変化と政治的変革の究極的原因は人びとの頭のなかで、永遠の真理と正義にたいするかれらの深まる認識から求めるべきではなく、生産様式と交換様式の変化から求めるべきであり、これを哲学から求めるべきではなく、その時代の経済から求めるべきである」(同上第 20 巻 301 ページ)として、歴史的運動において経済が決定的であるという理解を強調した。マルクス主義の経済決定論的立場については、エンゲルス自身が諸著作でくりかえし強調しているばかりでなく、レーニンもまたそれに従った。そのことはレーニンが社会・歴史の発展過程をマルクスやエンゲル

スと同様、自然史的な過程としてとらえていたことから理解できる。

マルクスやレーニンはまた、社会・歴史の発展で決定的なものはなにかということについてあくまでも理論的に展開するにとどまり、じかに社会主義の建設を指導することがなかったために、経済中心主義的見解が実践的にどんな結果を招くかということについて知るよしがなかった。

現実的に、社会・歴史の発展で経済的なものが決定的な役割を果たすというマルクス主義的な理解は、旧ソ連をはじめ以前のヨーロッパ社会主義諸国で重大な結果を生んだ。これらの国は社会の発展で物質的・経済的富の生産が決定的な役割を果たすという見解をそのまま適用したために、社会主義的思想の弱化と変質を招き、ついには社会主義を崩壊させる結果をもたらした。ヨーロッパ諸国における社会主義の崩壊は、社会の発展で果たす思想意識の決定的役割を理解せず、それをなおざりにする場合人びとを思想的に変質させ、ひいては党と国家の変質を、最後には社会主義制度そのものの崩壊を招くという教訓を歴史に残した。

このように見るとき、金正日将軍が創始し、具現している思想論がいかに重要な意義を持つかが理解できるであろう。

将軍は、人間が自然と社会を改造し変革するたたかいで決定的役割を果たすということはただちにかれらの思想意識が決定的役割を果たすという意味であるとし、すべての活動で思想革命を先行させ、政治活動を先立たせる原則を堅持している。一言でいって、人びとを先進的な思想で武装し、かれらの思想を動かすならば、この世に不可能なことはないというのが将軍の

思想であり、立場である。
　こうした見解から出発して将軍は、「世界を動かす力はカネや原子爆弾ではなく偉大な思想である」という有名な命題を示し、思想論を革命的指導に一貫して具現している。
　北朝鮮の人民が社会主義への信念を固め、国の主人としての高度の自覚と責任感をもって不屈の革命精神を発揮しながら力強くたたかっているのは、金正日将軍が思想論を革命的指導において一貫して具現している結果である。将軍が思想論の旗じるしを高くかかげて北朝鮮の人民をたえざる革新と高揚へと呼び起こし、社会主義の思想陣地をいっそう固める方法で革命を成功裏に前進させるであろうことは疑いをいれない。

領袖中心論

　金正日将軍の指導哲学の基礎にはさらに領袖中心論がある。領袖は変革運動で決定的な役割を果たす、したがってすぐれた領袖をいただき、その正しい指導を受けてこそ人民の運命が成功裏に開拓されるというのが、将軍の指導哲学の原理である。
　ところが、これまでこの重要問題は正しく解明されず、偏見にみちた人たちによってねじまげさえされていた。しかし、傑出した領袖が歴史の発展で決定的役割を果たすことは歴史が実証している。
　かつて、史家は古代エジプトの最後の女王クレオパトラを歴史の流れに結びつけたものである。才色兼備、政治的野心と老練な手腕で名の高かったクレオパトラの鼻が少し低かったとしても、歴史の流れは変わっていたであろうという評がそれであ

るが、これは偉人たちの活動が歴史に少なからぬ影響を及ぼすものであることを語る一つの例である。

歴史上の名将や王、統治者がいずれにせよ当代社会の流れに一定の影響を与えたことは事実であるが、だからといってかれらの誰もが社会・歴史の発展に肯定的な影響を及ぼしたわけではない。

歴史上ローマの英雄とされているジュリアス・シーザーは十余年の遠征期間に 800 の城を落とし、300 の民族を征服し、300 万の敵軍と戦って 100 万をとりこにし、アフリカの地を平定しもしたが、かれは他民族の征服と殺戮によって、歴史に逆行する行動をおこなった。結局かれは、専制政治のゆえに議事堂の壇上で殺害された。

ヘーゲルはイェーナを占領したナポレオンの馬上の勇姿を見て、「世界精神が馬にまたがっていくのを見た」と絶賛したが、かれは決して人民の指導者でも、歴史的に肯定されるべき偉人でもなかった。かれは 20 年にわたる戦争をおこなっているが、それはかれの祖国に悲惨をもたらしたにすぎない。かれは国民に数百万の死とおびただしい財産上の損失をもたらし、百億フランの賠償金支払いの責めを自国に嫁した。

歴史の発展で決定的な役割を果たすのは偉人一般ではなく、労働者階級をはじめ勤労人民の利益を真に代表し、擁護する領袖である。

では領袖とはどういう人物であろうか。

領袖の概念をはじめて示したのはエンゲルスである。かれは著書『マルクスと新ライン新聞』(1884 年)ではじめて、マルクスを「卓越した領袖」とたたえ、労働者階級の領袖にかんする問

題に関心を向けた。しかし、かれは労働者階級の領袖にかんする問題を「いわゆる偉大な人物にかんする問題」すなわち傑出した歴史的人物、個人にかんする問題として考察した。かれは労働者階級の領袖と個別的な歴史的偉人についての問題をそれぞれ別個の問題としてとらえることができなかった。それは、かれが領袖の問題を提起しながら、シーザー、アウグストゥス、クロンウェル、ティエール、ミニェ、ギゾー、ナポレオンなどのような人物の系列で論議したことからもうかがい知ることができる。

レーニンも領袖問題を提起しているが、やはり正しい理解に到達しなかった。かれは著書『われわれの運動の緊要な諸課題』で「歴史上どの一つの階級も、それが運動を組織し、運動を指導する能力をもった自己の政治的領袖や自己の先進的代表たちを出さないでは支配を達成できなかった」(『レーニン全集』第 4 巻(2)246～247 ページ)と指摘し、『共産主義における「左翼」の小児病』では、「政党は通例として、もっとも権威があり、有力で、経験のある、もっとも責任ある地位に選抜された、領袖と呼ばれる人物たちからなる、多少固着したグループによって指導される」(同上第 31 巻 29 ページ)と指摘している。

このことからわかるように、レーニンも領袖を民衆の唯一の代表と見ないで「領袖たち」と述べており、それを「先進的な代表たち」「多少固着したグループ」として理解している。かれは領袖をすぐれた個人として理解したことから、歴史の発展で人民が決定的な役割を果たすか、それとも個人が決定的な役割を果たすかという論議の枠を打破できずに、人民が決定的な役割を果たすという解答を出しているが、それは領袖の役割と人民の役

割を一つに結びつけて見ることができず、両者を分離し対立させるという限界性から抜け出せなかったことを示している。

こうした不明確な限界性をもつ理解をもってしては、社会・歴史を正しい軌道に乗せて成功裏に前進させえないのは明らかである。

金正日将軍は領袖にたいする問題を社会・歴史の発展と人民の運命開拓とにかかわる根本的かつ決定的意義を持つ問題と見て、この問題に科学的な理解を定立した。

将軍は、領袖を中心として考えるのは自分の変わりない思考観点であり、自分はつねに領袖中心論を主張すると述べている。

領袖中心論は領袖にたいする見解と観点、領袖をいただく姿勢と立場にかんする理論である。それは本質において、社会の発展で領袖が決定的な役割を果たし、したがって領袖の指導に忠実であるとき民衆の運命がりっぱに開拓されるということを明らかにした理論である。

将軍は史上はじめて、領袖の哲学的意味と、歴史の発展と変革運動における領袖の地位と役割にかんする問題を体系化し、領袖中心論を完成した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「領袖はあくまでも社会的政治的集団の生命の中心であるというところにその本質があります」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 186 ページ)

領袖とは人民に思想を与え、戦略戦術を与え、団結をもたらす思想・理論の脳髄、団結の中心を意味する。社会的変革運動の主体である人民の脳髄であり、統一団結の中心であり、人民の活動とたたかいを統一的に組織し指揮する舵手がほかならぬ

領袖である、というのが将軍の見解である。
　したがって領袖は歴史上の偉人や名将、君主、王などのような個人ではなく、人民の最高代表である。
　自由と解放をめざすたたかいで領袖の正しい指導を受けられなければ人民は勝利しえない、というのは、歴史の真理である。
　では、なぜすべての成功が領袖の指導を不可欠のものとして求めるのか。それはなによりも、領袖が社会を発展させ、人民の運命を正しく開拓するための科学的な思想・理論を明示するからである。
　洞察力ある領袖は時代と変革の要請、人民の志向と要求を一つに集大成し、体系づけて、科学的な思想・理論を定立する。領袖によって創始され、集大成されたその思想・理論は、人民の運命開拓の進路を示す灯火、道しるべとなる。
　領袖はまた、歴史発展の原動力を準備するうえで決定的な役割を果たす。社会的運動が成功裏に進展するには、その運動をになう力が強力でなければならない。社会的運動をおし進める力とはすなわち人民を結集する力である。ところで人民の結集はひとりでになされるのではなく、一つの中心に依拠してなされる。全人民の団結と結集つまり社会的凝集力を可能にする中心がほかならぬ領袖なのである。
　真正な領袖をいただくとき、人民はそのまわりにかたく結びついて一つの社会的・政治的生命体をなし、強力な主体を形成する。また領袖の指導を受けてこそ、人民は正しい戦略戦術のもとに社会を発展させていくことができる。すぐれた領袖はいかに困難な環境のもとでも、非凡な英知と方略をもって革命を成功へと導いていくものである。これは、領袖が人民の運命の開拓と社会の発展で決定的

な役割を果たすということを語っている。

こうした見地からするとき、太陽のない花が考えられないように、領袖のいない革命の勝利は考えられないとする金正日将軍の指摘は、実に意味深長である。領袖が思想・理論の脳髄であり、人民結集の中心であるという思想は、北朝鮮の革命の実践によって検証された真理である。

人民の運命の開拓で決定的な役割を果たすのは領袖であるため、人民が自らの運命を開拓するには領袖の指導を受けなければならない。

今日、北朝鮮が金正日将軍の指導のもとに、全党、全国、全軍、全人民が一体となって動く体系を立て、すべての国事を着実に曲折なくおこなっているのは、領袖中心論が徹底的に具現されているからである。

以上は、領袖中心論が社会・歴史の発展を促し、国家と社会を正しく導く指導の基礎をなす原理であることを物語っている。

人間第一主義・人間中心論、思想論が金正日将軍の実りある指導の方向と方法を規制する基礎原理であるとすれば、領袖中心論は実りある指導を可能にする決定的要因を規制する基礎原理である。

人間第一主義・人間中心論と思想論、領袖中心論を基礎原理としているところに、将軍の指導哲学の科学性と活力がある。実に人間第一主義・人間中心論と思想論、領袖中心論を基礎とする将軍の政治哲学、革命哲学は人民を百戦百勝へと導き、歴史の発展を加速する鼓舞的な旗じるしである。

Ⅰ　人民大衆中心の歴史原理

歴史にも受難の時期がある。1950～1960 年代にマッカーシー旋風が荒れたが、近年は反社会主義の熱風が歴史を騒がしている。

史学者のフランソア・フェージットは、「共産主義とは資本主義から資本主義に帰るもっとも遠い道」であるという「新発見」をして西側世界の人気を集めた。いうなれば、社会主義は歴史の必然ではなく、資本主義の発展途上に出現した偶発的な「腫瘍」にすぎないということである。

ところで、一時ロシアで共産主義の旗手をつとめたゴルバチョフは、クレムリン宮殿に居座って資本主義を引き入れ、赤い革命に沸いていた強大国ソ連を崩壊させた。これと時を同じくして、ブッシュは今日の時代は社会主義が資本主義のもとに帰ってくる時代であるとする「新世界論」を唱えた。

まるで「嘘をつくなら壮大な嘘をつけ」というヒトラー式哲学が歴史を後戻りさせているような感じをいだかせている。ところで、そのような虚説をもって歴史を後戻りさせることができるであろうか。

16 世紀の予言者ノストラダムスがフランス王アンリ二世が剣客の手にかかって死ぬであろうと予言したことが当たって世人を驚かせたものだが、フェージットにしろまたゴルバチョフやブッシュにしろ、おそらく歴史の前途を正しく予言したとは思われない。今日の状況は、正しい歴史認識が人類にとってどれ

ほど重要であるかを示している。ともかく、いかなる逆行作用が働くにしても、歴史は本然の意志に従って流れるものである。

歴史の本然の意志とは、その主体である民衆の意志であり、志向である。自由で平等な世の中で生きようとする民衆の志向と意志はなにものをもってしても阻むことができない。したがって歴史の流れに従う指導者は成功し、そうでない指導者は失敗を免れないのである。

今日の大混迷のなかでも歴史の舵を正しく取っているのは、ほかならぬ金正日将軍である。将軍は科学的な歴史哲学を持ってもろもろの非科学的歴史観の妄言を抑え、歴史を正しく導いている時代の指導者である。

1　歴史は自主性をめざす闘争の歴史である

歴史を正しく導くためには歴史の意志に従い、歴史を先導すべきである。それは、歴史の主体である民衆の志向と要求を汲み、それを貫いていくということである。

歴史は人類の出現とその発展過程の総体である。歴史をかえりみるのは、そこから有益なものと無益なもの、必要なものと無用なものを見分けて教訓とすべきためである。歴史はいまなお自らの軌道に乗って流れているが、自己の運命に不安を覚える人びと、歴史の流れが気にくわない人たちによってねじまげられ、そのために人びとのなかに混乱が生じ、歴史の進行にブレーキがかかる状況もつくりだされている。

福山の「歴史終末論」やハンティントの「文明衝突論」がそれである。そうした理論は人びとに未来にたいする悲観や絶望をも

たらしている。「新人間機械論」は現代的技術文明の発展があたかも人間を疎外するかのようにねじまげて、人類が「難破船の乗客」の運命にあると騒ぎたてているが、これは歴史の発展に関心がなく、未来のない人たちの境遇と利害関係を合理化する一つの詭弁にすぎない。

歴史には直線だけでなくジグザグもあり、成功とともに失敗もありうる。歴史の舵が正しく取られたときは勝利の前進をし、さもないと失敗と挫折の苦杯を喫するものである。

ここでの問題は社会・歴史の本質がなんであり、社会・歴史の正路がどこにあるかということである。ところがこれまでは、それにたいする科学的な理解が定立していなかった。社会・歴史を観念論的な立場から見ようが唯物論的な立場から見ようが、いずれにせよこれまで存在してきたすべての見解は、歴史をその主人である人間を離れて考察する皮相的な理解から抜け出せなかった。

ヘーゲルにとって歴史は「絶対理念」が自己を意識していく過程であった。いかなるものにも依存しない自己の独立的な「絶対理念」が自己発展の一定の段階に従って歴史を創造したとするのがかれの主張である。ヘーゲルは、「絶対理念」が自己の発展を展開していく過程で、世界史は東方世界、ギリシア世界、ローマ世界、ゲルマン的世界の 4 段階をへたが、この 4 段階は人類の少年期、青年期、成年期、老年期に当たるとした。

ヘーゲルのこうした主張は、本質において、歴史とその発展行程を非現実的、非科学的なものとして見る誤ったものであり、歴史が搾取階級の利害関係にあわせて決定されるかのように見る、ねじまげられ、転倒された理解であった。かれが「すべて

の現実的なものは理性的であり、すべての理性的なものは現実的である」として、プロシア専制政治を理想化し、18 世紀のフランス・ブルジョア革命を「荘厳な日の出」「新時代の到来」とたたえたのは、かれの階級的限界性を見せるものであった。だからヘーゲルは、社会発展のための革命を「無知な」人間たちの「たわいのない行動」とののしるまでにいたったのである。

フォイエルバハは自然にたいする見解では唯物論者でありながらも社会・歴史にたいする見解では観念論的立場に立っていたが、それもかれの階級的立場にかかわっていたのである。

歴史にたいする科学的な理解を定立したのはマルクス主義である。

マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』で、一定の歴史的時代の物質的生産と、そこから必然的に発生する社会・経済制度は、社会の政治史および精神史の基礎をなし、それに相応して人類の歴史は社会発展の各段階における被抑圧階級と抑圧階級、被搾取階級と搾取階級間の階級闘争の歴史であったと見ている。一言でいって、マルクスとエンゲルスは、「これまでに存在したすべての社会・歴史は階級闘争の歴史であった」と見ている。かれらは、自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、工場主と労働者、簡単にいって抑圧者と被抑圧者は互いに敵対的関係にあって、あるいは隠蔽されたしかたで、あるいは公然と、たえざる戦争をくりひろげてき、こうした闘争過程がすなわち社会・歴史であると強調した。これは階級的観点の見地からして、正しい指摘であった。とはいえ階級闘争が人類史のすべてだとはいえないのである。

人類の歴史を階級闘争の歴史と見たマルクス主義創始者たち

の見解は、労働者階級をはじめ被抑圧階級の解放問題を前面に提起することを使命としていたかれらの任務の見地から見るとき、正しい指摘であったと強調してよいであろう。

また、マルクス主義は物質的・経済的条件が社会・歴史の発展で規定的な役割を果たすという唯物史観の原理から出発して、人類社会の歴史は物質的富の生産様式の交替の歴史であると規定している。

もし、マルクス主義的な見地から、社会の歴史を物質的富の生産様式の交替の歴史、あるいはたんに階級闘争の歴史とのみ見る立場に立つならば、革命と建設を指導するうえで科学性が保たれず、そのために失敗も免れないであろう。これは社会主義が挫折した東欧諸国の教訓が立証している。

旧ソ連をはじめ東欧社会主義諸国ではマルクス主義社会・歴史観の立場を教条主義的に適用したことから、階級闘争とプロレタリア独裁の一面だけを絶対視して各階層民衆の政治的・思想的統一団結を弱め、変革の主体を強固にきずくことができなかったし、また、生産力の発展と物質的富の生産的成長にのみ偏って、民衆の意識の改造と政治的・思想的陣地の強化に相応の力を振り向けなかった。

その結果、帝国主義の思想的・文化的浸透と瓦解策動を防ぐことができず、社会主義の挫折をきたすという悲劇を味わった。

これは歴史にたいする正しい理解の確立が社会・歴史の発展でいかに重要な意義を持つかを示す例証である。

歴史の本義にたいし科学的な理解を定立したのは金正日将軍である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史である」（『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 23 ページ）

自主性を擁護し実現するための人民の闘争の歴史がほかならぬ人類の歴史であるというのが将軍の歴史観である。

人間の本質的属性を自主性と見、そこから出発して、歴史とは人間がその自主性を擁護し、実現するための闘争の歴史であるということを科学的に定立したのは、歴史にたいする新しい発見であり、歴史の理解における一つの革命であった。なぜなら、それは歴史をその主体である人間を中心にすえ、人間の本性から考察した科学的な定式化であるからである。

一般的に運動の特徴は、その運動の物質的担い手の本質的属性によって規定される。したがって社会的運動の本質的特徴もその主体である人間の本質的属性にもとづいて規定されなければならない。社会的運動の主体は民衆であり、民衆は自主性を本質的な属性としている。

民衆の自主性は自然と社会と自分自身の主人となって生きようとする要求として表現され、社会的運動は民衆のそうした要求を実現するための運動である。これはすべての歴史的運動が民衆の自主性、自主的な要求を実現するための運動であることを物語っている。

発展過程の見地からするとき、人類の歴史は歴史の主体である民衆の自主的な要求と創造的能力の増大過程であり、その現実的な実現過程である。言いかえれば、人類の歴史の発展過程は歴史の主体である民衆の自主性が増大し、よりよく実現されていく過程である。

人間はいかなる従属や束縛をも排して自由に生きようとする

性質を生命としているために、歴史が自主性をめざす闘争の歴史となるのはまったく当然なことである。

階級闘争も人民の階級的解放をめざす闘争であるが、それは自主性をめざす闘争の一つの側面にすぎない。階級闘争を自主性をめざす闘争のすべて、社会・歴史をたんに階級闘争の過程として考察するのは、一面的な理解である。人間は階級的解放とともに民族的解放を実現し、さらに自然の束縛からも解放されなければならない。これは社会・歴史をたんに生産様式の交替の歴史と見たり、階級闘争の歴史とのみ見る見解が断片的な、限界性を持つ理解であることを語っている。

金正日将軍は、社会・歴史が人民の自主性をめざす闘争の歴史であるという理解から出発して、社会発展の基準についてもユニークな理解を確立した。

社会がどの程度発展したか、そして社会の発展程度を規定する基準はなにか、ということは、社会・歴史にたいする正しい理解を確立するうえで、きわめて重要な意義を持っている。それにもかかわらず、これまで社会の発展程度を規定する明確な基準がなかった。

マルクス主義で社会の発展程度を規定する規準は、生産手段の発展程度、生産力の水準がどのようなものであるかということであった。

マルクスは『哲学の貧困』で「挽き臼は封建君主が支配する社会を生み、蒸気製粉機は産業資本家がいる社会を生む」と言った。レーニンも生産力が「社会的進歩の最高基準」であり、「社会の発展の基本的尺度」であるとしている。これはマルクスやレーニンが社会の発展程度を規定する根本的な基準を、生産手段、生産

力の発展程度に求めたことを示している。
　こうした見解の根本的な誤謬は、社会の発展程度を社会発展の主体である人間、人民を抜きにして考察したことにある。
　金正日将軍は、社会の発展程度を規定する基準がほかならぬ社会の主人である人間の本性つまり自主性、創造性、意識性がどの程度実現されたか、そしてそれがどれほど発展したかにあるという新しい理解を確立した。
　金正日将軍はつぎのように指摘している。
「人間の自主性、創造性、意識性の発展水準によって社会の発展水準が決まり、人間の自主的な思想・意識と創造的能力の向上にともなって社会的財貨が増大し、それによって社会関係も発展します」(同上 286～287 ページ)
　社会の主人である人間の自主性、創造性、意識性が高く、その発揚を制度的に徹底的に保障する社会は発展した社会であり、それを抑制する社会は後れた社会であるというのが将軍の見解である。
　資本主義社会は科学・技術か発達し、物質的富が豊かに生産されてはいるが、人民の自主性、創造性、意識性が制度的に抑制されている社会であるために、決して発展した社会だとはいえない。社会の発展能力もどこまでもその主人である人間の自主性、創造性、意識性がどれほど発揚されうるかによって規定されるべきなのである。
　資本主義社会は生産力の発展と物質的冨の生産で進捗をとげてはいるが、それがそのまま社会の主人である人間自身の発展程度を規定するものではない。精神・文化生活における貧困化、物質生活における奇形化、政治生活における反動化こそ資本主

義社会がかかえている痼疾的な病弊であり、したがってそのような社会を発展した社会だとはいえないのである。

今日、資本主義諸国では、ロストーの「経済成長段階論」が社会歴史の発展にたいする新しい解明であるかのように持ちあげられているが、それは人民を正しい社会・歴史観から逸脱させようとするための試みにすぎない。「経済成長段階論」は社会の発展過程を投資の規模が増大する過程として論じているが、そうすることによって貪欲きわまりない資本家階級の欲求と利益のあくなき増大を正当化しようとしているのである。

トインビーの「循環論的歴史哲学」は歴史の進歩発展を認めず、人類の歴史を古代ギリシア・ローマ以来の歴史の単純な繰り返しであるとして、搾取社会の滅亡の不可避性をおおい隠そうとしている。

かれらは、人類の歴史が互いに孤立して、関連性、継承性のない 21 個の「文明」が平行的に存在し、したがって 2,000 年前のギリシア時代が古代であり、今日の時代が現代であるとする根拠がないとして、十月革命ないし社会主義の出現はチンギス・ハンの戦術的誤りの結果であるかのように歴史を歪曲している。これは、資本主義諸国では社会・歴史を発展させ、国家を導くうえでの正しい目的と方向の基準もなしに、特権階級が「投資意欲」「投資規模」の増大にのみ汲々としており、勤労人民の運命にはなんの関心も寄せていないことを示すものである。

金正日将軍は長年公認され踏襲されてきた歴史認識に終止符を打ち、完全にユニークなチュチェの観点に立脚して、社会・歴史の本質を人間、人民を中心にすえて新たに規定し、歴史発展の方向を科学的に解明した。

将軍は、社会の発展過程はほかならぬその主人である人民の自主的な要求と創造的能力が増大していく過程であり、人民の主人としての地位と役割が高まっていく過程であるとする新しい理解を確立した。

将軍は、民衆の運命を開拓する過程と社会の発展過程を一致させ、人民の自主性を実現するためには三大改造すなわち自然の改造、社会の改造、人間の改造をおこなうべきであるとする真理を明らかにした。自然の改造は人民が自然の束縛から脱して自主的な生活を営むための物質的条件をととのえるたたかいであり、社会の改造は人民が階級的および民族的従属から脱して自主的な生活を営むための社会的・政治的条件をととのえるたたかいであり、人間の改造は人民が古い思想と文化の束縛から脱して自主的な生活を営むための思想的・文化的条件をととのえるためのたたかいである。したがって自然改造、社会改造、人間改造は人民の自主性をめざす闘争の重要な構成部分をなす。自然改造、社会改造、人間改造の全領域で進展があってこそ、人間は自主的な要求を実現して、世界と自己の運命の主人になれるのである。

北朝鮮がたえざる前進発展をとげているのは、社会・歴史へのこうした主体的な理解に立って、人民の自主性、創造性、意識性を不断に高めることに力を傾けているからである。そうしたことは、歴史が自主性をめざす人民の闘争の歴史であるとする理解、歴史の発展過程が人民の自主性の増大する過程であるとする理解の科学性、正しさを実証している。

金正日将軍は歴史にたいするこうした主体的な理解にもとづいて、人民の自主的な要求と利益を擁護し、実現することを社

会発展の総体的な目標、方向と規定し、それを党と国家のすべての活動に徹底的に具現している。

あくまでも素朴で謙虚な民衆的品性、人民のためにすべてをささげる崇高な労苦と高邁な徳性、そして工場や農村、鉱山、漁場、名もない山中の軍営にいたるまで、たえまなくつづけられる現地指導は、歴史を文字通り人民の歴史として光り輝かせようとする将軍の崇高な歴史観の表出だといえよう。

2　社会・歴史の発展で決定的役割を果たすのは人間である

社会を発展させ、歴史を正しく導くためには、それを動かす決定的要因がなんであるかを知らなければならない。社会の発展に作用する要因はいろいろとあろうが、そのなかで決定的な役割を果たすものがある。それを知り、それに依拠する指導者は成功し、2 次的な要因を絶対視し、それに依拠する指導者は失敗するほかない。

社会主義が挫折した国ぐにでの根本的な誤りは、社会・歴史の発展を促す決定的要因を社会・歴史の主体に求めたのではなく、既成のマルクス主義的方法論に立って、客観的な物質的・経済的要因に求めたことにある。

マルクス主義は、社会の発展で決定的役割を果たすのは客観的条件すなわち物質的富の生産様式であると見ている。すべての経済的条件を社会・歴史の規定的要因と見るのがマルクス主義社会発展観である。

マルクス主義は一言でいって、唯物史観にもとづく労働者階

級の階級的解放の条件を解明した学説である。それは社会の発展過程を自然史的過程としてとらえ、生産力の発展にともなって生産関係が発展し、生産関係の総体としての経済制度が当該社会の土台をなし、その土台の上に上部構造がかたちづくられるとする理論を提起した。これにもとづいてマルクス主義は、物質的富の生産様式が社会の性格と社会の発展水準を規定する決定的要因であり、社会の発展過程は、階級闘争を通して生産力と生産関係の矛盾が解決し、古い生産様式が新たな生産様式にとってかわる過程であると見た。

エンゲルスはその著書で、「すべての社会的変化と政治的変化の究極的原因は、人間の頭のなかに、永遠の真理と正義へのかれらの深まる認識に求めるべきではなく、生産様式と交換様式の変化に求めるべきであり、これを哲学に求めるべきではなく経済に求めるべきである」(『マルクス・エンゲルス全集』第 20 巻 301 ページ)と指摘している。

マルクス主義の経済決定論的な立場が、社会的存在が社会的意識を規定するという原理にもとづいていることをあらためて説明する必要はないであろう。生産力、生産様式、物質的富の生産が社会の発展を規制する決定的要因であるとする唯物史観の理解は、必然的に、革命と建設の指導で物質的・経済的諸条件の発展を重視し、それに力を傾けることを基本的な原則としておしだすことになる。

もしこうした立場に立てば、国家と社会の指導が生産力を発展させて物質的富をより多く生産することに偏重し、歴史の主人であり、社会発展のもっとも基本的かつ決定的な要因である人間の発展とその役割の増大には目を向けないという結果を招

くであろう。

もちろん経済決定論的な理解が社会・歴史の発展にかんする観念論的見解を打破して唯物論的見解を確立し、また社会・歴史発展の要因の一つを明らかにしたということで意義は認められるが、それが完全な理解だといえないことも事実である。そして、こうした立場と理解にもとづいて社会主義を建設していた国ぐにが挫折のやむなきにいたった歴史的な事実は、そのような理解の不完全さと、それが実践的に危険性をはらんでいることを実証している。

金正日将軍は、不変の真理とみなされていた既成のそうした誤った理解から大胆に脱皮し、社会・歴史の主体は勤労人民であり、勤労人民の役割が社会・歴史の発展で決定的な役割を果たすということを解明し、社会・歴史の発展を正しい軌道の上で加速させるための根本的な鍵を提供したのである。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「歴史発展において決定的役割を果たすのは客観的条件ではなくて人間です」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版140ページ)

歴史の発展で決定的役割を果たすのは人間であるというのが将軍の見解である。

社会的運動は人間が起こし、人間がおし進める人間の運動である。社会的運動を起こす原因も人間にあり、その運動をおし進める力も人間にある。人間があってこそ社会があり、また社会的運動は人間の要求によって前進するのである。つまり社会的運動を起こす原因も人間にあり、またその運動をおし進める力も人間にあるのであるから、社会を発展させるためには、人

間を覚醒させ、かれらを動かさなければならないのである。こうした意味で、人民を社会・歴史の主体と見、人民の革命的な熱意と創造力に依拠して社会を発展させるのは、きわめて現実的な方途であるといえる。

実際にこの世に全知全能の存在があるとすれば、それはほかならぬ人民であり、人民の力と知恵によって社会のすべてが創造され、歴史が発展するのである。

金正日将軍はこうした理解にもとづいて、社会・歴史の発展過程を主体の運動過程としてとらえている。

マルクス主義は社会・歴史の発展過程を自然史的な過程と見ている。つまり、社会も物質世界の一部分であるから、社会・歴史にも物質世界の一般的な運動法則が作用し、したがって社会・歴史の発展が客観的な法則に従って動く自然史的過程として成り立つと見ている。これについてマルクスは、『資本論』で、「わたしの立場は経済的社会構成体の発展を自然史的過程と見ることにある」とし、レーニンもまた、その著書で同様な見解を表明している。

しかし、金正日将軍はそれとは異なる見解を示した。すなわち、社会的運動も物質の運動であるという点では自然の運動と共通性を持ち、物質世界の一般的法則が作用すると指摘しながらも、「しかし自然の運動には主体がないが、社会的運動には主体があります。自然の運動は客観的に存在する諸物質の相互作用によって自然発生的に進行するが、社会的運動は主体の主動的な作用と役割によって生成発展します」(同上 20 ページ)というユニークな理解を確立した。

自然の運動には主体がないが社会的運動には主体がある。自

然の運動とは異なって、社会的運動は主体の主動的な作用と役割によって生成発展するのである。

実際に、社会的運動は人間の要求によって起こり、また人間の活動によっておし進められる。自然の世界では自然の必然性によって変化発展がなされるが、社会では人間の作用と役割によって、目的意識的におこなわれる運動の法則があるのである。したがって、自然の世界ではその変化発展が自然成長的におこなわれ、その変化はきわめて遅々と、そしてわずかずつ進行するが、社会では変化発展が人びとの要求にあわせて急速にしかも上昇的に進む。人間の主動的な役割によって世界はよりよく人間のためのものに変わり、人間の支配し認識する領域はますます拡大していくのである。

人類の最初の労働用具である石器から鉄器に移るまでには数十万年かかったが、挽き臼を使用したときから蒸気製粉機を生産するまでにはわずか数千年しか経過していない。さらに生産に機械が導入されたときからオートメ化を実現するまでにはわずか数百年を要したにすぎない。20 世紀初、飛行機の製作に成功したときからわずか数十年で宇宙船が作られ、宇宙旅行が可能になったという事実は、人間による世界の改造・発展が自然のそれとは違って、きわめて早い速度で、目的意識的に進められていることを確証している。

社会・歴史の発展も同様である。原始社会が奴隷制社会にかわるまで数十万年を要したが、奴隷制社会が封建社会にかわるのにはわずか数千年、封建社会が資本主義社会にかわるのには二千年内外、そして資本主義社会が社会主義社会にとってかわられるまでには数百年しか要しなかった。これは社会・歴史の

発展が人間の主動的な活動によってなされる、主体の運動過程であることをはっきりと示している。

社会主義を建設していた一部の国で社会主義の挫折を招いた根本的原因は一言でいって、社会・歴史の発展過程を主体の運動過程としてとらえることができず、そのために社会主義の建設を主体を強化し、その役割を高めることを基本にしておし進めることができなかったからである。

社会・歴史の運動を主体の主動的な役割によって発生し発展する主体の運動としてとらえたところに、金正日将軍の歴史哲学の核があり、本質がある。こうしたチュチェの歴史観が将軍の指導をして、勤労大衆を政治的、思想的に覚醒させ、その創造力と無限の力を大いに発揮させる過程にならせ、社会を高い速度でたえまなく発展させるようにしたのである。

将軍は、勤労者大衆の役割はつまりかれらの自主的な思想意識の役割であるとして、革命と建設では思想が基本であり、思想がすべてを決定するという思想論をうちだした。そして、世界を動かす力はカネや原子爆弾ではなく思想であるとして「思想戦」という社会的運動形態をあみだし、「思想戦」と「速度戦」の方法を通して自然と社会の改造・変革でたえざる高揚が起こるよう導いている。ほかならぬここに金正日将軍の歴史的成功の秘訣があるのである。

3　革命は最大の愛である

社会・歴史の発展は変革を通じてなされる。変革・革命をともなわない社会の発展はありえない。

人類史発展の全過程は自然の領域と社会の領域でたえざる変革をともなった過程であった。ここで社会的変革が歴史の前進で決定的な役割を果たすということは、あらためて論ずるまでもないであろう。

では、社会・歴史の前進をもたらす革命とはなんであり、それはどのようにして起こるのであろうか。これについて正しい見解をいだくのは、社会・歴史の発展にとってきわめて重要な意義がある。

なぜなら、ある人たちは歴史の前進を逆行させるような行為をはたらきながらも、それを革命として粉飾しているからである。社会の発展を促す歴史的な変革・革命は、文字通り新しいものを創造して進歩発展に寄与するものでなければならない。

ところで、西側世界の人たちは革命という言葉を好まない。それは、革命という言葉をあたかも、共産主義者たちのぶち壊し、くつがえす行為、つまり破壊と残忍な殺人をともなう行為と理解しているからである。かつて革命に沸いていたヨーロッパ諸国での熾烈な階級闘争がそのような印象、余韻を残したのではなかろうか。南朝鮮で革命を変革と言いかえているのも同じ理由からだと思われる。

しかし、革命という概念は神聖である。革命なしには世界のどのような進歩発展もありえないのである。

革命という概念とその本義についての正しい理解を定立し、革命につぐ革命をもって歴史を不断に前進させているのは金正日将軍である。

将軍は社会・歴史を民衆の自主性をめざす闘争史とする理解にもとづいて、革命を人間愛を花咲かせる聖業とみなす理解に

昇華させた。
マルクス主義は社会・歴史を前進させる基本的な推進力を革命と見、革命を古いものの破壊と新しいものの創造と見た。マルクスはフランス革命の経験を研究して、「革命は歴史の機関車」であるとし、レーニンは革命を古い制度の破壊と新しい制度の樹立とであると見、そうした意味で「革命は被抑圧者と被搾取者の祭典」(『レーニン全集』第9巻171ページ)と言った。
マルクス・レーニン主義において、革命は目的において私的所有の廃止、内容において被抑圧人民の階級的解放であった。
これについてマルクスは、「いかなる革命も旧社会を破壊するものであるがゆえに、それは社会的性格をおびる。いかなる革命も旧政権をくつがえすものであるがゆえに、それは政治的性格をおびる」として、「一般的に革命―現存政権の転覆と古い関係の破壊―とはすなわち政治的行動である」(『マルクス・エンゲルス全集』第1巻503ページ)と指摘している。
ここからなにを知りうるであろうか。マルクス主義が革命を旧社会の破壊と旧政権の転覆、具体的には、古い政権、古い関係の破壊のような政治的行動と見なしているということがわかる。これは、階級闘争とプロレタリア独裁を基本的内容とするマルクス・レーニン主義の本義に根ざした理解であり、私的所有の廃絶と労働者階級をはじめ被抑圧人民の解放が歴史的な課題として提起されていた当時の歴史的条件を踏まえた理解であった。
革命をたんに古いものの破壊・転覆と新しいものの創造と見る理解をそのまま社会・歴史に適用する場合、すべての社会的運動は破壊し、転覆する「政治的行動」の方法によってのみ進め

られるという偏見を生む。しかし、歴史的事実は、社会の発展がたんに破壊・転覆の政治的行動によってのみなされるものではないということを示している。

もし革命にたいする既成の見解を絶対視し、それにしがみつくならば、社会の建設で一連の極左的な誤りを犯し、ひいては歴史の発展にブレーキを掛けるようなことにもなる。これは世界各国における苦い教訓がよく物語っている。

革命にたいするこうした理解を克服して新しいユニークな理解を定立し、それを社会・歴史の発展にりっぱに具現したのは金正日将軍である。将軍は、革命とは目的において人民愛を花咲かせることである、言いかえれば、真に人民を愛するがゆえに革命が必要なのである、人間の自主性を実現する革命こそ人間を完成させる最大の愛だといえる、これは愛の哲学である、と指摘している。

将軍の見解によると、革命とは目的において人民愛を花咲かせ、内容において人間の自主性を実現し、人間を完成させることである。こうした意味で、革命は最大の人民愛だといえるのである。

では、どうして革命が人民愛を花咲かせる聖業となるのであろうか。それは二つの内容として説明できる。一つは、革命が人間の自主性を実現する事業であり、いま一つは、人間を完成させる事業である、ということである。

革命が人間の自主性を実現し、人間を完成させる事業であるという理解は、人間を中心にすえて革命を考察し、その本質を定立したもっとも科学的な定義だといえる。それは、人間は自己の本性的な要求である自主的な要求を実現するために自然と

社会を改造する社会的運動をおこなうのであり、また、人間は自らを自由な人間として解放し、完成させるために不断にたたかいつづけているからである。人間解放、人間完成は人間の最大の目的であり、人民のくりひろげるすべての社会的運動の本質的内容をなしている。革命を通じて人間の解放がなされ、人間が完成していく。北朝鮮で社会の発展を促す革命として、3大革命すなわち思想革命、技術革命、文化革命をうちだしたのは、革命が人間愛を花咲かせるものであるという理解にもとづいている。

思想革命は人びとの頭に残っている古い思想をなくしてかれらを精神的に解放し、完成させるための革命であり、技術革命は人びとを自然の束縛から解放するための革命であり、文化革命は人びとを高い文化・知識を所有し、道徳的に完成した人間に育てる革命である。これは革命がすべてをぶち壊し、殺し、くつがえすといった暴力的な性格のみをおびた闘争ではなく、人間を解放し、完成させる文字通り最大の人間愛であるという真理の正しさを確認するものである。

独裁者、権力の簒奪者はその反歴史的行為を正当化するために、革命という言葉をよく口にする。しかし、政権をくつがえす不法なクーデターが革命になりえず、善良な国民を殺害し、鎮圧する行為が革命として正当化されるものではない。独裁者や権力簒奪者の行為は非人道的、非歴史的なものであるために、それは革命ではなく妄動、歴史を後戻りさせる反革命でしかない。人間を無視し、人間を憎悪するいっさいの歴史的行為は、その様相や性格のいかんを問わず、すべて反革命である。

人間愛、人民愛を目的とする歴史的運動こそ真の革命である。

金正日将軍は革命にたいするこうしたユニークな科学的・哲学的理解を踏まえて、自然と社会を改造し、人間を改造する社会的運動で、暴力と独裁を絶対視する偏向から脱し、人間を育てその自覚と創意を最大に発揚させる方法に依拠している。愛と信頼によって人間を育て、かれらに依拠して新しい社会を建設し、全社会を一つの社会的・政治的生命体として一心団結した大家庭にきずきあげ、自然と社会、人間をチュチェ思想の要求どおり改造していく将軍の実り豊かな指導は、ほかならぬ革命にたいするそうした哲学的理解を踏まえたものである。

北朝鮮で達成されたすべての奇跡的な変革は、こうした革命哲学、愛の哲学を具現したたまものにほかならない。

4　社会・歴史において新しいもの、進歩的なものは必ず勝利する

歴史の発展は古いもの、反動的なものが克服され、新しいもの、進歩的なものが勝利し、発展していく過程である。古いものにたいする新しいもの、反動的なものにたいする進歩的なものの勝利なしに前進はありえず、歴史的・上昇的発展もありえない。そうした意味で、歴史の発展でなにが新しいもの、進歩的なものであり、それがどういう役割を果たすかということを明らかにするのは重要な意義を持っている。しかし、これまで歴史における新しいものと古いもの、進歩的なものと反動的なものにたいする理解が正しくなされておらず、現代もそうした誤った認識が歴史の前進にとって大きな障害となっている。

金正日将軍は歴史の発展にかかわるこの重大な問題の解明に

深い関心を払い、社会・歴史において新しいもの、進歩的なものはなんであるかについて科学的な解明を与え、新しいもの、進歩的なものの決定的勝利にかんする見解を明確に示した。

新しいもの、進歩的なものの積極的な受容、古い反動的なものの断固とした排斥は、将軍の指導の特質である。

歴史をかえりみると、新しいもの、進歩的なものはつねに勝利し、古いもの、反動的なものは歴史の審判を避けられなかった。それは新しいもの、進歩的なものが人民の志向に合致し、歴史の流れにそうものだからである。

しかし、歴史においてはつねに新しいもの、進歩的なものが肯定され擁護されたわけではない。誤った歴史観はむしろその自明の真理を歪曲した。

将軍は誤り硬直したそうした歴史観を正すことの重要性を認めて、社会・歴史における新しいものと古いもの、進歩と反動にかんするチュチェの見解を確立した。

これまで新しいものと古いもの、進歩と反動の規準についてはさまざまな解釈がなされてきたが、それらはいずれも階級的および認識論的限界性のゆえに、正しい解釈にはなりえなかった。

マルクス主義はいっさいの観念論的ないし非科学的なえせ理論に終止符を打ち、唯物弁証法に立脚してその見解を確立したが、それが物質中心の立場からの定立であったために、必ずしも科学的な把握だとはいえない。その一例として、レーニンが生産力を社会的進歩の最高の規準、基本的な尺度と規定したことを挙げることができる。レーニンは生産力を「社会的進歩の最高の規準」(『レーニン全集』第 13 巻 308 ページ)、「社会発展の

基本的な尺度」(同上第 32 巻 298 ページ)などと規定している。レーニンのそうした見解は、物質的富の生産と生産様式を社会発展の決定的な原動力として理解していたことから出されたものである。マルクス・レーニン主義は、社会の生産力の発展を促すことに社会主義の物質的優位性があると見ている。レーニンは社会主義の最終的勝利は労働生産性において資本主義にうちかつことにあるとしているが、そうした見解には限界性がある。

社会は人間の集団であるため、社会の良否を見分ける規準はあくまでも、その社会の主人である人間の利害関係の見地から設定されるべきである。つまり、その社会が人間にとってどれだけ有益な社会であるかによって、その進歩性が規定されるべきである。実際、人間が社会的関係を作り、社会的富を創造しているのであるから、人間の創造したその社会的富や社会的関係が、人間の自主的な要求をどれほどみたし満足させているかを見て社会の進歩性を判別するのはきわめて当然なことである。

生産力の発展水準や物質的富の大きさについていうならば、それは決して人間そのものを意味せず、またどの社会でも人民に仕えるものだとはいえない。いかに物質的富が豊かに生産されても、そして生産力の発展水準がいかに高くても、それを創造した人たちがその主人、享受者になれないとしたら、そうした社会は発展した社会、進歩的な社会とはいえない。物質的冨や生産力はそれを利用する人たちの要求と利害関係に従って利用価値が異なるものである。現実的には、生産力の発展水準が高い段階にあり、物質的冨が相対的に多く生産される国であっても、勤労者の雇傭条件や生活水準では、その国より生産力の

発展水準が劣っている国のそれに比べて、かえって低いという例もある。このことは、社会の絶対多数をなす勤労人民の自主的な要求と利益の充足程度によって社会の進歩性を評価することこそもっとも正しい科学的なものであることを実証するものである。

元来、資本家階級は有産者からなり、労働者階級は無産者によってかたちづくられている。したがって最終的には社会主義が資本主義よりも生産力の発展で先行するであろうが、最初から優位を占めるのは難しいといえる。生産力は封建社会にも資本主義社会にもそして社会主義社会にもあるもので、生産力がより発展しているか、後れているかというのは相対的な優劣であって、絶対的なものではない。社会主義社会の生産力が資本主義社会のそれより劣っているとしても、それは社会主義の本質的優位性を損うものではない。社会主義の絶体的優位性は社会主義が人間の自主的な本性にかなった社会であり、人びとが人間として享受すべき政治的生命を持って互いに助け導きながら一つの社会的・政治的生命体をなし、誇らしい生き甲斐のある、主人らしい生活をおこなうところにある。

旧ソ連で社会主義が崩壊したのは、その経済力や軍事力が弱かったからではない。旧ソ連は経済力で世界第 2 位の経済大国であったし、軍事力では米国と互角あるいは優勢であった。これは生産力の発展水準や経済力の発展水準が決して社会の発展水準ないしその進歩性を規定する決定的要因になりえないことを示している。

このように社会の進歩性をたんに生産力の水準、生産様式の発展程度によって規定するならば、それは大きな誤りを犯すこ

とになる。なぜなら、そうした場合、機械技術が発達し、物質的富が豊かに生産されている資本主義社会がもっとも進歩的な国と認識されかねないからである。現実的に、西側の資本主義諸国は生産力が急速に発展し、物質的富の生産水準が高いとしても、それらの国は決して進歩的な国とはいえない。実際、それらの国では、資本家階級などの特権階級は政治的権利を行使し、豊かな物質文明を享受しているのにひきかえ、労働者、農民をはじめ絶対多数の勤労人民は政治生活と経済生活で主人の地位につけないのはもちろん、常時、生存権の脅威にさらされているのである。

金正日将軍は誤った社会発展観を正し、社会の現象を正しく見る明確な規準を示した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「人民大衆の志向と要求は、あらゆる社会現象の真理性を見分ける基準であり、革命実践の指針であります」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 248 ページ)

将軍が指摘しているように、社会現象の真理性を見分ける規準は人民の志向と要求である。人民は社会・歴史の主体であるため、社会・歴史の発展に利害関係を持つのも人民であり、また、社会・歴史の発展を促すのも人民である。民衆が社会・歴史の発展に利害関係を持つのは、自己の生命である自主性を実現せんがためである。人間は自己の自主的要求を実現するとき、自由な存在になる。したがって民衆は自己の自主的要求を実現するために、自由で幸せな社会をめざして社会・歴史の発展に積極的に参加するのである。

社会の発展がどのような方向に、そしてどれだけ速く発展す

るかということは、全的にその主体である人民の参与程度にかかわっている。人民の自主的要求にかなう社会は進歩的な社会である。また、社会がどの程度に発展した社会であるかということは、社会の主人である人民の自主的な要求と利益がどれほどりっぱに、そしてどれほど円滑にみたされているかによって規定される。いかに生産力が発展し、物質的富が豊かに生産されていても、それが人民に奉仕するものでなければ、そのような社会を発達した社会、進歩的な社会とはいえないのである。

金正日将軍はこうした規準にもとづいて、社会・歴史の発展で新しいものと古いものがなんであるかについて科学的な定式化をおこなった。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「歴史の発展過程で人民大衆の自主性の実現に寄与するのはまさしく新しいものであり、反対に人民大衆の自主性の実現をおさえるのは古いものです」（同上 174～175 ページ）

新しいものとは勤労民衆の自主性の実現に寄与するものであり、古いものとは勤労民衆の自主性の実現を抑えるものである。

すべての価値評価の主体が人間であるように、社会・歴史を評価するのもその主体である民衆である。人類史をひもとけば、社会・歴史を創造し、発展させてきたのは民衆であるということがわかる。社会・歴史の発展に利害関係を持つのも民衆であり、それをおし進めていく力も民衆にある。民衆があって歴史があり、民衆の役割があってこそ歴史の発展があるのである。したがって、社会・歴史をその主体である民衆を中心にすえて評価するのはきわめて自然な正しい方法である。言いかえれば、社会・歴史の発展を評価する権利は民衆にあり、民衆の志向と

要求がその評価の尺度になる。
　それでは社会・歴史評価の基準となる民衆の志向、要求とはなんであろうか。それは民衆の自主的要求である。民衆が自主性の実現を望むということは、民衆が自主的に生きようという要求、つまり自主的な要求が実現するのを望むということである。
　民衆は自主的要求を実現してはじめて自由な存在になれ、自己の運命の主人、世界の主人になれるのである。したがって、社会・歴史の主体である民衆の自主性を中心にすえ、それを基準として見るとき、民衆の自主性の実現に寄与するもの、それに合うものが社会・歴史における新しいものであり、それを抑えるものは古いものだという結論が引き出されるのである。
　金正日将軍は新しいものと古いものへのこうした科学的で現実的な理解にもとづいて、新しいものが勝利し、古いものが滅ぶのは歴史発展の動かしがたい法則である、と指摘している。古いものが新しいもののように見せかけられ、死を前にしているものが一時蘇ったように見えることもあるが、古いものは死滅する運命にあるために前途がなく、他方、新しいものは曲折をへることがあっても必ず勝利するという歴史の法則は不変である、というのか将軍の見解である。
　将軍は、新しいものと古いもの、進歩と反動についてのこうしたチュチェ思想的な理解を哲学的信条として、革命と建設そして世界の発展に対している。民衆の自主性を擁護し、実現するのが新しく進歩的なのであり、民衆の自主性の実現を抑えるものは反動的であり、古いものだという真理を哲学的信条とみなしているがゆえに、将軍の政治はつねに、新しいもの、進歩

的なものを徹底的に擁護し、実現する一方、古いもの、反動的なものは容赦せず一掃することを特徴としている。

将軍はこうしたチュチェの観点から、人類の関心の的となっている社会主義と帝国主義の運命について、明白かつ科学的な時間表を示した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「(略)資本主義は、封建的従属からだけでなく、資本主義的搾取と抑圧からも脱し、社会の完全な主人になろうとする人民大衆の自主的要求を抑圧することによって、歴史発展に逆行する古いものになりました」(同上 175 ページ)

将軍は社会主義こそ勤労民衆の自主的な本性と社会発展の要求に即した新しい社会であると指摘している。社会主義は民衆の自主的な要求と志向に即した社会であるために新しいものであり、資本主義は民衆の自主的な要求と志向を抑える社会であるために古いものである。

社会主義が新しく、資本主義が古いということは、社会主義と資本主義がかかえている根本的な性格から引き出された結論である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「搾取と抑圧から脱し、国家と社会の完全な主人になろうとする人民大衆の要求を実現する道は、社会主義の道以外にありません」(同上)

社会主義は自主であり、資本主義は従属である。社会主義が自主であるというのは、社会主義が自己の運命の主人となり、自主的に生きようとする人間の要求が実現する社会だということであり、資本主義が従属であるというのは、資本主義が極少

数の搾取階級、支配階級を除く絶対多数の民衆が政治的に、経済的に従属を強いられる社会だということである。

資本主義のもとで生産力が相応の発展をとげ、そして、生産労働に従事する勤労者の数が減って管理、技術、サービス部門など第 3 次産業に従事する人たちの割合が増大し、絶対的貧困化の法則が作用しなくなったとしても、勤労者が主人としての自由と権利を行使できずにいることは厳然たる事実である。資本主義のもとで絶対多数の勤労者は、政治的にも経済的にも主人としての地位と権利が保障されておらず、経済的、政治的に支配者の地位にいる特権勢力に従属させられている。そうした意味で、社会主義は自主であり、資本主義は従属であるというのである。主人になるべき人たちが実際に自主権を行使する社会主義は、そのことのために新しいものであり、主人であるべき人たちの自主権が蹂躙され、従属を強いられている資本主義は、そのことのために古いものなのである。

今日、米国人たちは自ら米国の没落を展望している。ポール・ケネディーの『アメリカ衰退論』をはじめ米国が下り坂を歩んでいるとする書物が国内外で大量に出版されているのだ。

では『アメリカ衰退論』の論拠はなにか。これについてプリンストン大学のロバート・ガルフィン教授は二つの要因をあげている。アメリカという巨人の墜落はなによりも、その内的要因すなわち米国経済が非正常な資本主義的性格によっていまや成長の頂点に達し、もはや下降ないし停滞を免れなくなったというものである。膨大な軍事費の支出と財政危機がその原因の一つであり、さらに勤労者の福祉と生産意欲の無視、そこからくる技術進歩の限界、不況の持続と極大化した企業の狂気の利

潤追求が経済の疲弊を招いたというのである。つぎに米国衰退の外的要因は、自国の政治的・軍事的指導の効果を高めるためにとられた過大な軍事費支出が、結果として同盟国のただ乗りを許して資本主義列強間の葛藤を極度にいたらしめ、これが米国経済の膨張係数を限界状態に追いこんだというのである。一言でいって、米国は政治的、経済的に正常発展の軌道からそれ、政治的・軍事的反動化と経済の跛行的、反民衆的なメカニズムによって破産の危機に直面したというのである。人間無視、民衆無視、人類無視のそうした非正常な生存戦略は、米国衰退の加速化を招くことになった。これは米国が古いものを代表する国であり、もはや未来を喪失したということを示唆するものである。

東京地下鉄でサリンガス事件を起こしたオウム真理教団の暗躍は、日本という経済大国が内部の腐敗した国であることをまざまざと見せつけた。オウム真理教は、1997 年から 2003 年のあいだに「地球の最後」が到来するとし、1997 年、1,700 万の東京都民を殺人的な恐ろしい悪夢にもだえさせようと計画した。かれらの殺人計画はあくまでも非人道的なものではあるが、それは未来のない極度に腐敗した資本主義的日本にたいする憤りの爆発であり、また不安な社会的風土からの逃避の道を求めて彷徨する者たちの精神病的な発作でもある。

資本主義社会は、物質的豊饒を誇っているが、そこでは絶対多数の国民大衆が疎外され、極少数の特権階層、有産者階層が主人となっている社会である。そのような社会が正義の社会、進歩的な社会といえるはずはない。

資本主義社会では物質生活の不平等をなくせないばかりか、

高まる物質生活と貧困化する精神・文化生活間の不均衡、勤労民衆の自主的要求と悪化する政治生活間の不均衡をなくすこともできないのである。このような不平等と不均衡をなくし、勤労者大衆の物質生活と精神・文化生活、政治生活をつりあいよく発展させる道は社会主義への道しかない。しかし、帝国主義者はその階級的本性のゆえに資本主義を捨てようとしないばかりか、人間の自主的本性とはうらはらにますます反動化しているのである。

社会主義社会は勤労民衆の自主性を擁護する社会であるがゆえに進歩的な社会であり、資本主義社会は民衆の自主性を抑える社会であるがゆえに反動的な社会なのである。

社会・歴史における新しいものと進歩、古いものと反動についての弁証法的相関関係をチュチェの観点から解明し、そこから社会主義の勝利の必然性と資本主義、帝国主義の滅亡の不可避性を明らかにしたのは金正日将軍の歴史哲学上の大成功であり、人類社会発展の方向と展望を新たに明示した人類史的貢献である。米国の経済学者ロバート・ハーミル・ブラナーは東欧社会主義諸国の崩壊について、社会主義は実験で失敗したにすぎず、必ず再生する、と確言している。社会主義の挫折は「間違った社会主義」が崩壊したというのが世評なのである。

金正日将軍は、社会主義の挫折と資本主義の復帰は歴史の必然ではなく、「歴史発展の主流から見るとき、部分的で一時的な現象」にすぎず、「人類史の全般的な流れから見た場合、正常な軌道からそれた一時的な現象」であると確言している。

社会主義の挫折が人類史発展の全般的な流れから見るとき、正常な軌道からそれた一時的で部分的な現象にすぎないという

チュチェの見解は、社会主義の「終焉」と資本主義の「勝利」を喧伝する帝国主義反動派と社会主義の裏切り者にたいする打撃であり、人類の長い理想であった社会主義の勝利への歴史的進軍に拍車をかける鼓舞的な旗じるしである。米国の一政治学者が朝鮮半島を「冷戦の最後の氷山」だとし、北朝鮮の解氷がはじまったと論じたが、なんと愚かな判断であろうか。北朝鮮の社会主義は資本主義へと解氷する性格の社会ではなく、社会主義をより強固にきずきながら歴史の鉄路を驀進する急行列車である。そうした意味でもゴルバチョフのペレストロイカや資本主義復帰の試みは、古いものを蘇らせるための反歴史的な行為であったといえる。

ゴルバチョフは、社会主義が「人間への投資」を減らし、社会主義社会では人間が「所有の実質的な主体」になれなかったとしているが、はたしてそうであろうか。いやそうではない。資本主義は資本家階級など特権層が国家権力と生産手段を独占し、絶対多数の勤労民衆を疎外する社会であり、したがって資本家階級が労働者のために投資するわけがない。また資本主義社会では労働者階級をはじめ勤労者が所有の実質的な主体になれないために、いっさい主人の地位につけないのであり、したがって資本主義が新しいものだとはいえないのである。

勤労民衆をあらゆるものの実質的な主体としておしたて、党と国家が責任を持ってかれらのために惜しみなく投資する社会主義社会こそ新しい社会である。新しいもの、進歩的なものである社会主義への人類の志向と歴史の前進は、なにものも阻むことができないであろう。東欧諸国における社会主義の挫折後、帝国主義の圧殺孤立策動が極限状態に達したなかでも、北朝鮮

が社会主義の道を力強く前進しているのは、金正日将軍のこのような科学的な歴史哲学を闘争の旗じるしとしているからである。

Ⅱ　人民大衆中心の政治原理

金正日（キムジョンイル）将軍は、「政治哲学は指導の羅針盤」であるとし、「哲学の貧困は政治の貧困を生む」という金言を示した（『名言集』92ページ）。

社会の発展は政治の先導によって促されるが、政治が社会の発展で肯定的役割を果たすには、正しい哲学がなければならない。正しい政治哲学は実りある指導を実現する根本的前提である。

したがって科学的な現実的政治哲学を持つ指導者は、歴史を前進させ、民衆の意にそう政治をおこない、社会の発展に貢献するのである。

過去、国家社会の指導的地位を占めていた人たちは、自己流の政治哲学を持とうとした。しかし、進歩的立場にあった人といえども正しい政治哲学を持てなかったのが実情である。かつての政治哲学は、その性格と様相の多様さにもかかわらず、例外なく政治の主人であるはずの人民を無視し、政治一般を論ずる枠内にとどまった。ところが北朝鮮（チョソン）では正しい政治哲学を持って国家建設と民衆の運命開拓をおし進め、世界を驚かす成功をとげているのである。

金正日将軍の指導が成功しているのは、正しい政治哲学を持ち、それをりっぱに具現しているからである。

金正日将軍の政治哲学は民衆中心のユニークな政治哲学である。

1　人民大衆中心の政治観

政治という言葉は英語では「権謀」とか「ずるい」という意味にもなる。政治はきわめて複雑な社会的領域である。そのような意味でモンローは、「政治は数学になりえない。しかし政治に数学があるとすれば 2 プラス 2 が必ずしも 4 にはならず、22 ともなるような数学」であると言った。

一般的に資本主義社会では、政治とは一部少数の人たちだけが関与するもの、非凡な統率力、催眠術、雄弁などによって成り立つ神秘なものだとする不可知論が濃厚に人びとの頭を占めている。とりわけ知的水準の高い人間であるほど、政治を観客をだます魔術、観客を笑わせる曲芸、観客の涙をそそる人情劇だと考える傾向が多い。それで政治術が政治工学というテクノロジーに発展させられている有様である。

こうして、政治科学は「政治をどのようにおこなうべきか」にかんする科学であり、政治工学は「政治をどのように作るべきか」にかんする技術であると論ずる人たちまでいる。しかし、そのような論議は、数学を人間史に適用しようと試みたデカルトや、代数方程式をもって倫理を説こうとしたトーマス・ホッブズの方法論を源流とする非科学的、非現実的な思いつきにすぎない。

とにかく政治は、久しい昔から人びとの階級的利害関係と結びつけて解釈されてきた。中国の老子は、「政治を発明した者が悪を発明した」としたし、またある人は、経済が富の生産と分配を意味するならば、政治は「権力の生産と分配」だといえると主

張した。

政治の実現方式を念頭において、政治を機能の側面から考察する傾向もある。そこから、政治を演劇と見たてて政治家は俳優、演壇は舞台、国民は観客、演説の原稿はシナリオだとしながら、政治家を統治、行政のほかに闘争を専門とする者たちとみなす人たちもいる。そうかと思うと、カール・シュミットのように「政治とは政府の活動を意味する」と曖昧に表現している人もいれば、「支配権力こそ政治の本質」だとして権力と政治を結びつける見解もある。

ヒトラーは、「政治とは自己の目的達成のために人間の弱点を利用する方法上の技術」、すなわち政治を選ばれた統治者、独裁者の権力行為の技術であるとして、自分の暴虐きわまる狂信的な政策、行為を正当化しようとした。

以上、「政治についてのいろいろな見解を見てきたが、それらを総合して考察すると、政治を公的な支配の手段、統治者、支配者の権力行使として理解する傾向が大勢を占めていたといえる。

政治を統治者、支配者の権力行使だとする理解から、統治者、指導者の気質は当然キツネのずるがしこさとライオンの暴虐性を兼ねそなえたものになるべきだとする見解もあった。

政治にたいする理解を科学的な土台に乗せたのはマルクス主義である。マルクス主義は唯物弁証法的世界観にもとづいて、経済中心主義的な立場から政治を考察した。

このことはレーニンが「政治、これは集中された経済」(『レーニン全集』, 第 33 巻 389 ページ)であると定義したことからも知ることができる。レーニンは政治を経済の集中的な表現として

理解したのである。マルクス主義では、政治と経済との関係で政治が優位を占めるという従来の一般的な見解を退けて、経済的要因が政治的要因に比べて決定的な役割を果たし、経済が政治より優位に立つという見解を示している。

そして、レーニンはこのような立場から、政治を「階級間の関係」(同上第 32 巻 289 ページ)または「階級間の闘争」(同上第 31 巻 453 ページ)と規定したのである。

こうした理解は、経済的に支配的な地位を占めている階級と支配を受ける階級間の闘争がほかならぬ政治的現象であるとする見解にもとづくものであった。こうしてマルクス・レーニン主義は、真の政治とは「支配階級として組織されたプロレタリアート」の利益を実現するための独裁と闘争であるという結論を引き出した。「支配階級として組織されたプロレタリアート」による全社会の支配を政治と見、政治が経済を土台として生まれ、その政治が労働者階級の経済的要求と利益を実現するたたかいになるという理解は、政治を一つの統治手段ないし統治技術だとする見解を克服したということでは大きな前進だったといえるが、それは政治を完全に理解したものとはいえない。なぜなら、そこには政治を生み出し、政治を求め、政治行為をおこなう民衆の姿が見えないからである。政治をただ統治としてのみ理解する場合は、政治方式をたんなる「アメとムチ」と見る限界性から脱け出せないであろう。

金正日将軍は政治にたいするいっさいの誤った理解を克服し、まったくユニ-クな観点から政治の本質を人間を中心にすえて規定した。

将軍は、政治を一定の階級ないし社会の共同の要求に即して

社会の全構成員を統一的に支配し、管理する社会的機能であると規定している。言いかえれば、階級ないし社会の共同の要求に即して人びとの活動を統一的に管理し、指揮する社会的機能がほかならぬ政治である、というのが金正日将軍の見解である。

政治は社会的な機能である。人間の社会的集団が自主性の実現をめざす活動過程で必然的に発生する社会的機能がほかならぬ政治である。内容的に見て、政治は、一定の階級ないし社会の共同の要求と利益に即して人びとの活動を統一的に組織し、管理する社会的機能である。経済が物質的富を生産、分配、交換し、消費を実現する社会的機能であるとすれば、政治は人びとの活動を統一的に管理する機能である。

政治を社会共同の利益に即しておこなうということは、人びとの自主的な要求と利益に即しておこなうということ、つまり人びとの自主性を管理するということを意味する。政治が人びとの活動を統一させるということは、自然と社会を改造する人びとの創造的活動を管理するということ、つまり人びとの創造性を管理するということを意味する。そして政治が社会共同の利益に即して活動を統一させるということは、人びとの意識性を管理するということを意味する。以上をまとめて言えば、政治とは人びとの自主性、創造性、意識性を統一し、管理する社会的機能である。人びとの自主性、創造性、意識性の管理は決して盲目的にではなく、一定の階級または社会共同の要求に即しておこなわれる。それゆえに政治は階級的性格をおびるのである。勤労民衆の要求と利益に即しておこなわれる政治は人民の政治であり、搾取階級の要求と利益に即しておこなわれる政治は搾取階級の政治である。

金正日将軍は、政治が人びとの自主性と創造性、意識性を統一し管理する社会的機能であり、それが階級的性格をおびるという理解を踏まえて、真の政治は民衆の自主的要求と利益に即して社会を統一的に指揮し、管理する政治にならなければならないという結論を引き出した。

政治にたいするこうした定義は科学的である。なぜなら、この定義が経済を中心に、またはある少数の特権階級、統治者を中心に考察されたものではなく、人間、民衆を中心にすえて考察し、規定されたものだからである。

人間を中心にすえて人びとの本性を擁護し、実現するための社会的機能が政治であるという新しいユニークな理解の定立は、真の人間的な政治、人民的な政治を実現する科学的な基礎をもたらした歴史的功績である。

人民大衆中心のユニークなチュチェの政治観が定立されたことによって、金正日将軍のすべての政治活動は豊かな実りをあげているのである。

2　愛情と信頼の政治

「わが党の政治は人民にたいする信頼と愛情の政治、仁徳政治である」

南朝鮮は政治不在の国である。哲学がないために政治がなく、政治がないために国政は原則がなく、一貫性に欠け、国民生活は混乱している。南朝鮮の『ハンギョレ』紙が「金泳三（キムヨンサム）は国政運

営で哲学も座標もない。すべてが気まぐれになされ、国民の不安と不満は大きい」と指摘したのは当然なことである。金泳三が窮余の策として「世界化」をうんぬんしているが、本人はいうまでもなく、政府もその概念を定義することも、内容を解釈することもできないでいる。そんなことで正しい政治を望むということ自体が愚かしいことである。

　ある人たちは、脱イデオロギー時代に入った今日、もっとも重要な人気ある政治は緑の政治であると主張している。緑の政治とは環境運動政治のことである。環境運動を内容とする緑の政治は人間の生存を保護する政治であり、社会主義にも資本主義にも与しない正しい政治だというのがかれらの見解である。しかし、政治を脱イデオロギー的立場から、そして人びとの要求と利害関係から離れて考察するのは非現実的である。

　では、真の政治とはどのような政治であろうか。この問題については久しい昔から多くの人たちが模索し、そんななかで正しい政治とは民衆のための善の政治、徳の政治であるとする理解が大勢を占めた。

　例えば、墨子は「民に三患あり」とし、それは「飢える者に食べ物がなく、寒さに震える者に衣服がなく、働く者に休息がないこと」であるとした。そしてこのような三患の解決方途は、すべての人がお互いに差別なく愛し、お互いに利益が得られるように交際することであると言った、しかしそれは、搾取階級社会では実現不可能なただの念願、空想にすぎない。善の政治、徳の政治を願ってさまざまな論議がなされながらも、そのための正しい政治形態を見つけることはできなかったのである。

マッキーヴァーは政治形態を君主政治、独裁政治、神権政治、共和政治、多頭政治、民主政治などに分けて考察した。しかし、政治形態にたいするこのような理解は、おおよそそれが誰のための政治か、多数のための政治か、それとも少数のための政治かによって区分されたのであるが、そのような基準は政治形態の進歩性を見分けるうえで一定の意義があったにしても、社会の主人である人民大衆のための正しい政治がどのようなものであるかを示すまでにはいたらなかった。

従来、政治が善でなければならないという意味で、政治は火をもってするのではなく水をもっておこなうべきである、火で燃やし尽くしてしまう政治ではなく水で満たし潤す政治でなければならない、なぜならすべての生命体は水の中で発生したのであるから、政治生命もその例にもれるものではないからであるとする主張もあった。

なかには、政治形式を独裁と民主主義に分けて考察し、正しい政治をおこなうには「おれはイチゴが好きだから、おまえもイチゴを食へろ」といったふうな独裁政治ではなく、「わたしはイチゴが好きだが、あなたはリンゴが好きだと言うからリンゴを食べなさい」といった式の民主政治を具現しなければならないという主張もあった。

李朝時代の宋時烈（ソンシリョル）は「封建王道政治はすべての幸福の源泉」だとしてその政治を神聖視し、正当化しようとした。

いっさいの悪の政治形式に反対しながら、親和協力関係ないし多数者の支配で代表される民主政治こそ正しいものだとする主張も数多く出された。しかしそうした善の念願にもかかわらず、これまで人類は真の政治のモデル、人間、人民大衆のため

の正しい政治形態を発見することはできなかった。
　人類がそれほど望んでいた真の政治は、金正日将軍によってはじめて見出された。それがほかならぬ愛情と信頼の政治、仁徳政治である。
　金正日将軍はつぎのように述べている。
「わが党の政治は人民にたいする信頼と愛情の政治、仁徳政治である」『朝鮮労働党は偉大な領袖金日成同志の党である』19ページ)
　愛情と信頼の政治とは民衆に愛情をそそぎ、信頼を与える政治である。人民にたいする愛情と信頼は人民大衆中心の政治の核心であり基礎である。
　将軍の政治は人民にたいする愛情と信頼を踏まえ、それが貫かれている。人民に愛情をそそぎ、信頼を与える社会的機能が、ほかならぬ仁徳政治であり、人民大衆中心の政治である。
　愛情と信頼は、人民大衆が政治の対象から政治の主人となった社会主義社会では政治の本質をなす。搾取階級の政治は例外なく人民を抑圧し、搾取する政治、人民に背き人民を憎悪する政治であった。
　政治の対象であった人民を政治の主人にならせ、政治を人民のためのものにならせたところに、愛情と信頼の政治の本質的な優位性がある。
　では、金正日将軍の愛情と信頼の政治、仁徳政治の本質的内容はなにか。それは民衆をこのうえなく愛し、人民をあくまでも信頼することである。
　人民を愛するということは、人民の生命である自主性と尊厳を重んじ、人民に献身的に奉仕するということである。人民は

世界でもっとも貴重な存在であり、世界の主人であるがゆえに、人民の要求と利益を重んじ、人民の尊厳を徹底的に擁護し、人民のために献身するのがほかならぬ愛の政治である。したがって愛の政治は、人間の政治的生命を重んずる政治であり、人民の幸せな物質生活を保障するためにたえず気を配る政治である。人民愛は、人民にすべてのものを徹底的に従わせ、人民に献身的に奉仕することを本質的内容としている。

ビスマルクは「鉄血政策」で世界に悪名をとどろかした。かれは、民衆にたいする政治は「鉄と血(武力と弾圧)」であり、それ以外の道はないとしながら、流血的な暴圧政治を実施した。皇帝や天皇、君主は例外なく人民にたいする憎悪と蔑視で貫かれた政治をおこない、またそれによって歴史の審判を免れなかった。

それでは人民を信じるというのはどういうことだろうか。それは人民大衆を自主性の実現をめざす闘争の直接の担当者、主人とみなすということであり、人民大衆を歴史を前進させる原動力として認め、人民大衆に徹底的に依拠するということである。人民へのこうした信頼は、人民が社会・歴史の主体であり、世界でもっとも英知ある有力な存在であるという科学的な理解にもとづいている。

人民が社会・歴史の主体であり、さらに人民大衆が社会・歴史の発展をおし進めるもっとも有力な存在であるため、人民を信頼し、人民に徹底的に依拠するのはきわめて当然なことである。それゆえ人民を信頼し、人民に依拠する政治こそもっとも科学的で正しい政治方式なのである。

ヘーゲルは、人民大衆を「無形のかたまり」「自然成長的、非理

性的な、野蛮な恐ろしいもの」だとして人民をさげすみ、プロシア帝国はそうしたかれの哲学を反動政治の基礎とした。ヘーゲルはまた、革命を「無知な人間どもの妄動」「たわけ者らの妄動」だとして、プロシア専制政体に抗してたたかうドイツ人民を冒瀆した。古代エジプトの支配階級は「大衆を屈服させよ。そこから燃え立つ炎を消しされ」と唱えて人民に露骨な敵意を示し、その正義のたたかいを弾圧した。

チリのピノチェットは、シンパと見なした人たちまで広場に駆り立てて機銃掃射を浴びせ、虐殺した。

歴史は、人民への誤った観点、理解が反動的支配階級の政治の原点であり、またそのために歴史の反動層は苦い終末を告げたことを示している。ムソリーニの最期は、そのファシズムの哲学と関連している。かれは、1926 年 4 月、ジェームスのプラグマティズムにたいするある記者の質問に答えて、「わたしはわたしの政治的成功のために、しばしばウィリアム・ジェームスのプラグマティズムを適用した。わたしはジェームスから行動への信念を学び、生活と闘争における強い意志を学んだ。

これによってファシズムは数限りない多くの成功をとげた」と言った。実際、ムソリーニは強盗さながらのプラグマティズムを政治哲学に採用したことで、そのように恥知らずな独裁的暴君になり、それによってかれは歴史に悪魔としての名を残すことになったのである。かれにとって人民は独裁の対象であった。

民衆を愛し、人民に依拠する政治だけが、人民のための、歴史の流れにそう正しい政治であるというのは、歴史の真理である。

一言でいって愛情と信頼の政治は民衆の自主性にたいする擁

護、配慮の政治であり、民衆の創造性に信をおき、それに依拠する政治である。人間の本性にもとづき、それをなによりも重んじ、擁護する愛情と信頼の政治こそ、もっとも科学的な政治であり、その発見は人類政治史の大転換を意味するものである。

愛情と信頼の政治が人間の本性、人民大衆の地位と役割を踏まえて定立された正しい政治であるために、真の指導者の政治は、当然、人びとを愛し、人びとを信頼し、それに依拠する政治でなければならず、それを政治の基本的な方式としなければならない。このような愛情と信頼の政治の基本的な要求に背く政治は、正しい政治とはいえない。

人民大衆の自主性と創造性をもっとも徹底的に擁護し、実現する政治、人民大衆が社会の主人としての地位を占め、主人としての役割を果たすようにする政治であるところに愛情と信頼の政治の本質があり、その優位性と活力があるのである。

金正日将軍は愛情と信頼が人民大衆中心の政治の基本的な方式であり、その本質的内容をなすという理解にもとづいて、政治を実現する手段である党と国家は権力機関ではなく、人民に愛情と信頼をめぐらす、人民の自主性と創造性の擁護者、保護者、奉仕者にならなければならないという思想を踏まえて、党と国家の全般的活動を指導している。

愛情と信頼の政治は、その目的から出発して政治を実現するうえでも、人民に愛情をそそぎ、信頼を与える方法を適用するよう求めている。

人民を軽んじて指図をしたり命令をするのではなく、かれらのなかに入ってかれらを啓蒙し、かれらと一心同体になって、かれらが自分たちの仕事に献身するよう導く人民的な指導方法

がほかならぬ仁徳政治の方法である。したがって仁徳政治のもとでは、権勢や専横、官僚主義、お目つけ式の活動方法は許されない。

ロベスピェールは「徳の政治」を念願したが、それを実現できなかった。それは、かれが都市と農村の貧民層とくに労働者の要求から目をそむけて、反労働者法の存続と最高賃金制を主張するなど、実践上、人民の立場に立たず、ブルジョアジーの階級的限界性から脱することができなかったからである。

金正日将軍は人民大衆中心の立場を踏まえて、党と国家機関が「人民大衆に権勢をふるい官僚主義的にふるまうのは、みずから毒薬を飲む行為にひとしい」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 236 ページ)と強調し、幹部たちのなかでいっさい反人民的要素が生まれないよう厳重な対策を立て、全社会に人民中心の政治が支配するようにしている。

将軍は信頼と愛情の政治、仁徳政治の本質とその優位性を科学的に解明したうえで、「信頼と愛情で新しい社会を建設しよう！」というスローガンをうちだした。

「信頼と愛情で新しい社会を建設しよう！」という将軍のスローガンには、将軍の政治の総体的な目的と方向が明示されている。信頼と愛情をもって人民大衆中心の社会主義を建設していく金正日将軍の政治がいつまでも成功をおさめるであろうことは疑いをいれない。

「わたしはあなたたちを信じる。あなたたちもわたしを信じるのです」

歴史家は偉人を論じるとき、一般的にかれらに特有の人格的性質を政治と結びつけている。なぜなら、人間関係に現れる偉人の特有な風格と指導力が政治に大きな影響を及ぼすからである。それで、偉人が人民と結ぶ関係を特徴づけている、その哲学的信条がどのようなものであるかが、特に注目の対象となってきた。

支配者や統治者の場合、かれらの人民にたいする関係は反人民的で欺瞞的なものであった。

世界の征服者であったチンギス・カンはどうであったか。かれは 8 頭の馬を略奪するときに力添えしてくれた青年を親友としてたいへん愛したが、その青年がチンギス・カンからもっとも信頼されていた名将ポルジェ将軍であった。また、かれは敵将であったジルコンに信頼を与え、デペ(矢)と呼んで腹心の部将におし立てたという。これはチンギス・カンが部下を信頼をもって遇したことを語っている。. しかしチンギス・カンの信頼は、あくまでも世界の征服者としての自分の略奪的欲望をみたすことの必要から出たもので、人間らしさの欠けた、正義とは縁のない個人的野心を実現するために見せたいつわりの「信頼」にすぎない。かれが歴史上もっとも広大な地域で侵略戦争をおこない、かれの指揮する侵略軍が略奪と破壊、住民の殺害で比類ない横暴な軍隊であったことを念頭におくとき、チンギス・カンの部下にたいする信頼がどのようなものであったかは推測に難くないであろう。破壊と略奪、征服を目的とする横暴な侵略者に真の信頼などありえないのである。

ヒトラーは強盗さながらの恥知らずな信頼の強要者であった。かれは新政府を組織するさい、部下に向かって自分を信じるよ

う強要して、こう言った。「このなかに 4 発の弾丸がある。そのうちの 3 発はわしの協力者である君たち三人が万一わしを見捨てる場合に使うものであり、残りの 1 発は自殺用である」

そのとき部下のカールがルソーになにごとかささやくのを見て、「わしの許可なしにしゃべることは許さん」と怒鳴りつけた。そのあとで、かれは自分の政府の樹立に三人が協力することを決めたと公表した。ヒトラーの「同志観」はこのようなものであった。かれには同志がなかったし、かれの人間関係、かれと部下との関係は、頭ごなしの威嚇と脅迫、命令と服従の関係であった。指揮官は威嚇や欺瞞、強制で同志を獲得することはできない。ヒトラーは結局、腹心から裏切られ、滅亡の運命を免れることができなかった。シーザーは独裁者であったため、かれがそれほど信頼していたブルトゥスの剣に刺されて死んだ。史実はなにを物語っているのか。人間にたいする真の信頼、生死をともにする真の同志的信頼は、人民を心から愛し、人民のためにすべてをささげる真の人民の領袖、人民的指導者にだけ見られるものだということを語っている。

人民から無限の信頼と敬愛を受けている金正日将軍の信頼はどのようなものであろうか。それは人民を天のごとくみなし、それに依拠する信頼であり、先に人民にめぐらす信頼である。人民が先に自分を信頼するよう望む信頼ではなく、自分が先に人民を天のように信じ、それに依拠することによって人民から支持と信頼を受ける、もっとも美しい真実な信頼がまさに金正日将軍の信頼である。

金正日将軍は、ナポレオンは「諸君が予を信ずれば、予も諸君を信ずる」と言ったが、自分はかれとは反対に「わたしはみなさ

んを信ずる。みなさんもわたしを信ずるのです」と話す、これが自分の哲学的信念だと指摘している。

将軍のこの指摘は、歴史上の名将や統治者とは根本的に異なる人民的指導者としての自己の信頼の哲学を集約的に表現したものである。

以前の他のすべての統治者がそうであったように、ナポレオンも人民を蔑視し、その上に君臨した反動的な統治者、支配者であった。かれは連合軍にパリを占領され、1814 年 4 月、エルバ島に流されたが、翌年 3 月 1 日、そこを脱出し、ブルボン封建王朝の転覆を企てておよそ 1,000 名の部下とともに本土に上陸した。ナポレオンはかれの部隊の進攻を阻止するため派遣された政府軍の一部が投降すると、かれらに向かって「諸君が予を信頼する以上、予も諸君を信頼する」と言った。

では、金正日将軍の信頼とはなにか。それは、人民が世界でもっとも貴重な有力な存在であるため人民を無条件愛し、かれらに依拠しなければならないというチュチェの信念である。つまり人民を信頼し、人民に献身することによって、かれらの絶対的な支持と信頼を受ける、そのような信頼である。

信頼にたいする将軍の哲学的信条には、二つの重要な意味がこもっている。

将軍の信頼はなによりも、指導者が先に人民にめぐらす信頼である。

真の指導者は民衆のなかから生まれ、民衆から知恵を学び、民衆の自主性を実現するためにたたかうことを畢生の使命とする。人民の要求と利益を念頭におかない指導者は真の指導者でなく、また、そのような指導者は民衆の領袖とはいえない。し

たがって指導者がまず人民を信頼するのは、真の民衆的指導者に特有な風格である。

将軍の信頼はさらに、指導者と人民のあいだの信頼は心変わりがなく、うわべだけのものでないもっとも真実で永久につづく信頼である。将軍と人民のあいだの信頼は、搾取と抑圧のない人間中心、人民中心の理想社会の建設をめざす崇高な志向と、この念願を実現する道で永遠に運命をともにしようとする不変の意志に根ざす信頼である。

将軍は金日成(キムイルソン)主席の「以民為天」の思想を座右の銘とし、つねに人民を熱烈に愛し、限りなく信頼している。そのため、将軍の人民にたいする信頼は、いささかもうわべを飾らぬ、もっとも清らかな真実にあふれた、熱い信頼である。

革命の同志と人民にたいする将軍のこのような汚れのない真実な信頼があるからこそ、人びとは将軍を絶対的に崇敬し、信頼し、将軍に自分たちの運命を全的に依託するのである。

将軍と人民大衆のあいだにはなんの間隙もなく、そうした信頼にもとづく将軍と人民間の強固な結びつき、団結を崩すどのような力もこの世にはありえない。

金正日将軍はこのような信頼の哲学をもって、つねに同志と人民のなかに入り、人民と苦楽をともにしている。そのような崇高な信頼を得ているからこそ、人民は将軍を絶対的に信頼し、崇敬しているのである。

将軍に同志が多いのもまたそのためである。こうして北朝鮮の社会は信頼と愛情の強固な結合体となっている。

北朝鮮で広く使われている「領袖に恵まれている」「人民に恵まれている」という言葉は、愛情と信頼の哲学に由来する言葉であ

り、将軍と人民のあいだの愛情と信頼がもっとも高い境地に達していることを確認する言葉である。

「われわれの方式の哲学」

金正日将軍の愛情と信頼の政治哲学は、政治生活の経緯が複雑な人たちや敵とのたたかいでも適用される政治的方法論である。人民の自主性をめざす政治闘争が人民との団結と協力を通じてなされ、他方、それに反対したり動揺する勢力との闘争を通じてもおこなわれるのは周知の事実である。わが軍がいれば敵軍がいるものであり、新しいものを創造するたたかいがあればそれを妨げる古いものもあるというのは当然である。自主性の実現をめざす人民の闘争は、それに背く動揺分子、反動分子との闘争をともなう。このことから、かれらとのたたかいをどのような方法論にもとづいて進めるかということは、革命を勝利に導くうえでの根本問題の一つである。

歴史と人民大衆のたたかいに逆行する反動層を一掃する基本的な手段は革命的暴力である。しかし、金正日将軍は敵とのたたかいで新しい哲学を駆使している。それは将軍の言う「われわれの方式の哲学」である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「『100 人を殺せば、そのなかに一人の共産党員がいるはずだ』と言った日本帝国主義者のオオカミの哲学に、われわれは『万人を信頼して治めれば、敵が潜入させた一人のスパイはおのずと正体をさらけだすであろう』という、われわれの方式の哲学でこたえるであろう」(『名言集』63 ページ)

人間の憎悪と殺戮は歴史の反動、帝国主義者に特有の体質である。かれらは人間の憎悪と殺戮、人民の抑圧と搾取を通してのみ存在できる反動勢力である。個人のあくなき貪欲と利益の追求を目的とする搾取階級や帝国主義者に人間としての良心や善意、正義などあるはずがない。かれらは、おのれの利益のためとあれば人びとを思いのままに殺し、略奪し、他国への侵略や戦争もためらわない。かれらはおのれの利害関係や利益に対抗する勢力が現れれば、それを除去するために 100 人、1,000 人の罪のない人びとまで平気で殺すのである。

歴史をひもとくと、他民族、他国への侵略をこととした侵略者、征服者は、その地位を維持し固めるために、罪のない人たちを数限りなく、集団的に処刑したという事実をいくらでも見出すことができる。暗たんとした日本帝国主義支配時代、反日救国闘争に奮起した朝鮮の数多くの愛国者を捜し出すという口実で、日本帝国主義者は村を焼き、人びとを集団的に殺害する野獣さながらの蛮行をはたらいた。そうした行為は帝国主義者のおこなう侵略戦争のさなかにひんぴんとしておこなわれている。

それがほかならぬ帝国主義者のオオカミの哲学の表出である。

金正日将軍はこのような「オオカミの哲学」に「われわれの方式の哲学」を対置し、それで敵を瓦解させ、とりこむ戦術を具現した。それがほかならぬ万人を信頼して治めれば、敵が潜入させた一人のスパイはおのずと正体をさらけだすであろう、という哲学である。万人を信頼し、啓蒙すれば、そのなかに潜入した一人のスパイはおのずと正体をさらけだすという「われわれの方式の哲学」は、歴史に逆行し、民衆に反対する意識的な反動分子

は極少数であり、したがって帝国主義の軍隊であろうとも、かれらに階級的境遇を自覚させ、正義と真理にめざめさせるならば、多くの人を必ずや民衆の側に獲得することができるという原理がこもる新しい政治哲学である。敵との闘争や戦争もあくまでも人間相手の対決である以上、不正義の戦争に参加する軍人や人びとが必ずしも搾取階級に仕える反動分子ではないために、かれらを信頼し、かれらを真理にめざめさせれば、正義の側へ導けるというのが、将軍のユニークな政治方式であり、指導芸術である。

将軍は「われわれの方式の哲学」を大衆指導に具現し、以前、国と民族の前に罪を犯した人や、誤った人生行路を歩んだ人たちをも大胆に信頼して包容し、運命をともにしている。大胆に信頼して仕事を任せ、革命の道をともに歩むこと、これが金正日将軍の指導である。

今日、北朝鮮の社会で一心団結がなされて指導者と人民が一つに結びつき、党が民衆の絶対的な支持と信頼を受けている理由の一つがここにある。

実に「われわれの方式の哲学」はかつて革命の対象であったり、革命と反革命のあいだで動揺したりしている人たちにまで信頼を与え、真理にめざめさせれば、極少数の敵対分子を最大限に孤立させ、より多くの人びとを革命の側に獲得するようにする革命的な指導哲学である。

ここに、革命の自主的な主体を質的にも量的にも強化し、革命勢力の決定的優位をつねに可能にしている金正日将軍の成功の鍵があるのである。

3　政治指導者論

6 万の奴隷とともにアポリアで戦死したスパルタクスは、現在もその名を歴史に残している。それはかれが奴隷制度に抗して戦った最初の奴隷暴動の指導者であったからである。人びとはスパルタクスの戦いを通して、指導者の重要性を認識しはじめた。実際、歴史と政治は指導者を抜きにしては考えられない。そうした観点からして、金正日将軍が政治指導者論を政治哲学の内容としているのは、とりわけ重要な意義を持っている。

政治と指導者は不可分の関係にある。それは、政治とはとりもなおさず指導者の政治だからである。

イタリアの愛国者ミニチが「民主主義とはもっともすぐれた、もっとも賢明な人の指導のもとに、すべての人がその責務を果たす制度を意味する」と言ったのは、すぐれた指導者がいてはじめてりっぱな政治が可能だということを示唆している。

進歩的な政治は進歩的な指導者によってのみおこなわれる。ところが、進んだ政治的見解を持ちながらも指導者にかんしては正しい見解、観点を持てない人たちが少なくない。明らかにこれまで正しい指導者哲学が欠如していたのである。

孟子は、支配者は心を使う人間であり、百姓は力を使う人間であるとし、「心を使う人間は人を治め、力を使う者は人の支配を受け、人を治める者は人からもらい、人に治められる者は人を養わなければならぬが、これは天下の法則」であると言った。孟子のこうした見解は、徹底した人民大衆無視、支配者中心の誤った指導者観である。

進歩的な政治は民主主義であるとする見方でも、指導者観はきわめて否定的であった。例えば、法哲学者ケルゼンは、民主主義の理念は「指導者の否定」であるとしている。かれの主張は、指導者一般を否定し、社会・歴史の発展で政治の役割と指導者の役割を分離して考察するきわめて有害な論議だといえる。指導者一般を否定することはできず、民衆に君臨する者と真の人民的指導者とを同一視することはできない。とりわけ、人民の自主性をめざす闘争で、人民の要求と利益を代表する指導者の役割はきわめて重要である。

こうした観点から、金正日将軍は、人民大衆が歴史の主体の地位を占め、役割を果たすためには、必ず指導者と大衆が結びつくべきであると強調している。

「指導者の否定」は、人民大衆の要求と利益を無視し、少数搾取階級と反人民的特権層の利益を守る支配者、統治者を念頭におく場合には、正しいのである。

西側世界で、しばしば、現代が「指導者の受難の時代」であると言われているのは、多くの国で政府の首班や大統領が政治的、道徳的に、経済的に腐敗堕落し、人民大衆と自国を破滅に追いやっているからである。

歴史的に、人民の利益を無視し、搾取階級に仕えた統治者は、例外なく歴史と人民によって否定された。英国のことわざに「政治家とは川のないところにも橋を架けてやると嘘をつく者ども」というのがあるが、これは明らかに搾取社会の統治者を揶揄したものである。

人民のためをはからず、人民を重んじない指導者はもはや指導者とはいえず、したがってその政治は変質し腐敗するほかな

い。正義感の強い、洞察力ある指導者に恵まれれば、人民はその運命を開拓でき、国と民族の繁栄も保障されるのである。
インドが英帝国の植民地的支配から解放されたのは、ガンディに負うところが大きいといえる。ガンディは当時のインド情勢を分析したうえで、インドが英帝国主義の支配を受けざるをえなかった原因を解明し、反英闘争を正しく導いた。当時、ガンディは、「わがインドをこんな有様にしたのは大英帝国ではなく西欧物質主義である」とし、「インドを支配しているのは英国人ではなく、鉄道、電話などを通じた近代文明がインドを支配しているのだ」と指摘した。これは反英闘争の方向と方途を正しく定めるうえの指針となった。この一つの事実は、指導者の役割一般を否定してはならず、「指導者の否定」がすなわち民主と進歩を意味するものではないことを語っている。
では、金正日将軍の指導者論における核心はなんであろうか。それは、どんな人物が人民に支持され敬愛される真の指導者になれるか、そして、人民の指導者はなにをしなければならないか、というものである。
将軍は、真の指導者にとってもっとも重要なことは人民を愛し、人民のためにすべてをささげることである、という思想を示した。
金正日将軍はつぎのように述べている。
「社会主義社会で真の仁徳政治を実現するためには、人民にたいする限りない愛情を体現した政治指導者をおしたてなければならない。社会主義の政治指導者は能力もなければならないが、なによりも人民を限りなく愛する崇高な徳性をそなえていなければならない」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版

380 ページ)

将軍は人民的指導者の第一の表徴は、人民をかぎりなく愛する崇高な徳望であるとしている。

社会主義の政治指導者に能力が不足していれば、社会主義社会の正しい発展を遅延させる結果をもたらすが、仁徳に欠ければ、人民を裏切り、社会主義を滅ぼす結果まで招く、というのが将軍の見解である。

人民にたいする無限の愛情と人民のためにすべてをささげる徳性、これが真の指導者の基本的な品格である。

将軍は、人間愛と、人民生活への関心は、革命家、政治家の真価を問う試金石だと教えている。

指導者に能力が不足すれば歴史の発展を遅延させるが、仁徳に欠ければ人民を塗炭におとしいれ、国を滅ぼす結果も招きかねない。したがって、人民が自己の運命をりっぱに開拓し、国と民族の自主権を守り、繁栄をはかるためには、仁徳をそなえた真の指導者をおしたてなければならない。

北朝鮮が民族と人民の繁栄と幸福を謳歌する民衆中心の社会になりえたのは、全的に偉大な金日成主席と金正日将軍を人民の領袖にいただくことができたからである。金日成主席が人民大衆中心のチュチェ思想を創始し、「以民為天」の政治をほどこし生涯人民のために献身したからこそ、北朝鮮は文字どおり人民の楽園に変貌することができたのである。

金正日将軍は民衆の慈父であり、その運命の救世主である。民衆のなかから生まれ、民衆のために存在し、民衆を自主と繁栄へと導いているのがほかならな英明な金正日将軍である。

人民のためとあれば空の星でも取ってき、石の上にも花を咲

かせるべきだとするのが将軍の座右の銘である。
　将軍は人民をすべての思考と実践の中心にすえ、人民のための思索と労苦で毎日、毎夜をすごしている。握り飯とうたた寝は、人民のためにすべてをささげる将軍の食事であり、休息である。かぎりない人民愛と高潰な徳性が真の指導者の基本的な特性であるとする将軍の哲学的理解、科学的な見解である。
　将軍の指導者哲学のいま一つの重要な内容は、人民の支持と信頼を受ける指導者になるためには人民の指導者としての風格と資質をそなえ、指導者としての責務と役割を果たさなければならない、ということである。
　党や国家の最高地位を占めているからといって、必ずしも民衆の支持、尊敬を受ける指導者であるというわけではない。ラッセルが、権力は「意図する効果を生みだすもの」といったが、これは指導者イコール権力と見る誤った理解である。権力や欺瞞で最高地位を占める人間は人民の支持を得ることができない。人民の支持と信頼を受ける真の指導者となるためには、指導者の資質と風格をそなえ、指導者としての役割を果たさなければならない。うわべやなにかの才幹がその本質的表徴になるのではない。
　しばしば、指導者のことを「決定者」と称している。多くの問題を迅速かつ正確に解決すべき位置にあるため、そう言われているのであろう。しかし、指導者のより決定的かつ根本的な表徴は、人民の自主的な志向と要求と利益を集大成し、新しい思想と理論を生み出す能力であり、人民大衆を結集し、導く政策の作成と指導の能力である。もちろん、このような資質と能力は人民重視観に裏打ちされてはじめて実りあるものとなるので

ある。

指導者の真の権威は、人民への献身的奉仕とその指導力によって保障される。

墨子が、最高統治者は百姓に「雨と陽光を恵む」と言ったが、人民に君臨し人民を抑圧する統治者が、人民に雨と陽光を恵む人民的な指導者になれないということは自明である。人民の側に立った指導者、人民を真に愛する指導者だけが、人民に雨と陽光を恵めるのである。

史家はトロヤ戦争の英雄アガメムノンが遠征艦隊の無事を祈って一人娘のイフィゲネイアをいけにえとして女神アルテミスにささげたことや、イスラエルの英雄エフタが勝ち戦の代償として娘を神にささげたことをたたえている。アガメムノンやエフタは祖国のために最愛の娘までためらいなくいけにえにした英雄であったというのである。

しかし、戦場における勝利を願って娘を神にささげることが、英雄や指導者の決定的な表徴だといえるだろうか。英雄は祖国と人民を愛する汚れのない心と人間の運命にたいする高い責任感をもって真情をささげるとき、人民の尊敬を受ける指導者になれるのである。

金正日将軍は人民の子であり、同時に人民の慈父であるがゆえに、人民と苦楽をともにし、人民に一点のかげりもない明るい生活、ゆとりある生活をもたらしている。

昼夜を分かたぬ将軍の思索は民衆の生活の隅々に及び、その熱情は民衆の意義ある生活と希望のあふれる未来にささげられている。金正日将軍と北朝鮮の民衆は一つの運命で結びついているのである、人民よりも自分一個人の富貴栄達に目がくらん

だ統治者は人民の支持を得ることができず、国を指導する地位を維持することができない。1986 年の人民蜂起で追放されたフィリピンのマルコスは、20 年間の在任中、米国の援助金約 30 億ドルのうち 20 億ドルを着服した。かれの追放後、大統領宮殿の地下室で、かれの夫人イメルダの靴 2,300 足が発見され、スイス銀行の秘密預金が 4 億 7,500 万ドルにのぼるということが暴露された。かれの虐政のもとでフィリピン国民は世界でもっとも大きい貧富の格差に苦しんだ。米国の保護のもとで 12 年間、貧しいニカラグアの軍人独裁者として君臨したソモサは、1979 年に追放されたとき、国民のカネ 2 億 2,000 万ドルを横領して米国の銀行に預金した。

腐敗によって弾劾されたブラジルの元大統領メロは、自邸の庭園を作るのに 250 万ドルを投じたという。ベネズエラ元大統領ペレスも同じく横領罪で追放された。

人民に背き自分一個人の栄華だけを追う者は正しい政治をほどこせず、人民の指導者になれるものではない。

指導者の権威は人民愛と人民を結集する指導力によって保障される。

ネールが愛用していた帽子は、インドが英国の支配下にあったとき、囚人がかぶっていた帽子で、かれが出獄後もそれを脱がなかったのは、監獄内にいようが外にいようが、英国の囚人であることに変わりがないという思いからであった。かれのその無言の身なりは、インド人民が反英闘争に決定的に奮起することを望んだものであり、実際、それはインド国民を決起させる要因となった。

真の指導者の資質と風格は、人民への信頼にもとづくときに

そなわり、固まるものである。人民が歴史の主体であり、動力であり、世界でもっとも貴重な、有力な存在であるという観点に立つとき、指導者は人民の前にこのうえなく謙虚で、素朴な品性を身につけ、人民に依拠して万事を解決していく、万能の鍵の所有者になれるのである。

ヒトラーは『わが闘争』で「大衆は理解力が足りず、よく忘れる」「大衆は支配者を待つだけで自由を与えてもなすすべを知らない」と放言して人民を無視し、「超人」の意志を絶対視した。かれは自分の絶対権力がアーリア族の世界支配を実現する決定版であると誤算し、結局 5,000 万の犠牲者を生んだ第 2 次世界大戦で、数限りない歴史的罪業を犯した末滅亡したのであった。ゲッベルスの『指導者ヒトラー』の神話はこのようにしてとどめを刺された。

人民的指導者の風格は人民にたいする無限の謙虚と素朴、人民の尊重に現れる。人民的指導者の風格、資質はただ望むだけで備わるのではなく、かぎりない人民愛と信頼を政治哲学、信条とすることによっておのずと備わるのである。

人民のなかから生まれ、人民のなかで成長したために、金正日将軍は人民的な風格を備えたのであり、その抜きんでた指導力と無比の胆力と意志は、絶対的な人民愛と信頼にもとづいて身についたのである。この世に全知全能の存在があるとすれば、それは人民である、というのが将軍の信条である。

将軍は、自分はつねに人民の側に立っているとし、誰かが自分にどちら側か、と聞くなら、人民の側だ、と答えるであろうと言い、そして自分を「徹底的な人民派」だと強調している。

民衆への愛情と奉仕は将軍の座右の銘であり、志向であり、

最高の目的である。将軍は民衆のために生まれ、民衆と運命をともにする民衆派であり、民衆派の総司令官である。だからこそ将軍は、民衆が要求すれば石の上にも花を咲かさなければならず、空の星も取ってくるべきだということを畢生の信条としているのである。

　四季変わりなく工場や農村、漁村や炭鉱、鉱山、軍営にいる将軍の偉大な姿は、真の人民的指導者がどのようなものであるかをよく示している。天井から水が雨のようにしたたり落ちる鉱山の切羽にもためらいなく訪れて労働者を激励し、いかに作業量が多くても夜はきっと家へ帰って休むようにと念をおす将軍の深い愛情は、もっとも美しく崇高な真の慈父の愛であり、温かい母親の愛情である。

　先祖代々祖国と人民のために生涯をささげてきた愛国心と人民愛の血筋をうけついだ将軍の思想と指導、風格と徳性はすべて、無限の人民愛で貫かれている。将軍は徹底的な人民派であるために人民の絶対的な支持と信頼を受けており、誰もかちえることのできなかった「人民にめぐまれた」指導者の栄光に輝いているのである。

　人民と歴史に背を向けた者は、たとえおのれを民衆の指導者だと称しても、誰からも信じてもらえない。ネルソン・ロックフェラーがニューヨーク州知事に立候補したとき、かれは自分がビールを好むと大いに宣伝した。米国ではビールが大衆向きのアルコールとされていたので、百万長者の自分をビールと結びつけることによって庶民層の支持を得ようとしたのである。

　強国ソ連を滅亡の道へいざなった政治ブローカー、フルシチョフは、外交の宴席でも歯ぐきの食べかすを指でほじくるしぐさをよくしたものだが、それは自分の庶民らしさを見せびらか

すゼスチャーにすぎなかった。実際、真の指導者の人格や資質、能力は、自分がただそれを望むからといって備わるのではなく、その世界観と政治的信条にもとづいて身につき、固まり、発揮されるのである。

金正日将軍は人間中心のチュチェの世界観にもとづくユニークな指導者哲学を定立し、人民のための真の政治をもっとも成功裏に実現しうる根本問題の一つに明確な解答を与えた。

金正日政治の成功は、以上のようなチュチェの指導者哲学にもとづいているのである。

4　一心団結の革命哲学

国民大団結、国民総和合は指導者の誰もが望むところである。しかしそれはたやすく実現できるものではない。

搾取階級の利益を代表する支配者、統治者が全国民の団結を果たせないのは自明である。個人中心主義にもとづく資本主義社会では、国民の団結など思いもよらないことであり、また社会主義制度が樹立したからといって、それがおのずとなされるものでもない。

歴史上、支配者、統治者によって人民の団結がとげられた例はない。

しかし、北朝鮮では全人民、全社会の一心団結という驚くべき現実がくりひろげられているのである。指導者を中心に全社会が一心団結し、指導者と人民が思想と意志をともにし、同じように呼吸し、歩みもともにしているその一体化した北朝鮮の現実は、世界の驚嘆と羨望の的である。

では、なにがそのような一心団結をもたらしたのであろうか。それはほかならぬ金正日将軍の一心団結の革命哲学である。

一心団結は金正日政治の核心をなす哲学である。将軍はつとに、一心団結を朝鮮労働党の革命哲学、革命における天下の大本とし、党と国家の指導をはじめた初期からその実現をめざして全力を尽くしてきた。

将軍が革命哲学とする一心団結は、全社会、全人民が一つの思想と意志、一つの志向と目的をもってかたく結びつくことである。自主性の実現という同一の目的と志向、一つの思想と意志で団結し、指導者と人民が思想と志をともにし、力を合わせて活動することが一心団結の本義であり、内容である。では、一心団結を可能にする根本的原理はなにか。それは統一と団結の原理である。

将軍は、自分の政治哲学は統一と団結の原理であると指摘している。統一と団結の原理は、一心団結の基礎原理である。

統一について論じたカントは、勤労者大衆による下部統一ではなく、「啓蒙された君主」による「理想的な上層部統一」を絶対視した。「啓蒙された君主」による「上層部統一」とは、搾取階級に反対する勤労者大衆の革命的進出を阻み、プロシア専制政体を維持するための支配階級の統一であった。

ヘーゲルも勤労者大衆を「愚昧な群れ」とみなし、支配階級の勤労民衆との提携や合作に極力反対した。

マルクス主義哲学はドイツ観念論哲学を批判し、その限界性を克服したうえで、弁証法的唯物論を示したが、発展の原因について正しい理解を定立することができなかった。

マルクス主義哲学は、発展の原因を矛盾に求め、そのものが

持つ矛盾の解決をめざす闘争を通じて発展がなされるものと見た。レーニンは「発展とは対立物の闘争」（『レーニン全集』第38巻 506 ページ）であるとし、スターリンは「対立物の闘争つまり古いものと新しいもの、死滅していくものと発生するもの、消滅しつつあるものと発展しているもののあいだにおける闘争は、発展の内容、量的変化の質的変化への移行の内容をなしている」（『スターリン選集』第3巻300ページ）としている。

発展にたいするこうした理解からマルクス・レーニン主義は、対立物の統一を相対的なもの、対立物間の闘争を絶対的なものと見た。統一が相対的であり闘争が絶対的であるとする理解は、自然の世界に客観的に存在する事物現象の運動発展の特性を反映したものだといえるが、それが必ずしも世界の運動発展にたいする完成された理解だとはいえない。矛盾の法則や対立物の統一と闘争の法則を社会現象にそのまま適用すれば、大きな混乱を招きかねないであろう。

歴史的経験は、矛盾の法則や統一の相村性と闘争の絶対性の原理をそのまま社会に適用するならば、左傾的な過ちを犯して歴史の主体である人民の統一団結を果たせなくし、社会の持続的な速い前進が望めなくなるということを示している。多くの国で社会的混乱を引き起こし、社会主義のイメージを汚し、ひいては社会主義の崩壊を招いた重要な原因の一つは、矛盾論を絶対視し、統一の相対性、闘争の絶対性の原理を党と国家の活動に教条的に適用したことにある。なんと苦い教訓であろうか。

フランスの哲学者ミシェル・セルがこのような不合理を克服する意味で「排除し統合する第3の哲学」をうちだした。しかし、かれの「第3の哲学」は科学的な原理にもとづかなかったために、

やはり社会・歴史の発展に寄与する哲学的方法論とはなれなかった。

金正日将軍は社会・歴史に固有な合法則性を明らかにし、それにもとづいて統一団結こそ社会・歴史の発展をおし進める根源であり、原動力であるとする原理を発見し、社会・歴史の主体を強固に固める基礎をきずいた。社会・歴史がその主体である人民の役割によって発展する以上、主体である人民の力の増大が社会・歴史の前進を加速するのである。社会・歴史の発展過程はほかならぬその主体である人民大衆の地位と役割の増大過程である。

人民大衆の力を増大させるためには、それを分散させるのではなく、一つに結集しなければならない。階級や階層相互の利害関係が異なるのは事実である。だからといってそれを絶対視し、たえず軋礫と対立の状態を持続させれば、社会的団結を果たすことができないのである。

資本主義社会であっても、社会の絶対多数をなす人民大衆が自己の要求を実現するためには、一つにかたく結束しなければならない。人民大衆の創造的能力と実力が分散すれば、それだけ社会的変革、歴史的前進を遅らせることになるのである。

ある国では矛盾を絶対視し、一つが二つに分かれ、それらがさらに分かれながら互いにたたかう過程で発展が遂げられるという理論を採用したために、大きな混乱におちいったことがある。

一つが二つに分かれ、それがまた新しい矛盾を生むということを絶対視すれば、統一や団結など考えられるはずがない。一つが二つに分かれるのではなく、二つが一つになり、多数が一

つに結びつくとき、力は増大し、所期の目的が達成できるのである。統一と団結は力であり、勝利である。社会的運動の前進と勝利は、主体である人民大衆の統一と団結を抜きにしては期待できるものではない。

金正日将軍はこのような原理にもとづいて、一心団結にかんする思想をうちだし、それをりっぱに具現した。

一心団結の哲学は変革の主体、社会・歴史の主体をしっかり固めるための闘争で堅持すべき哲学である。一心団結はチュチェの生存方式である。

一心団結は二つの支柱によってなされ、固められる。その一つは思想・意志の団結であり、いま一つは道徳・信義の団結である。一心団結は、全員が人民大衆の自主性の実現をめざす一つの志向と思想、知恵と力を最後まで合わせようとする不変の意志をもってかたく団結するときにはじめて果たせるのである。また一心団結は自主性をめざす闘争の道で互いに尊重し、愛し、心から力となる良心と信義にもとづくとき堅固なものとなる。

思想・意志の団結が一心団結の精神的要因であるとすれば、道徳・信義の団結は一心団結の道徳的要因である。目的意識的な団結、良心的自覚にもとづく団結であってこそ、一心団結が真に強固なものとなる。こうして見るとき、一心団結こそ社会を発展させ、歴史を前進させるもっとも活力ある有力な原動力だといえる。

金正日将軍は、一心団結はおのずと果たせるものではなく、それを可能にする中心の強固性によってなされることを明らかにしている。

一心団結の中心はほかならぬ領袖である。すべての事物現象

には核があり、それを中心にして固まるのと同様に、社会の一心団結は、核となり中心となる領袖なくしては形成されず、形成されても強固なものにはなれない。中心が強固でなく動揺していれば、一心団結が円滑に果たせるはずがなく、また強固になるものでもないのである。したがって、一心団結の固さと威力は、その中心、領袖の偉大さと指導力にかかっている。

一心団結を党の革命哲学、変革運動における「天下の大本」としてうちだし、領袖を中心に全党と全社会の一心団結を果たし、それをたえず固めていくことによって革命と建設を高い速度で持続的に前進させていくところに金正日将軍のすぐれた指導の秘訣がある。人びとがみな助け導きあい、むつまじく暮らしている人間愛、人民愛、人間重視、人民大衆重視の大きな花園を美しくきずいていく金正日将軍のすぐれた指導の源泉は、一心団結の革命哲学である。

5　われわれの方式で生きよう

フィンランドの『ニヘテル』紙は「北朝鮮は世界でもっともりっぱに前進している国」だとし、それは世界の普遍的認識となっている、と付言した。実際北朝鮮は、国家建設や外交政策をはじめすべての分野で自らの見解、主体意識を持ち、それによって、世界の錯綜した渦のなかでもゆるぎなくわが道を確実に進んでいる。

北朝鮮は「自主の王国」として世界に注目され、国家建設、国政運営で世界のモデルとなっている。

元来、朝鮮民族は自主的な民族であった。檀君（タングン）朝鮮はその強

大さのゆえに、周辺諸国から恐れられ、高句麗（コグリョ）は 1,000 年の歴史を誇る自主的な強大国として世界にその名を馳せた。高句麗の自主精神と尚武の精神は実に朝鮮民族の誇りであった。

そのような朝鮮が、7 世紀の新羅（シンラ）時代と 15 世紀以後の李（リ）朝時代に、事大売国をこととして国を滅ぼすという恥辱の歴史を残したのである。新羅の金庾信（キムユシン）、金春秋（キムチュンチュ）などの事大勢力は外部勢力を引き入れて同族の国家である高句麗と百済（ペクチェ）を滅ぼした。李朝時代には、李完用（リワンヨン）、宋秉畯（ソンビョンジュン）のような親日売国勢力によって日本帝国主義に国を奪われ、朝鮮民族は実に 40 年もの植民地奴隷生活を強要される恥辱をこうむった。そうした悲しみが消え去る前に南朝鮮が再び事大売国の乱舞場となって半世紀以上もアメリカ帝国主義の植民地となり、民族的なすべてのものを失って奴隷生活を強いられている。なんと痛嘆すべきことであろうか。

ところが北朝鮮はどうであろうか。北朝鮮は自主を世界に誇る強国として出現し、全朝鮮民族に誇りと自負をいだかせている。

では、自主的な強国北朝鮮の威力はどこから生まれたのであろうか。その源泉は金正日将軍の指導哲学にある。それがほかならぬ「われわれの方式で生きよう」という哲学である。

将軍は、「われわれの方式で生きよ。われわれの方式でたたかえ。われわれの方式で創造せよ」と教えている。すべての問題を「われわれの方式」でおこなえというのが将軍の国家指導哲学である。

「われわれの方式」で生きていくということは、自己の信念を

もって考え行動し、すべてのことを自国の革命と自国人民の利益に即しておこない、自力で国家に提起されるすべての問題を解決していくということである。つまり自国、自民族、自国人民の要求と利益に即して、そして自力で自国の実情に合わせておこなっていくということである。

「われわれの方式で生きよう」という哲学は、自国中心、自民族中心の立場から国家を建設し運営していくことを要求する哲学である。「われわれの方式」で生きる思想は、党と国家の建設、そして党と国家のすべての活動すなわち政治、経済、文化、技術、軍事、外交など全領域であまねく適用される指導哲学である。

金正日将軍は「われわれの方式で生きよう」というスローガンをうちだし、これは国家管理運営ばかりでなく国民一人ひとりの思考方式と活動でも適用されるべき普遍の原則であると指摘した。

「われわれの方式で生きよう」という哲学は、国と民族の生命が自主性であり、人びとの運命が国と民族を単位にして開拓されていくという原理を踏まえた科学的な哲学である。

人間が自主性を生命としているのと同様に、国と民族にとっても自主性は生命である。人間が自己の運命の主人となって自由に考えながら生きようとするのと同様に、民族も自己の運命の主人となって自己の運命を自力で開拓していこうとする。自らの方式で生きていこうとするのは人間の本性であり、ひいては民族の本性でもある。まわりの環境がいくら複雑であっても、自己の要求と利益、そして自己の実情に即して、自力で自己の運命を開拓していくのが本源的な人間の生存方式であり、闘争

方式である。国と民族の運命を開拓する方式もこれと変わるところがない。

金正日将軍は、人間生存の根本的方式、民族の存立と発展の根本的方式を規制するこのような原理、原則を、党と国家およびすべての公民の活動に適用すべきだとしている。したがって「われわれの方式で生きよう」という哲学は、人間生存、民族生存、国家生存の原理に即した正しい科学的な指導哲学である。

将軍は「われわれの方式で生きよう」という哲学の根本原理をきわめたばかりでなく、それが、朝鮮の現実的条件のもとで朝鮮民族の存立と発展を裏打ちする指導哲学であることを明らかにした。そして、それは朝鮮が半島の国であり、しかも諸大国に挟まれていることのためにいっそう重要な要請であると強調している。

ある日、将軍は幹部たちとの談話で、「大国に挟まれている朝鮮の場合、自主性を堅持するのはいっそう重要です」「われわれ朝鮮人にはソ連の服も合わず、米国の服も合いません。われわれ朝鮮人には朝鮮の服がいちばんよく合います」と意味深く語った。「われわれの方式で生きよう」という哲学の本質的内容を集約した名言である。

朝鮮人は先祖代々他のどの国でもない朝鮮の地で暮らしてきたし、今後も檀君民族はこの地で生きていかなければならない。そして将来も外国の力に頼ってではなく、自分の力で生きていかなければならないのである。したがってすべてを朝鮮式におこなうのは論駁の余地のない真理である。

朝鮮人は「はい」という動作を首を前に曲げてするが、ヒマラヤに住むチベット族は首を左にまわす。民族は民族固有の伝統

と生活方式を持っているのである。だから、朝鮮人の身体には「ソ連の服」も「米国の服」も合わず、「朝鮮の服」だけが似合うというこの貴重な教えは、朝鮮民族のすべての思考と行動、国家の建設と運営はいうまでもなく、外交活動においても指針とすべき貴重な教えである。

金正日将軍は朝鮮式をもって事物現象のことわりや世界万事の正邪曲直を識別し、朝鮮式をもって世界を裁断し、朝鮮式をもって必要なすべてのものを創造していく。

将軍が少年時代にある国を訪問し、世界の一流を誇る当国の総合大学を見学したとき、案内の幹部が当大学に留学するよう勧めた。ところが将軍は、「いや、わたしは金日成総合大学で勉強します」ときっぱり言ったことは世界に広く知られている。それは将軍の確固とした自主精神の表出であった。将軍の自国中心、自民族中心のこの自主的な思想観点、思考方式が、「われわれの方式で生きよう」という哲学になり、それが自主王国の建設へとつながったものと思われる。

将軍が仕立てる服は「ソ連の服」や「米国の服」ではなく、つねに「朝鮮の服」である。朝鮮人の体質に合わない「服」は、将軍がもっとも忌むところである。将軍は「朝鮮の服]を仕立てる思想、意志をもって党と国家を指導しているのである。

金正日将軍は「朝鮮の服」を作るうえで守るべき原則を明らかにしている。

ある日、将軍は幹部たちに「われわれの方式で生きよう」という哲学について、外国の方式はわれわれの体質と好みに合わない、人のおかげをこうむって生き、人の真似をし、人の指図で動き、人のやり方をうかがうのを自分はいちばん憎む、と強調

した。

将軍がもっとも忌み嫌うのは「人の方式」つまり「人のおかげをこうむって生きること」「人の真似をすること」「人の指図で動くこと」である。それはつまり事大主義、教条主義であり、主体性の喪失だからである。

事大主義と教条主義はチュチェ、自主精神の敵である。自己の運命の主人だという自覚と責任感を失くした人間、外部勢力への屈従的な奴隷根性を持つ人間に共通している体質的本性がほかならぬ事大主義であり、教条主義である。朝鮮の歴代の事大主義者たちは例外なく、人のおかげをこうむって生きようとし、人の真似をし、人の指図で動いた者で、結局、かれらは国と民族を滅ぼしたのである。

「人の方式」でない「われわれの方式」は、自己の信念を持って自力で、そして自らの方式で、朝鮮人の体質に合うりっぱな「朝鮮の服」を仕立てようとする思考方式、生活方式、創造方式、闘争方式である。

「人の方式」に従えば、朝鮮人の体質に合う「朝鮮の服」ではない「ソ連の服」や「米国の服」を作ることになる。「ソ連の服」や「米国の服」はその国の人たちには合うかもしれないが、朝鮮人には合うはずがなく、必要もないのである。

北朝鮮は「人の方式」ではなく「われわれの方式」で生きてきたために、東欧諸国で社会主義がつぎつぎに挫折するという出来事のなかでも、自主の旗を高くかかげて人民大衆中心の社会主義を守り、国と民族の利益を擁護することができたのだった。

「われわれの方式」の精神と意志と生活方式、闘争方式は、今日、北朝鮮民衆の生活と闘争の方式となり、国家建設と国家運

営の指導方式となっている。北朝鮮が自主の強国として世界に名をとどろかしているのはそのためである。

「われわれの方式」はとりもなおさず金正日式である。北朝鮮は「われわれの方式」で特徴づけられる金正日式をもっていっそう隆盛繁栄し、永生するであろうことは疑いをいれない。

Ⅲ　人民大衆中心の経済原理

西側の政治家やマスメディアは、口を開きさえすれば、経済的繁栄と万民の福祉をとげる社会は資本主義社会だとしている。

ところが現実はどうか。今日、発展したという西側資本主義諸国の失業者数が 3,500 万名に達し、平均失業率は公式の発表によっても 10%を上まわり、1930 年代の恐慌以来最高記録を示している。「万民の福祉」を誇る米国ではホームレスが 400 万名にのぼり、道ばたや公園のベンチ、橋の下や地下道で寝起きしている。貧困線以下の住民が、米国では 4,000 万名、ドイツでは 800 万名、イタリアでは 700 万名、英国では 500 万名を数えている。こんな有様で西側諸国に万民の福祉が実現されているといえるだろうか。これは経済の発展ぶりが消費財の生産量や生産力の発展程度だけで決まるものではないことを示すものである。

誰によって運営される、誰のための経済か、生産された物質的富が誰に、どれほど分配されるのか、によってその発展程度を決めるのが、正しい経済観ではなかろうか。世界人口のほぼ 20%を占める 10 億の人びとが貧困にあえいでいることを思うとき、人民のための経済の模索は実に重要な問題だといえる。

そうした意味で自立の土台に立って勤労民衆に徹底して奉仕している北朝鮮経済の発展ぶりにわれわれは深い関心を払わざるをえないのである。

北朝鮮は 40 余年にわたる日本帝国主義支配下の植民地経済の

跛行性と立ち後れを克服することもできないまま、1950 年にはじまった朝鮮戦争によって破壊しつくされた経済を、人民に奉仕する強力な自立経済に立て直したばかりか、戦後半世紀以上もつづく帝国主義者のしぶとい封鎖にも屈せず、. たえざる成長をとげてきた。

では、北朝鮮の経済がそれほど強力になりえた基礎はなにか。それは、金正日将軍のユニークな経済哲学すなわち人民大衆重視、自立の経済哲学である。

1　経済の主人は人民

朝鮮の李(リ)朝時代の詩人金時習(キムシスプ)は『ああ、悲しいかな』という文章で、「両班(貴族)たちは広壮華麗な屋敷で奢侈をこととしているが、農民は一生飢えと寒さに苦しんでいる」とし、両班は百姓の「皮をはぎ、血を搾っている」と慨嘆した。そこには封建貴族にたいする憤りと、農民が豊かに暮らせる社会への熱望がこもっている。

ところが世界的に見ても、そうした人びとの念願は 21 世紀を目前にした今日までもとげられず、「富益富、貧益貧」の不条理は多くの人たちを苦しめている。人間生存の不可欠の要素である経済が人間を疎外するという制度を改めないでは、人間が経済の主人、その享受者になれるものではない。

もともと経済と人間は密接な関係にある。経済は人間が自己の要求を実現するために、自然に働きかけてそれを有用なものに作り変える行為としてはじまった。経済活動は人間が生存し、発展するために必要なものを獲得する行為である。

ところで、経済が人間の要求と活動の所産だからといって、つねに人間に奉仕してきたのではない。

物質的な生活用品の生産としてはじまった経済は、本来の意味では、勤労する民衆に属するものであるが、搾取社会では民衆を疎外するものとなった。

近代経済学の始祖はワルラス、政治経済学の始祖はマルクスだといわれているが、かれらは、経済が誰のために、どのような原則で建設され、運営されなければならないか、という根本的な問題には解答を与えていない。

マルクス主義政治経済学は資本の発生と運動過程の合法則性にもとづいて、資本主義の滅亡の不可避性と社会主義勝利の歴史的必然性を解明し、それによって経済学の発展と人類思想史の発展に大きな貢献をした。マルクスにとって最大の関心事は、私的所有の廃絶であった。それは当時としては必然的に、そして当然持ちあがるべき課題の提起であったといえる。

金正日将軍は経済にたいする既存の見解にとどまらず、人民大衆が歴史の主人となった現代の要請に即して、人間を中心にすえて経済の本質とその発展、利用にかんする問題を解明する新しい経済原理を定立した。

では、経済にたいする将軍の見解はなにか。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「人びとは自然を改造するためにたえずたたかい、その結果として得た生産物を分配し、交換し、消費する。こうした経済生活過程を通じて、人びとは自分たちの物質的需要を充足していく」（『社会主義建設における郡の位置と役割』13〜14ページ）

人間の自主的要求には、社会的・政治的に自由に生きようとす

る要求だけでなく、物質的にも自由に生きようとする要求も含まれている。こうして人間の活動は経済的領域でも進められるのである。

経済はたんに人間と自然とのあいだの作用だけでなく、人間と人間との相互作用を通しても成り立つのであるから、人間は経済に一定の要求を提起し、それに主動的に作用する。したがって経済は人間を中心にすえて考察し、経済の発展過程も人間の主動的な活動の見地から考察されるべきである。

マルクスは、経済を物質的生活用品を生産、分配し、消費する領域、人間生存の第一の要因として見た。それでマルクスは、「どの民族であれ、もし、1 年はおろか何週間かだけでも労働をしなければ飢え死にするであろう」と指摘している。

マルクスの経済観の限界性は、経済の重要性を強調しながらも、それを必要とする行為の主体―人間を中心にすえて経済の本質とその発展過程の合法則性を解明しようとしなかったことにある。経済学が物質的富の再生産過程を研究対象にするからといって、その物質的な過程だけを見、人間の活動を見ないとしたら、経済的過程の合法則性は正しく解明できず、結局は経済学が社会的、経済的変革と発展の武器としての使命を全うできないであろう。いかなる経済的関係や経済的運動も、人間とその活動を抜きにしては成り立たないのである。

金正日将軍はそうしたマルクス主義経済学の限界性を明らかにし、すべての経済的過程を規定する基本的要因はほかならぬ人間であり、したがって政治経済学も当然人間を中心にすえて研究し、展開しなければならないと指摘している。

経済をたんに物質的生活用品の生産分野として見るのではな

く、自然を征服するための人間の創造的な活動分野と規定したことに、将軍のユーニクな経済観がある。これは、経済の理解における一つの革命である。

将軍はこうしたチュチェの経済観にもとづいて、経済の主人にかんする新しい科学的な理解を定立した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「人民大衆は自己の運命の主人であるがゆえに、経済生活においても主人となるべきです」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 256 ページ)

人間が経済の主人であるというのが金正日将軍の経済哲学の原理である。

人民大衆が経済の主人であるというのは、人民大衆が物質的富の創造者であり、享受者であるということである。

人民大衆が生産手段の主人となって物質的富を創造し、それを自分自身のものにするとき、かれらは経済の主人になれるのである。

将軍は政治の主人が人民大衆であるのと同様、経済の主人もまた人民大衆であり、したがって経済を発展させるためには、その主人である人民大衆の役割を高めるべきだとするユニークな理解を確立した。

では、人民大衆が経済の主人だとする経済原理の内容はなんであろうか。

それはなによりも人民大衆が生産手段の主人だということである。生産手段の所有関係は、人民大衆が経済の主人になるか否かにかかわる根本的な問題である。それは、生産手段の主人となった階級が経済的に主人の権利を行使するためである。資

本主義社会では資本家階級が生産手段の主人であるがために、経済生活でも主人としてふるまうのである。

今日、日本では 10 にみたない大独占体が、英国では「50 家族」が国の経済命脈を握っている。米国では 20 名ほどの富裕層が産業の 3 分の 2 を統制し、人口の 0.002%にすぎない億万長者が米国総財産の 45%を占めている。これは、資本主義経済が名実ともに一握りの特権層の所有物になっていることを示すものである。

したがって、人民大衆を経済の主人にならせるためには、なによりもかれらを生産手段の主人にならせ、さらには経済管理の主人にもならせなければならない。経済の発展にもっとも切実な利害関係を持つのは人民大衆であり、経済発展の知恵と能力の持ち主も人民大衆である。それゆえ経済を発展させるためには人民大衆をその実質的な主人にならせ、かれらの創意と能力を最大に発揚させるべきである。

今日、西側資本主義諸国では「労働の人間化」を追求するとしているが、それは非現実的な論議にすぎない。経済学者の研究によると、資本主義社会での企業管理は社長をはじめとする企業経営陣の主導のもとにおこなわれ、労働者はたんにかれらの道具としての役割しか果たせないでいる。

生産手段の主人であるべき人民大衆が主人の地位につけないでいる状況のもとで、労働者の主動的かつ創意ある参与を期待するのは、夢想にすぎない。

人民大衆を経済の主人にならせるにはまた、生産された物質的富がかれらのものとなるようにしなければならない。経済の進歩性と発展相は、生産された物質的富の分配がどのようにな

されているかによって規定される。資本主義社会では、生産を直接担当している勤労者が自ら生産した物質的富を所有するのではなく、極少数の特権階級、搾取階級のものとなる。それで、南朝鮮でも「富益富、貧益貧」の現象は深まる一方である。

報道によれば、南朝鮮のある国会議員は 1,500 名の客を招いて超豪華版結婚式を挙げ「祝儀」を掻き集めた。招かれた客は 700 余台の車に乗ってつめかけ、近くの駐車場をことごとく占拠し、なかにはヘリコプターまで飛ばして「祝賀」をしたという。

最近、米国では人口の 1%を占める富裕層の実質収入が 74%上昇したのにひきかえ、貧民層の実質賃金は 9.3%低下したとのことであるが、これは資本主義経済の反人民的性格を示す一つの例証である。

米国は世界でもっとも発展した経済を持つとされているが、ワシントンやロスアンゼルスの街には乞食がうようよしている。「万人の福祉」を誇る米国には、公式の発表によっても乞食が 800 余万名にのぼっている。ところが 40 代の億万長者ビル・ケーチは、シアトル郊外に大プールをはじめ遊戯場、運動場、図書館、映画館、大宴会場、地下駐車場などを備えた豪華住宅で、数百名に達する召使いをはべらせて贅沢三昧を尽くしているのである。

これは、資本主義経済が絶対多数の人民大衆を疎外し、一握りの特権層のためのものになっていることを語っている。米国はいまや「豊饒のなかの貧困」の国として世界に知られている。『タイムズ』と『CNN』の世論調査によると、応答者の 69%が「食っていくのがあまりにも苦しくて、生の他の価値を求めるのが困難」だと不平をぶちまけている。

以上は生産力の発展と物質的富の生産水準がいかに高くても、人民大衆のものとならないような経済は発展した経済とはいえないことを語っている。

金正日将軍は、人民大衆が経済の主人であるとする原理を経済の建設と発展の基礎とし、北朝鮮の経済を徹底して人民大衆に奉仕するようにしている。それで、北朝鮮では人民大衆が生産手段の主人となり、生産された物質的富もかれら自身のものとなっているのである。

北朝鮮では西側諸国のように贅沢品は多くないが、勤労者の衣食住用品は豊かに生産され､勤労者に均等に分配されている。住宅問題をとってみても、南朝鮮でのようなホームレスは一人もいない。

北朝鮮では国が勤労者に住宅を無料で提供しているのである。イスタンブールでおこなわれた住宅問題にかんする世界大会では、世界の 5 億以上の人たちが家を持てずに放浪していると発表されたが、そのことを念頭におくとき、住宅問題を解決した北朝鮮の政策は実にりっぱなものだといえる。

経済を人民大衆のものとならせ、人民大衆が経済の主人としての権利を行使するようはからったところに、金正日将軍の大きな功績がある。将軍の指導のもとに、北朝鮮では経済計画の作成から実行にいたるまで、徹底的に民衆を中心にすえ、民衆に依拠する原則が具現されており、全勤労者の高度の責任感と創意が大いに発揚されて、経済が不断に高いテンポで発展している。ここに北朝鮮経済の明るい展望があるといってよいであろう。

将軍によって進められる民衆中心の経済政策が北朝鮮の民衆

により幸せな誇らしい生活をもたらすであろうことは疑いをいれない。人民大衆を重視する経済観こそ、北朝鮮経済の発展方向と原則を規制する根本の原理である。

2　カネが貴重なのでなく人間が貴重である

古代ギリシアの詩人アルケーは、「カネが人間を作る」と言った。もしそれが本当なら、アルケーは黄金万能主義者の始祖だといえる。またかれの言葉どおりカネが人間を作るとしたら、カネは人間の創造主として崇拝されなければならないであろう。けれども、人びとはカネほど醜いものはないと言っている。元来、経済とカネは密接につながっている。カネは生産と分配、消費を包括する経済活動の重要な媒介物であり、手段である。ところで、ここで問題になるのは、その機能上の特性からして、カネが経済の運営で重要な役割を果たすという側面が過度に強調され、重視されている反面、経済の主人である人間の貴さが無視されるという現象が著しいことである。今日、資本主義社会ではカネの偶像化が極端な状況に達し、他面では、人間をカネの付属物とみる価値観がまかりとおっている。

それでつとにルソーは、「どの誰もカネに売られるほど貧しくてはならず、また、どの誰も他人をカネで買うほど富裕であってはならない」とし、人びとがカネのために人間的な善と徳を失うようなことがないよう望んだ。しかし、今日、世界的な規模でカネ中心の価値観が急速に広がり、人びとはますます深くカネの付属物となっていく恐ろしい状況がつくりだされている。

こうした状況のもとで人間とカネとの関係をはっきりさせる

のは、健全な人間の育成と真正な経済の発展を期するうえでとくに重要な意義がある。健全な経済発展のそうした緊要な要請に正しい解答を与えたのは金正日将軍である。

では、将軍が明らかにした人間とカネとの関係の哲学とはどのようなものだろうか。それは一言でいって、カネが貴重なのではなく、人間がより貴重であるということである。将軍は、人間あってのカネである、人間を愛すべきである、カネが貴重なのではなく、人間がもっとも貴重である、と指摘している。人間あってのカネであり、カネが貴重なのでなく人間が比べようもなく貴重だというのが人間中心の経済観である。

人間あってのカネであり、カネより人間が比べようもなく貴重であるという思想は、経済生活、経済建設において人間とカネがそれぞれどのような地位を占めるか、人間とカネとの関係でどちらをより重視し、経済管理でどちらに基本をおかなければならないか、そして、人間のためにカネをどのように使うべきかといった、経済運営の根本的原則を明らかにする思想である。

カネ、貨幣は経済的手段であり、経済生活における不可欠の要素でもある。人間の発生とともに自然経済がはじまり、人間によって自然が改造されて生産物が生じ、人間相互の有無相通ずる関係が発生するとともに貨幣関係が出現した。すなわち余剰の生産物をその所要に応じて他人と取り引きをする必要から、その媒介物、等価交換の手段として貨幣が生まれたのである。

貨幣とはその所有者に価値の等しい任意の商品を占める権限を持たせる特殊な商品である。貨幣は、それを所有することによって自分に必要な、価値の等しい任意の商品を得ようとする

商品生産者の要求を体現している。したがって貨幣は価値尺度の機能ならびに流通手段の機能を遂行するが、それ以上のなにものでもない。実際カネはそうした固有の機能を遂行しているだけであるにもかかわらず、それを利用する人たちの転倒された理解と誤った利己的な欲望のために、人間と対立する要因として作用するようになった。

搾取関係の出現とともに、カネは所有者の無制限な利己主義的貪欲の手段として利用され、資本主義的発展の高い段階にいたっては金融寡頭政治を生んだ。つまり帝国主義諸国ではカネが国の経済命脈を牛耳る、カネの独裁がはじまったのである。

資本主義の生成とともに人格の価値が交換価値に変わり、拝金主義が人間の生活と全般的な政治・経済・文化生活の領域で支配的な風潮となった。

資本の集中と集積は勤労民衆の無制限の搾取をいちだんと助長し、インフレ、経済恐慌などの事態を招くにいたった。いわば、カネが人間を支配する時代がはじまったのである。

しかし、元来カネは人間を支配するものではなく、人間が自己の必要からカネを作り、利用するようになったのである。目的と手段の見地からするとき、目的は人間であり、手段はカネである。人間は自己の自主的な生活の必要に従ってカネを作り、利用するのであって、カネのために人間が必要であり、人間がカネのための手段になるのではない。

ところが資本主義社会ではこの厳然たる真理が無制限の利己欲、貪欲をみたそうとする資本家階級によってねじまげられ、人間によって作られたカネが逆に人間を疎外するゆがんだメカニズムが支配している。

そんななかで、1929～1930 年に、米国では『きみ、一銭くれよ』という歌が大流行したという。

米国ネバダ州のラスヴェガスは世界的に有名な賭博都市であるが、ここではカネが人間を支配し、堕落させており、カネがゆえに狂乱し、身を持ちくずす腐敗堕落した人間たちが世紀末を送っている。カネが偶像化され、そのために人間的なものすべてが死滅していく都市が、ラスヴェガスである。

金正日将軍はカネとその利用にかんするいっさいの誤った見解に終止符を打ち、人間中心の新しいユニークな貨幣観を定立した。それがほかならぬ、人間あってのカネであり、カネが貴重なのではなく人間が比べようもなく貴重である、という見解である。

将軍が指摘しているように、人間があってこそのカネである。カネが人間を作ったのではなく、人間がその必要からカネを作り、自主的な生活の要求からカネを利用しているのである。カネは交換と媒介の手段である限りにおいて貴重だといえるが、だからといってそれが神聖視されるべきではない。

カネがどれほど必要であるかを推量するのは人間であり、カネをなにに、どのように使うかというのも、その主人である人間が決めるのである。したがって、カネは価値尺度の機能、流通手段の機能を遂行するという見地からすれば価値があるといえるが、人間を抜きにしてはなんの意味も持ちえないのである。

資本主義社会ではカネが偶像化されるが、国家が全的な責任を持って勤労者の生活を保障する社会主義社会ではカネが蓄財や貪欲の手段としてではなく、勤労者の生活上の便宜をはかり、国家管理、経済管理の手段、テコとして利用されている。

人間中心の社会主義社会ではカネが偶像化される政治的・経済的基盤がなく、それが制度的に許されるはずもない。

生存競争の法則、「富益富、貧益貧」の法則が作用する資本主義社会で、人間の価値はカネの所有程度によって規定されるが、社会主義社会では、カネもうけに血まなこになったり、カネを偶像化するような人間は醜悪な存在とみなされている。国家と生産手段の主人となった社会主義社会で人びとはカネのためではなく、国と民衆の繁栄をはかって献身するのを誇りとし、喜びとしている。

金正日将軍はこうした理解から、民衆のためにはカネを惜しまないという政策を堅持している。

将軍はいかに経済的利益・効果が大きく、莫大な黒字が見込まれる対象であっても、それが勤労者にとって有害なものであれば、放棄し、廃するのを一貫した原則としている。将軍はある工場の古くからある炉が非常に貴重なものではあったが、勤労者の健康を害すると知って、大胆にもそれを爆破するよう措置を講じたことがある。また、ある労働者が作業中偶発事故で瀕死の重傷を負ったとき、数万金に価する高価薬を使ってかれの蘇生をはかった。薬代以外にもヘリコプターをさしまわし、医学部門の著名な教授、博士などを動員して患者の救助にあてた費用まで計算すると、天文学的数字に達するであろう。しかし、いかに多くのカネであっても一労働者の蘇生、健康にかえることはできず、その金額を計算する必要もないというのが、将軍の経済的打算である。北朝鮮ではカネではなく人間を大事にし、人間のためには、カネを惜しまないという政策が制度的に定着しているのである。

ところが、今日、南朝鮮の現実はどうか。歴代の大統領が盗賊になり、数億のカネを横領して民生を塗炭におとしいれている。それでも大統領といわれている者たちが国民をだまして数億のカネを横領する、腐敗しきった南朝鮮社会で、「高度成長」とか「国民の福祉」などをうんぬんすること自体たわけたことだというほかない。人間が無視され、カネがうやまわれる社会で、「高度成長」や「国民の福祉」があるとすれば、それは国民の血税をもって富貴栄華を楽しむ既得権益勢力の「成長」「福祉」にすぎないのである。南朝鮮各地で相つぐ聖水（ソンス）大橋事故、大邱（テグ）地下鉄ガス爆発事故、三豊（サムプン）百貨店崩壊事故などなどは、カネのためならなんでもやる南朝鮮の社会風土が生んだ必然の出来事である。

南朝鮮の政治は金権政治であり、歴代の権力層がそうした政治を実施してきたが、金泳三（キムヨンサム）政権はその極みである。今日、南朝鮮では「カネがものを言えば政治は口をつぐむ」という英国のことわざを地で行っている。黄金万能が支配するこんな風土で、真正な生を望むのは、ゴミだめにバラの花が咲くのを望むようなものである。

カネが人間を支配する悪の風土を清め、人間がカネを支配し、カネが人間に徹底的に奉仕する真正な社会の建設こそ、南朝鮮社会が解決すべき課題ではなかろうか。

3　人民大衆のためなら打算を先立たせるべきでない

経済はほかならぬ計算であり、打算である。経済を発展させるためには、投資と生産の比率を正しく定めるべきであり、そ

のためには科学的な計算法を用いなければならない。生産と分配、投資と効率の均衡を正しくとってはじめて拡大再生産が可能であり、生産の不断の成長が保障されるのである。
　しかし、どの社会でも同一に適用される計算法や投資法が別に用意されているわけではない。計算・打算法は経済を運営する人たちの利害関係と要求にもとづいて、またその目的によって各様に選択され、適用されるものである。
　資本主義社会で適用される経済の運営原則は、最小のものをもって最大の効果をあげることにある。資本主義経済発展の基礎にあるのは、「競争力」の活性化である。それが人びとにどんな影響を及ぼすかは眼中になく、競争で勝てるなら躊躇することはない、というのが資本主義の経済経営原則である。したがってすべての経済的打算と計算は競争に勝ち、最小のもので最大の効果をあげることに従わされ、選択される。
　これまでそうした投資原則は経済の建設と運営で必然の普遍的原則であるとされてきた。もちろん経済の発展をはかって打算を正しくおこなうのは重要である。しかし、投資をたんに打算のみによっておこなってはならない。金正日将軍は、既成の打算法、非人道的な計算法を断固として排斥している。
　では、将軍の算術、計算法はどのようなものだろうか。それは人民大衆中心の算術、計算法である。将軍は、人びとはよく、損になる商売はするなというが、人民のためになることなら損になる商売もすべきである、人民に幸せな生活をもたらすためなら、国庫金を惜しみなく使い果たしてもよい、「人民のためなら打算を先立たせるな!」、これがわたしの算術であり、わが党の計算法である、と指摘している。

人民大衆に幸せな生活をもたらすためなら、引き合わなくても打算を先立たせず、国庫金を惜しみなく使えというのが将軍の算術、計算法なのである。

世界に数学が出現して久しく、経済の歴史も長いが、人民大衆のためなら打算を先立たせず、千万金の投資も惜しみなくおこなえという計算法はどの時代にも出現した例がない。打算にもとづいて投資をし、収支を合わせるために算術、計算が必要であるというのは、一つの法則として認められてきた。

ところが将軍は、既成のそうした慣例を破って、投資と打算、算術、計算を人間、人民大衆を中心にすえておこなうべきだというユニークな思想をうちだしたのである。人間中心、人民大衆中心の計算法、打算法を創始したのは、ほかならぬ人間を大事にし、人民大衆をこのうえなく愛する金正日将軍である。

人間中心、人民大衆中心の計算法、算術は将軍の座右の銘に由来している。

勤労人民大衆を愛するのは将軍の使命であり、座右の銘である。将軍は人間第一主義・人間中心論を本質的内容とする人間愛の哲学をうちだし、勤労人民大衆に惜しみのない愛と配慮をめぐらすのを経済運営の最高原則としている。これがほかならぬ人間を先に見、人間の利益をはかって勘定を合わせるという原則である。

将軍がある年、計画されていた建設が規模のうえで収支、打算が合わないという問題が持ち出されたとき、社会主義社会ではカネやモノより人間がもっと大事だ、人民が要求するものなら経済的打算が合わなくても投資すべきである、人民のためなら千万金といえども惜しまず、すべてを人民に奉仕させるのが

わが国社会主義制度の優位性ではないか、と言って担当幹部をたしなめた。

将軍の透徹した人間中心観・人民大衆中心主義がまさに人間中心、人民大衆中心の計算法、投資法を生んだのである。

カネやモノは人間のために必要であり、人民大衆の幸せな生活のために必要である。だから打算や収支にかかわりなく千万の大金であっても投資すべきだとする人民大衆中心の計算法は、多くのことを示唆している。

将軍のそのような計算法があるからこそ、北朝鮮ではわずか数名しかいない灯台島や深い山村にも学校を建て、何人かの子どものために国が通学列車や通学バスをさしまわす現実がくりひろげられている。山奥の村の 3 名の子どものために国が乗用車をまわしてやり、山村の多くもない人たちのために莫大なカネと設備をかけてテレビ中継塔を立て、平凡な一住民の生命が危険におちいったときは、国家が数百万ドルの高価薬を使って救っている国が北朝鮮なのである。

金正日将軍は咸興（ハムフン）大化学工業地区の労働者のために、数億金を投じて最新式の歯科設備を購入し現代的な歯科予防院を建てる措置を講じた。そうした設備が外国では億万長者や大統領などの治療にだけ使われていると知ったとき、わが国では労働者が王様だから、打算を先立たせず、全設備を一式で買ってくるように指示したという。

平壌にヘルスセンター蒼光（チャンゴワン）院を建設するとき、日に数千トンもの用水を使うのだから、外国でのように、一度使った水を浄化して再使用する方法をとりいれることにしたいという報告を受けた将軍は、カネがいくら多くかかっても、人民の利用す

る施設だから、一度使った水を浄化して使うようなことはしないで、100%抜き 100%新しい水を入れる原則で建設するよう指示した。そして打算を先立たせず、遠くの大同江から蒼光院まで専用の水道管を引くようにと言った。

将軍は、資本家たちは人間を物質的生産の一つの手段、商品として売買される労働力を持つ、取るに足りない存在、黄金によって支配される無気力な存在とみなしている、しかし、実際には人間は世界でもっとも貴く有力な存在である、と教えている。人間が世界でもっとも貴重な存在であるため、経済を人間に服従させるのは当然であり、それは経済の本然の要求にもかなっているのである。

人間があって経済があり、人民大衆があって経済の発展がなされるのであるから、経済を民衆に徹底的に服従させることが経済の建設と運営で堅持すべき原則となるのである。

労働者階級のために使うカネは計算を先立たせるべきでなく、人民大衆が要求することであれば経済的に打算が合わなくても、億万のカネでも投資すべきだとする将軍の計算法こそ、もっとも普遍的な意義を持つ、最良の計算法ではなかろうか。

4　人間中心の戦法

金正日将軍は人間中心の経済原理を経済の建設に具現して新しい経済建設戦法をあみだした。経済建設が自然を改造し、物質的富を創造するためのたたかいであるなら、そこにも当然それに特有な戦法がなければならないはずである。

将軍は自然改造のたたかいを人間の自主性をめざす闘争の重

要な分野とみなし、自然を改造する経済建設で具現すべき戦法をあみだした。

黄海（ホワンヘ）製鉄連合企業所のオートメ化を指導していた将軍は、労働者を骨の折れる困難な労働から解放できるならカネが問題ではない、人間を先に考え、人間を先に見る原則でオートメ化を進めなければならないとし、資本家はオートメ化でカネ中心戦法にしがみついているが、われわれのオートメ化戦法は人間中心戦法である、と強調した。

「人間中心戦法」は将軍のユニークな経済建設戦法である。「人間中心戦法」とは、技術革命の目的を人間の完全な解放におく戦法であり、技術改造を人間の自主的かつ創造的な労働活動に有利に進めていく戦法である。

技術革命はそれ自体に目的があるのではなく、政治的従属から解放された勤労者を自然の束縛からも完全に解放するための革命である。したがって技術革命は当然人間の利益にそって、人間にとって有利に進められなければならない。

資本主義社会における技術の改造や合理化は勤労者のためのものではなく、資本家階級の無制限の利益の追求にある。勤労者のために億万金の投資をするはずがないのはもとより、技術の合理化や改造もより大きな蓄財の手段として利用しているにすぎないのである。資本家たちは果てしない利潤競争、経済競争で勝利するために技術を改造し、設備を合理化している。技術改造や技術手段の合理化は単位時間内により多くの製品を作り出して、できるだけ多くの利潤を得るための一つの方法にすぎない。したがって資本主義社会における技術の改造、合理化は、勤労者をますます苦しい労働に駆り立てる要因であり、ま

た、勤労者の解雇へともつながっているのである。つまり資本家たちは最大限の利潤獲得をめざして技術を改造し、合理化しているのである。金正日将軍はこうした意味で、資本主義社会における技術改造を「カネ中心戦法」と断じ、その非人道性、反動性をついたのである。

「カネ中心戦法」が人間を無視し、人間を死に追いやる戦法であるとすれば、「人間中心戦法」は人間を擁護し、その解放を早める戦法である。

将軍は「人間の完全解放」をめざして、北朝鮮を「オートメ化の王国」に作りあげる決心を固め、それを実現するために人間重視の「人間中心戦法」をあみだしたのであった。「人間中心戦法」は将軍の人間中心の経済哲学の所産であり、経済建設の指導で堅持している経済指導の方法論である。

将軍の指導のもとに、今日、北朝鮮では黄海製鉄連合企業所、金策(キムチェク)製鉄連合企業所、祥原(サンウオン)セメント連合企業所などをはじめとする主要重工業基地や産業施設が、「人間中心戦法」にもとづいて勤労者の労働活動に便利に、しかもかれらにより多くの物質的富をもたらすために、現代化、オートメ化されている。それらがたとえ億万金の利潤をあげるものであっても、勤労者にとって有害な産業建設であるなら、廃棄すべきだとするのが、将軍の思想であり、意志なのである。

将軍は、われわれのオートメ化は人びとの骨の折れる労働を最大限に減少させながらも、食欲をそそり、健康を増進させるために身体を運動させながら働くようにするものだとし、「こうするのがチュチェのオートメ化戦法、人間中心戦法の要求」だと指摘している。

将軍は平壌（ピョンヤン）大劇場で使っていた自動カメラや映画の撮影で使用していたトランシーバーをすべて黄海製鉄連合企業所のオートメ化用にまわす措置を講じ、現地にもたびたびおもむいてオートメ化のたたかいを陣頭で指揮した。こうして、労働者たちを骨の折れる労働から完全に解放し、文化的、現代的な工場ですべての人が楽しく誇りある労働生活をおこなえるようにしたのである。

北朝鮮の輝かしい現実は、たえざる産業災害と人命の被害を生んでいる南朝鮮の産業構造の後進性、腐敗した現実とは対照的である。南朝鮮でやむことなく発生している産業災害は、多くの勤労者の生命を奪い、国民を極度の不安におののかせている。人間よりもカネを重視する「カネ中心戦法」は不実工事を許し、勤労者を骨の折れる労働や公害による死へと追いやる悪の戦法である。

「人間中心戦法」は人間を大事にし、人民大衆をかぎりなく愛する将軍の経済建設戦法であり、経済をたえざる高度成長へとつき動かす、万能の戦法である。

5　自立経済を建設せよ

アダム・スミスが『国富論』を発表してから 200 年後、米国のガルブレースが『国貧論』を発表した。スミスが先発の先進国英国の富国化をはかって古典経済学理論を世に出したとすれば、ガルブレースは後進国の富国化をはかるとして貧国克服論を提唱したのであるが、それらは強大国民族の要求をみたし、強大国のさらなる富国化をもくろんだものであって、そうした

意味では両者は共通点を持っている。

ガルブレースは後進国の貧困の原因を資本不足、人口の過剰、教育水準の低さにあるとしている。

そうした主張から「後進国開発論」が展開されたのであるが、かれはそこで、後進国が貧困の悪循環から抜け出す道は資本の形成にあるとし、そのためには先進国から資本を導入しなければならないと主張している。

「後進国開発論」は資本の豊かな先進国が過剰資本を低開発国に輸出して、新植民地主義的な国際経済秩序を再確立すべきだとする理論である。しかし、新生の低開発国が先進的な資本主義諸国の過剰資本のおかげをこうむって経済をもり立てることができるだろうか。否である。今日、世界的な状況は発展途上国が帝国主義、植民地主義者の経済的収奪によっていちだんと苦しい境遇に落ちこんでいるといってよい。

それでは、各国とりわけかつての植民地経済を引き継ぎ、新生の道に入った発展途上諸国が経済を順調に発展させる道はなんであろうか。この問いに明快な解答を与え、経済の上昇的発展をもたらしうる哲学を示したのは金正日将軍である。将軍は自主、自立の強国をうちたてた金日成主席の意図にそって、経済建設でチュチェの原則を堅持している。

自立経済を建設せよ。これは将軍の経済哲学の核心をなす根本の思想であり、基本的要求である。

北朝鮮の経済は自立の土台に立っているがゆえに強力であり、ゆるぎがない。北朝鮮が米国をはじめ帝国主義列強の執拗な封鎖のなかでもゆるぎなく経済を安全に発展させているのは、自立経済を土台にしているからである。自立経済の建設が自主独

立国の本性的要求であるというのが、将軍の経済観である。
　金正日将軍はつぎのように述べている。
　「経済における自立の原則を貫くためには、自立的民族経済を建設しなければなりません」(同上 44 ページ)
　自立経済の建設は国の独立を固め、国民が外国に依存することなく政治的、思想的に主体を確立し、自衛的な国防建設をおこなううえでの根本的な要求である。
　では、将軍の自立の経済哲学はなにに基礎をおいているのであろうか。その基礎は国と民族の生存原理である。国と民族の生命は自主性である。国と民族は独自の主体として存在し、発展する。国と民族の存在と発展は、自主的に生きようとする要求を自立的な活力をもって実現していく過程を通してなされる。自生自立の力がなければ、国と民族はその存在を維持できず、発展など考えられない。
　だから自主的な国となるためには、政治的に自主権を行使するだけでなく、経済的に自立しなければならない。
　また、人間の運命が国と民族を単位にして開かれていく状況のもとで、それぞれの国と民族が独自の自立的経済を建設するのはきわめて当然なことである。したがって、自立経済の建設は自主独立国、自主的民族の根本的な生存方式である。
　では、自主的民族経済の建設とはどういうことであろうか。それは他に従属せず、自分の足で歩く経済、自国民衆のために奉仕し、自国の資源と民衆の力に依拠して発展する経済を建設するという意味である。このような経済を建設してこそ、国の天然資源を合理的、総合的に利用して生産力を速やかに発展させ、人民生活を不断に向上させ、国の物質的・技術的土台を強

固にきずき、国の政治、経済、軍事の偉力を強めていけるのである。また、そうしてこそ国際関係で政治的、経済的に完全な自主権と平等権を行使し、世界の自主的な発展に寄与できるのである。

自立経済の建設はとりわけ帝国主義の支配と収奪によって経済的、技術的に立ち後れていた国で死活的な問題となる。なぜなら、それらの国では自立的民族経済を建設してこそ帝国主義者の新植民地主義政策を退けて、その支配と搾取から完全に解放され、民族的不平等をなくすことができるからである。一言でいって、将軍の自立的民族経済建設路線は、民族主体の力と知恵をもって民族の生を営むうえでの現実的な路線である。

自立的民族経済建設路線は、閉鎖性や孤立性とは縁もゆかりもない。この路線は民族の主体性と自立性を強め、それを基本とする基礎のうえで他の国ぐにと経済交流を進めることを強調している。民族の生存に必要なものを基本的に国内で生産し、そのほかに必要なもの、足りないものを有無相通ずる原則で、交流を通じて解決すべきだとするのが、この路線の要求である。

北朝鮮はこのような経済路線を具現することによって、現代的な先端技術をはじめ自動車、電気機関車、大型船舶、テレビなど必要なすべてのものを自力で生産し、不断に増大する人民の需要を円滑にみたしている。これは、自立的民族経済建設路線こそ真の自主独立国建設と人民大衆に奉仕する経済建設の必須かつ合法則的な要求であることを物語っている。

自立的民族経済建設路線を支える方法は自力更生である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「自力更生は、自力で革命をあくまで遂行する共産主義者の革

命精神であり、闘争原則であります」(同上)

自力更生は自力で立ちあがる精神であり、原則である。自力で生きるのは人間に特有な生存方式、活動方式である。人間の本質的属性である自主性は独自性と自力更生をその本質的内容としている。

自己の自主的な要求を自力で実現していくのが人間の生存方式である。自力更生は自力で生き、革命を遂行しようとする高度の革命性と創意性である。つまり、自力更生は自己の運命を自力で開拓しようとする革命精神であり、闘争の原則である。自主的な人間の生存方式としての自力更生は、国の経済建設でもそのまま適用される普遍的な原則である。人間が自己の運命を自力に依拠して開拓していくように、国と民族も自己の自主的な物質的・経済的要求をみたすためには、他に依拠すべきでなく、自力更生の原則で解決していかなければならない。他に依存し、人のおかげをこうむって生きようとするのはもともと非自主的人間の生存方式であり、奴隷の生存方式である。国と民族がその経済を外国に依存し、そのおかげをこうむって生きようとするのは、自主的な主権国家、民族としての存在価値、存在理由を喪失したことを意味する。それゆえすべての国は自力更生の原則で、自国人民の力と国内資源を動かし、自己の資金と技術に依拠して経済を建設すべきである。そうしてはじめて経済を主動的に速いテンポで発展させ、あらゆる困難にうちかって国の隆盛繁栄をはかっていけるのである。北朝鮮が自力更生によって国の富強発展と人民生活の向上に必要な重・軽工業製品や農業生産物を自力で生産すべく経済を多面的、総合的に発展させたのは、実に賛嘆に価する。北朝鮮の政治的・思想

的強大さと強力な国防力は、自力更生を方法論とする自立的民族経済の偉力に支えられているのである。北朝鮮は、そのつもりになればどんなものでも自力で生産する偉力を持つ強国である。

金正日将軍の自力更生の哲学、自立の経済哲学はその正しさと不敗の活力によって、すべての国が経済建設の指針とすべき普遍の意義を持つ経済指導哲学となっている。

北朝鮮の民衆が帝国主義の経済封鎖を勇敢に打破しながら民族主体、民族自立の経済力をいちだんと固めていることに大きな誇りをいだいているのは、当然のことであろう。

一方、南朝鮮の経済に目を向けるとき、失望を禁じえず、国民生活を憂慮せざるをえなくなる。南朝鮮経済はいま、主体性も自立性も喪失した由々しい状態におかれているのである。

人間が事大を生存方式とすれば奴隷に転落し、民族が事大をすれば国が滅ぶ。南朝鮮経済は最初から外部勢力に依存し、現在にいたるまで事大・従属の体質とメカニズムから抜け出せないでいる。

今日、南朝鮮経済は「おこし経済」「あぶく経済」と呼ばれながらその従属性をいよいよ深めている。南朝鮮がかかえている対外負債は、1996 年末現在、1,000 億ドルにのぼっている。このことは国土の大きさと人口、経済の規模からすれば、世界最大の「債務王国」であることを意味している。

これは金泳三政権が「世界化」の名のもとに外資の導入を自由化したことから、政府や買弁資本家が外国から借款や投資をやみくもに引き入れたために生じた結果である。金泳三政権は工業の 98%以上を、農業、林業、漁業も 90%以上を開放している。

こうして南朝鮮は、1995 年、貿易で 100 億 6,100 万ドルの赤字を出し、国内経済に由々しい影響を与え、国民生活に莫大な災難をもたらした。1995 年に中小企業の倒産数が 1 万 4,000 余にのぼったことはその例証だといえよう。

今日、南朝鮮は必要な食糧の 29％しか自給できず、70％以上を輸入に頼っている。それに、2000 年には食糧の自給率が 25％以下に落ちることが見越されている。こうした状況は、外部勢力への依存は従属と亡国の道であり、ただ自立の道だけが民族の中興と繁栄の道であることを示している。

金正日将軍は人間生存、民族生存の原理を踏まえて、「自力で生きる人間は栄え、人の力で生きる人間は滅ぶ」という有名な思想を示し、それを座右の銘として経済を指導している。自力で生きる人間は栄え、人の力にすがって生きる人間は滅ぶという真理は、今日、北朝鮮民衆の自主自立の生存方式、闘争方式に活力を与える思想的・精神的栄養素、ひいては国の経済建設に適用される根本原則となっている。

将軍は北朝鮮の民衆に「人の家にある金塊より、わが家にある鉄塊のほうがよい」という真理を教え、他人に期待をかけるのではなく、自分の生活は自分できずき、すべての勤労者が主人らしく高い責任感を持って自立経済の建設に奮闘するよう、正しく導いている。

今日、米国をはじめ帝国主義列強はアフリカ、中東、アメリカ大陸など世界各地で多国籍企業を創設、拡大しながら、「援助」「借款」の名のもとにそれらの地域の国ぐにの従属化を深めているが、このことからしても、自立経済建設路線がいかに必要であり正しいものであるかがわかるのである。

世界的に南北の格差がいよいよ大きくなり、発展途上諸国が強大国の従属下にさらに強く引き入れられている今日の状況は、外部勢力への依存が亡国の道であることをはっきり示している。経済的従属は政治的従属を生み、ひいては国と民族の滅亡を招くのである。

北朝鮮がさらに奮発して、強度の高い自力更生戦略をもってあらゆる挑戦や封鎖を打破して、自ら選んだ自立の道にそって力強く前進しつづけるであろうことは疑いをいれない。

Ⅳ　人間中心の文芸原理

ルネサンス期の文学・芸術は、封建貴族の虚飾にみちた生活様式と禁欲主義のヴェールをかぶった教会僧たちの醜悪な生活を風刺しながら、封建制度とその柱をなすカトリック教の世紀にわたる束縛と圧制をくつがえして人間個性の「自由な発展」をもたらすべきだと主張し、新しい時代を渇望したことによって、文学・芸術の新たな全盛期を現出した。

資本主義的関係の発展とともに文学・芸術の自由豊饒な開花をめざしたルネサンスではあったが、それは結局、人格の価値を交換価値に変えた社会的風潮の蔓延によって、人民大衆のための真正な文学・芸術の興隆をもたらすことができないまま、退廃的で猟奇的な傾向へと深くはまりこんでしまった。

マルクス主義の創始とともに、人類の文芸史はいま一つのエポックを画したが、それは勤労人民大衆の解放偉業に奉仕するプロレタリア文学への革命的転換を意味した。しかし、プロレタリア文学・芸術は勤労人民大衆の解放偉業に奉仕するその革命的性格にもかかわらず、正しい軌道を歩むことができなかった。一部の国における社会主義の挫折と崩壊は、プロレタリア革命芸術を去勢し、文学・芸術を腐敗と堕落の道に転落させる悲劇を生んだのである。

金正日将軍は人間中心のユニークな文芸哲学を創始し、具現することによって、人間、人民大衆のための真正な文学・芸術

発展の一大全盛期を開いた。

1　文学は人間学

文学の本質をどう規定するかということは、文学・芸術発展の方向と原則にかかわる原点的な前提である。しかし、文学の本性にかんする理解はこれまでさまざまになされ、なかでもそれをたんに客観世界を反映する形式と方法の側面から考察する傾向が支配的であった。今日、理論の世界で、文学か哲学か、哲学的文学か文学的哲学かなどといった論議がかしましいのもそのためだといえる。

金正日将軍は文学の本質にたいして、文学は人間学である、生きた人間を描き、人間に奉仕するところに、人間学としての文学の本性がある、と指摘している。

将軍は文学を人間学と規定している。文学が人間学であるというのは、それが生きた人間を描き、人間に奉仕する学問だということである。他の科学とは違って文学は直接人間を描き、人間に奉仕する学問であるというところに、その特質がある。

文学が人間学だという内容には二つの側面がある。一つは、文学が抽象的で非現実的な人間ではなく、自らの運命を開拓していく生きた人間を描くべきだということであり、いま一つは、文学が真の人間を描くことによって、人びとを美しい崇高な偉業へとつき動かすことに奉仕しなければならないということである。

ここで文学が形象すべき人間、文学の奉仕すべき人間とはほかならぬ勤労者大衆である。そうした意味で、金正日将軍は人

間と生活を描き、人民大衆に真に奉仕するところに人間学としての文学の本性があると規定している。

神や皇帝、支配者ならぬ、自主性を生命とし、自己の運命を開拓するためにたたかう社会・歴史の主体としての勤労者大衆が文学で形象すべき対象となり、また、文学が勤労者大衆に奉仕すべきであるとするのが、将軍の文学観である。

もちろん過去にも多くの人たちが文学を人間学と主張していた。しかし、かれらはなぜ文学が人間学になるのか、また、人間学の根本的問題はなんであり、その本質的内容はなんであるか、なぜ人間を描かなければならないのか、そうした人間はどのような人間であらねばならないのか、そして、人間をどう描くべきかといった、根本的、本質的な問題を明らかにすることができなかった。

人間学としての文学の本性を正しく解明できなかった根本的原因は、唯物弁証法を世界観の基礎にしていたかれらには、文学の中心にすえるべき人間の本質を正しく認識することができなかったことにある。かれらは唯物弁証法的反映論の立場から、現実を反映する文学が、反映の対象である人間を描くのは当然であるとする程度の理解にとどまっていた。反映論の立場に立つ場合は、現実の不条理と矛盾を明らかにし、それをなくすためのたたかいを描くことができても、自己の運命を開拓していく人間の真の姿を描くことはできないのである。

文学が人間に奉仕するためには、当然人間の本質の科学的な理解を踏まえて、人間の本性的な要求を実現し、その運命を開拓していく人びとの姿を描くべきである。そうした意味で、文学が生きた人間を描き、人間に奉仕すべきであるという思想は

科学的な思想だといえる。

　文学が人間学であるとする定義は、科学的な人間中心の哲学的原理に立脚している。人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するがゆえに、文学は当然、世界でもっとも貴重な存在であり世界の主人である人間を描くべきであり、人間に奉仕しなければならないのである。

　人間学としての文学が基礎としているいま一つの原理は、人間が自主性を生命とする社会的な存在であるということである。

　人間は自主性を生命とする存在であるがゆえに、世界と自己の運命の主人になるためにたたかっている。したがって文学は当然自主性を重んじ、それを輝かせるためにたたかう人間の姿を描くべきなのである。

　将軍は文学の本質の科学的な理解にもとづいて、チュチェの人間学の内容と基本的な要求を明らかにした。

　金正日将軍はつぎのように述べている。

「われわれの求める人間学は、自主性にかんする問題、自主的な人間にかんする問題をとりあげ、新しい時代の真の人間の典型を創造して、全社会をチュチェの要求に即して改造するのに寄与する文学である」(『映画芸術論』日本語版5ページ)

　チュチェの人間学は人間の自主性を擁護する問題、自主的な人間にかんする問題に芸術的な解答を与える人間学である。言いかえれば、チュチェの人間学は自主性を生命とする人間の本性と、そこから持ちあがる人間問題を解明することに寄与する人間学である。

　自主性にかんする問題、自主的な人間の問題を提起し、真の人間の典型を創造するのは、チュチェの人間学が解決すべき重

要な要求の一つである。

文学が自主性にかんする問題、自主的な人間の問題を提起するのは、自己の生命である自主性を重んじ、守り、輝かせるためにたたかう人間の問題を解明するためである。自主性が人間の生命であるがゆえに、人間に奉仕する使命をになった文学は、当然、人間が自己の生命である自主性をどのように大切にし、それをどのように守り、輝かせているかを明らかにしなければならない。

文学が相異なる階級、階層の人間問題をいかに多様な様相や形式をもって取扱っても、それはあくまでも自己の自主的な要求を実現し、自己の運命を開拓していこうとする問題に帰着するのである。

世界と自己の運命の主人になって自由に生きようとする人間を描くことこそ真の文学であり、したがって、文学が人間に奉仕する真の人間学となるためには、自主性を重んじ、輝かせている人間の姿を描かなければならない。人間の自主的な思想意識と創造的能力の発展過程、革命的世界観の発展過程を生き生きと描くとき、そのような文学は人間に奉仕する真の文学になれるのである。

文学が自主的な人間を描くには、その中心に当然勤労者大衆がすえられるべきだ、とするのが将軍の見解である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「革命と建設の主人としての役割をなしとげていく人民大衆の姿を忠実に描くことが、チュチェの観点から人間を見つめ、描く方法である」（同上８ページ）

将軍の文学観は、文学は人間を描くが、そこでは抽象的な人

間一般ではなく、勤労者大衆を中心にすえて描くべきであり、自然と社会の改造・変革で主人の役割を果たす勤労者大衆の姿を描くべきだということにある。

歴史をかえりみればわかるように、思想的・精神的富と物質的富はすべて勤労者大衆によって創造され、また勤労者大衆はつねに古い反動的なものを破壊し、新しい進歩的なものを創造するうえで決定的な役割を果たしてきた。したがって、文学・芸術が本然の使命を果たすためには、その中心に皇帝や王、地主、資本家のような支配階級をすえるべきでなく、歴史の主体であり、原動力である勤労者大衆をすえるべきであり、支配階級の生活を描くべきでなく、勤労者大衆の生活を描くべきである。

もっとも美しく気高い生活の体現者はほかならぬ勤労者大衆である。したがって勤労者大衆を中心にすえ、かれらの美しく気高い生活を描く文学こそ、もっとも美しく崇高な文学になれるのである。

将軍のエネルギッシュな指導のもとに創作され、名作の聞こえの高い革命歌劇『血の海』と『花を売る乙女』の主人公たちはともに、抑圧されさげすまれている平凡な農村女性である。日本帝国主義の植民地的抑圧と搾取のもとで極貧に苦しみ、抑えつけられていた平凡な女性たちが人間としての真の権利と自由にめざめ、ついに革命の道に踏みいる過程を生き生きと描いたそれらの歌劇は、人間の自主性への強い志向と念願を形象することによって、人びとに大きな感銘を与えた。自己の運命の主人、世界の真の主人として、自由で幸せな生活を送ろうとする人間の姿を描くこと―これが文学の解決すべき課題なのであ

る。

人びとを堕落と絶望、憎悪と略奪、猟奇的な趣味へとあおる文学は、本来の意味で文学とはいえない。

今日、世界的に流布しているモダニズム文学、ポスト・モダニズム文学は、その本質とそれが追求する主張の曖昧さのゆえに、文学・芸術を退廃させ、人びとを堕落させる否定的な役割を果たしている。

モダニズム文学・芸術は、「洗練された趣味」と虚飾的な「美」だけを追い求めて、文学・芸術の形式まで奇形化し、破壊する。モダニズムは「現代的美」の表現を口実に、無意味な言語の玩弄、主題と描写対象の排除、線と色彩の乱雑な配合、音楽的メロディーの破壊などを特徴としている。自然主義、フロイト主義、実存主義、色情主義で貫かれているモダニズムが、人びとの生活と民衆の運命開拓になんら役立たない、有害な思想潮流であることを念頭におくとき、チュチェの文学・芸術の創始は、実に人類の進歩的文学・芸術の発展に大きく貢献するものだといえよう。

2　勤労者大衆は文学・芸術の創造者・享受者

南朝鮮では、1996 年を「文学の年」と定め、「文学の楽しみを国民とともに」という標語をうちだした。

人間が疎外され、精神文化が荒廃している南朝鮮の風土で、真正な文学をどこに求め、どう楽しめるというのか。民衆が文学を楽しめるようになるためには、文学自体が民衆のための真正なものとならなければならない。

南朝鮮の文学・芸術は人間、人民大衆の思想・精神生活を美しい高尚なものへと高めているのではなく、人間を堕落させ、猟奇的な趣味、本能へと刺激する思想的・精神的毒素である。セックスの解放、自由化を賛美する馬光洙の妄言がマスコミの紙面をにぎわせているのはその一例である。かれの小説『愉快なサラ』、詩『行こうバラの旅館へ』が民衆を愚弄して社会を騒然とさせているかと思うと、人びとを腐敗堕落へとあおる『運命』のような演劇が狂気の上演をつづけている。ヤンキー芸術、日本芸術が乱舞し、南朝鮮は国中が異色芸術で塗りつぶされているのである。

他方、北朝鮮では、美しく高尚で、健全な、生気にみちた、真に人間愛に輝く文学・芸術が大全盛期を誇っている。それは、民衆が名実ともに文学・芸術の主人になっているからである。

金正日将軍は史上はじめて文学・芸術の主体にかんする思想をうちだし、文学・芸術の指導に具現している。

人民大衆が文学・芸術の主体となるのは、かれらが文学・芸術の創造者であり、享受者だからである。

文学・芸術の歴史は数千年、数万年を数えるが、これまで勤労する大衆が文学・芸術の主体になった例はない。もちろん、かつてチャーティスト文学やパリ・コンミューン文学のようなものもあった。

しかしそれらの文学・芸術は資本主義的搾取に抗する大衆のたたかいを反映しながらも、文学・芸術の本性と原理を踏まえたものではなく、ただ、その時代を風靡する一つの傾向、潮流として出現したのにすぎなかった。他方、世態文学、郷土文学は現実の人間をあからさまに度外視したし、自然主義、シュル

レアリズム、フロイト主義、ダダイズム、モダニズムなどは、人間の自主的、創造的な本性を無視して、絶望と悲哀、堕落と放縦を説教する非人間的、非人民的なものであった。一言でいって、そこには真の人間は不在で、歴史の主体である人民大衆の有意義な生活が反映されず、人民大衆が現実世界の主人公としてではなく、一つの猟奇的な興味の対象として扱われた。

南朝鮮における文学・芸術の現況は、極度に堕落的である。雑多なブルジョア文学・芸術が氾濫し、大衆を思想的・精神的に堕落させる恐ろしい伝染病菌として作用している。小説や演劇、映画、美術、音楽の分野で最高の称賛を受ける作品は、真の人間の正義や道徳的な理想、志向を無視し、道徳的破壊と人間憎悪、生存競争へと人びとをかりたてている。セックス、殺人、破壊、絶望、死が文学・芸術作品のテーマとなるのが普遍的で、猟奇的で狂気の行動芸術が氾濫し、青少年を危険な奈落へとつき落としているのが、南朝鮮の現実である。モダニズムだのポスト・モダニズムだのと騒ぎたて、内容も意味も曖昧なブルジョア文学・芸術の猖獗を助長するのは、人民の健全な精神・文化生活を脅かす有害な行為以外のなにものでもない。

真正な文学・芸術を創造するためには、当然、人民とともにあり、ともに呼吸する姿勢、立場を守るべきである。人民を抜きにした文学・芸術、人民の要求と利益を無視した文学・芸術は、それがいかにすぐれたものだと美化粉飾されても、なんら意味がないのである。

こうした見地からして、マルクス主義的文芸観は文学・芸術の発展で一つの転換点であったといえる。しかし、マルクス主義は文学・芸術が党派性、労働者階級性を具現すべきだと強調

しているものの、芸術創造の主体とその享受者について科学的な理論的解明をなすまでにはいたらなかった。それは、マルクス主義が、文学・芸術はあくまでも現実生活をあるがままに反映すべきだということと、労働者階級の解放偉業に奉仕すべきだとすることの解明に主な関心を向けたからである。

金正日将軍は、社会・歴史の主体が勤労者大衆であるという原理にもとづいて、勤労者大衆は物質的富の創造者であるのと同様、文学・芸術の創造者であり、享受者であるという新しい理解を定立した。

歴史上、勤労者大衆はすべての精神的および物質的富の創造者ではあったが、その享受者にはなれなかった。搾取社会で勤労者大衆は自分自身のためではなく、搾取階級のために物質的富や精神的富を創造し、そのすべてを搾取階級、支配階級に奪われた。たとえば、世界を驚嘆させるヨーロッパの有名な王宮や神殿、教会堂などは、勤労者大衆の手で作られたのであるが、かれらはそこから押しやられ、特権階級がその所有主になった。人民大衆によって創造された美しい音楽や美術、舞踊も特権階級の享楽の道具にされた。

金正日将軍はそうした文芸史の歴史的受難に終止符を打つべきであるとした。文学・芸術を創造者である勤労者大衆自身のものにならせようという崇高な思想、徳性がまさに、勤労者大衆が文学・芸術の創造者であり、享受者であるという思想を生んだのである。

勤労者大衆は文学・芸術の創造者であり、それを享受すべき当然の権利を持っている。しかし、これまでは精神労働と肉体労働が分離され、主に精神労働に従事する人たちによって、哲

学や文学･芸術などの精神的富が創造されるとみなされていた。ところが金正日将軍はそうした見解に打撃を加え、勤労者大衆が文学・芸術の創造者であり、享受者であるという新しい理解を確立したのである。

勤労者大衆を文学・芸術の主人とならせた将軍の思想は、社会主義文化建設の合法則性にかんする見解にはっきりとうかがえる。

1975 年、金正日将軍は剣徳（コムドク）鉱山を現地指導したが、そのとき将軍は幹部たちがとめるのを押し切って、鉱夫たちの働く数千尺地下の切羽まで行った。そこで、将軍は、いまは労働者階級の時代であるから、当然労働者が生活し働くこのような鉱山で労働者階級の新しい文化が創造され、かれらのなかで革命的ロマンにみちた社会主義的文化生活が満開するようにしなければならないと指摘した。

そして、鉱山町は都市より文化的に後れるのが当然だと考える人がいるが、それは古い思想観点に根ざすものである、社会主義文化はほかならぬ労働者階級の文化である、それは労働者階級によって創造され、労働者階級に奉仕する文化である、わが国の社会では剣徳のような労働者の大集団のなかで、当然革命的な文化が創造されなければならない、そうして工場や鉱山の労働者のなかで創造された新しい文化を都市や農村に送りこむことである、これは労働者階級が主人になっている社会主義社会における文化発展の合法則的過程だといえる、と教えた。

労働者の大集団のなかで創造された文化を都市や農村に送りこむという思想は、社会主義文化建設の合法則性を新たに解明した革命的な思想である。

労働者階級を革命的な中核部隊とみなし、すべてのことを労働者階級を中心にすえて考えているからこそ、将軍は労働者階級中心の新しい文化の創造と発展の合法則性を解明しえたのである。

文化は悠久な歴史とともに発展してきたが、そのさい新しく生まれ発展する文化は都市で創造され、立ち後れた農村や山間の僻地に伝播するものと理解され、それが不変の法則であるかのようにみなされてきた。ところが将軍は、労働者階級が主人となった社会主義社会では当然、労働者が集中している工場や鉱山で労働者階級の文化が創造され、それが全社会に一般化されるのが合法則的過程であるとし、社会主義文学・芸術を労働者階級のための健全な革命的文学・芸術とならせ、労働者が名実ともに文学・芸術の創造者、享受者になるようにしたのである。

将軍の愛情と配慮のなかで、北朝鮮の労働者、農民をはじめすべての勤労者が、一銭の費用もかけることなく全国各地にある芸術の殿堂で現代的な芸術を心ゆくまでに学んでおり、現場で働く労働者、農民の手で創造され、その美しい生活を反映した人民的な芸術が、人びとの精神・文化生活をうるおわせている。工場や鉱山、炭鉱、漁場はもとより、深い山間の農村にも文化会館が建てられており、労働者や農民はそうした環境のなかで自分たちの芸術的才能を存分に花咲かせているのである。

3　チュチェの芸術を創造せよ

チュチェの芸術を創造せよ！　これは金正日将軍が文学・芸

術の指導で堅持している根本的な原則である。
　チュチェの芸術を創造するのは、人間中心の芸術、民族中心の芸術を創造することだといえる。つまり、人間の自主性を擁護し、しかもそれが民族的特性にかなった芸術にならせるのが、チュチュの芸術を創造することなのである。
　人間の自主的で創造的な生活に寄与する芸術、民族的情緒と特性に合うように創造された芸術こそ、チュチェの芸術である。
　北朝鮮の文学・芸術は主体性を徹底的に具現しており、そのために民衆に尽くし、時代を風靡する真の芸術として開花発展しているのである。今日の南朝鮮の芸術には人間がなく、民族がない。つまり主体性がない。「脱イデオロギー」「ポスト・モダニズム」をうんぬんして芸術至上主義を追うことで荒廃した南朝鮮の芸術の今日を直視するとき、チュチェ芸術の創造にかんする思想は実に大きな意味を持っている。
　チュチェ音楽の建設を主張する金正日将軍の思想はとりわけ魅惑的である。
　ソクラテスは、哲学を学びたいとして訪ねてくる人たちに、「あなたたちが本当に哲学を研究したいのなら、音楽を知るべきだ」と言ったという。哲学と音楽が深い連関を持ち、正しい哲学があってこそ美しい音楽が創造できるという意味であろう。
　そうした意味からすると、金正日将軍の音楽観は人間中心の哲学にその基礎をおいているがゆえにとりわけ魅力的であり、成功の裏づけがあるといえる。
　金正日将軍はつぎのように述べている。
　「ただの自然を歌い、純粋な美を表現するだけの音楽は、事実上、人民大衆のたたかいでさして大きな意義を持てない。音楽

は自然を歌っても自然にたいする人間の自主的で創造的な立場と態度を反映すべきであり、美を表現しても人間を人間らしく作る人間本然の美しさ、自主性を擁護してたたかう真の人間の思想・感情の高尚な美を表現すべきである」(『音楽芸術論』6～7ページ)

音楽が自然主義的になってはならず、人間を美しくし、人間の自主的で創造的な生活に寄与するようにしなければならないというのが、金正日将軍のチュチェの音楽観である。

音楽は人間が作り、音楽を楽しむのもあくまでも人間である。したがって音楽は当然人間に奉仕する音楽にならなければならない。音楽が人間のための音楽になるというのは、自然と社会を改造・変革していく人間の、自主的で創造的な生活を反映する音楽になるということであり、自主性を実現するためにたたかう人間に力と勇気を奮い立たせる音楽になるということである。

音楽は自然を歌っても自然にたいする人間の自主的かつ創造的な立場と態度を反映する音楽となり、美を表現する場合も人間を美しくする音楽にならなければならない。自然主義的な音楽やセンチメンタルな音楽は、それがいかに華やかなメロディーやリズムをもって構成されていても、人間の美しさを歌わず、人間を堕落した無力な存在にならせるだけだから、なんの価値もないのである。

金正日将軍は、音楽が人間に奉仕し、人間を美しくするものだという見解を示すことによって、人びとに真の音楽の姿とその創作の方向、方途をはっきりつかめるようにした。

将軍の音楽観でとりわけ注目すべきことは、音楽が人間を歌

っても、あくまでも人民に尽くす音楽にならなければならないとしていることである。将軍は、歌は人民の感情に合い、聞きよく、歌いやすいように作るべきだと指摘している。

抽象的なメロディーからなる歌ではなく、人民の感情に合い、人民の誰もが容易に歌える歌を作るべきだとするのが、将軍の音楽観である。こうした見解から将軍は、一つの曲、一つのメロディーを作り、選択しても、それが人民の要求と感情・情緒に合うか、人民の歌いやすいものか、人民が容易に理解できるかを基準とする原則を堅持しているのである。

将軍は、名曲とは人民に好まれ、人民が喜んで歌う曲だとし、管弦楽を作っても専門家だけが理解できる難解な芸術至上主義的な傾向を徹底的に克服し、人民が喜んで歌うものを作るよう指摘し、一つの歌劇音楽を創作し、選定しても、人民が容易に理解し、喜んで聞き、やさしく歌えるものを選ぶようにした。

1969 年 2 月のある日、将軍は作曲家たちと会った席上、世界のどの作曲家が一番有名だと思うかと質問した。作曲家たちはためらいなく、ヨーロッパのもっとも有名なある作曲家の名を挙げた。すると将軍は、西洋音楽家の音楽がいいというのは西洋音楽を崇拝する一部の専門家だけだ、世界の名だたる作曲家が作った歌でも、人民が認めず、好まないようなものなら名曲とはいえないし、そのような曲を作った人がすぐれた作曲家だとはいえない、と指摘した。人民大衆中心の音楽観の現れである。

北朝鮮で作られている音楽は勤労者の誰にとっても容易に理解でき、歌いやすいものなので、新作の歌が出されると、いつも国中の人たちに喜んで歌われているが、それは、北朝鮮の歌

が人民性に裏打ちされているからだといえる。北朝鮮は文字通り大衆音楽の天国である。

金正日将軍の音楽観でまた特別に注目されるのは、音楽の創造で民族主体的立場が堅持されていることである。将軍は、人民の感情に合わない外国の音楽を真似るべきでなく、主体的な立場で自国のものを独創的に発展させるべきである、と指摘している。

人のもの、外国のものを真似るのではなく、自分たちの民族、人民の感情に合うよう、主体的な立場で自分のものを独創的に発展させることが、音楽の創作で将軍の堅持している原則である。

国や民族ごとに民族的な伝統があり、また、民族の情緒と感情、美的要求がそれぞれ固有の性格をおびている以上、音楽も主体的に、民族的要求に即して創造するのが当然であり、必然的だといってよい。そこで北朝鮮では主体性を生かし、模倣に反対しながら、音楽をあくまでも朝鮮民族の感情、情緒に合わせて独創的に発展させるようにしている。北朝鮮で民族的情緒の濃い音楽や、新形式の現代的な民族楽器が作られ、普及されているのは、そのよい例である。

北朝鮮のピバダ（血の海）歌劇団と万寿台（マンスデ）芸術団が革命歌劇『血の海』と『花を売る乙女』をもって世界各国を巡演し、センセーションを巻き起こしたのも、歌劇が民族の主体性を生かしながらも、現代的美感にマッチして作られたからである。ヨーロッパの観客は、ボックスから流れ出る独特の混成管弦楽のメロディーにすっかり魅せられたという。

金正日将軍は美術も主体的な立場で発展させている。将軍の

チュチェの美術観での主要な内容は、美術が人民の生活を反映すべきだということである。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「社会主義美術は人民大衆の生活をかれらの志向と要求に即して反映する、労働者階級的で人民的な美術である」(『美術論』31ページ)

人民の生活をかれらの志向と要求に即して反映する労働者階級的で人民的な美術こそ真の美術である、というのが将軍の美術観である。人民の生活を描かず、また人民の志向と要求を反映しない美術は、なんの意味も価値もない。美術の主人はあくまでも人民であり、またその享受者もほかならぬ人民である。したがって美術が人民を描き、かれらの志向と要求を反映するのはきわめて自然である。

しかし、これまでのすべての美術が人民を中心にすえて描かれたわけではない。かつての歴史的時代に搾取階級に奉仕した美術は、少数支配階級の生活を美化粉飾することに向けられていた。そのような美術は例外なく人民の生活を排斥し、蔑視し、ひたすら宗教伝説や封建貴族、ブルジョアジーの生活を美化することに奉仕した。

11～12 世紀にヨーロッパを支配したロマネスク美術は、その濃厚な宗教的色彩をもって人びとを畏敬させ、信仰に屈服するようにしたし、18 世紀に出現したロココ美術は裸体などを耽美主義的に描くことで貴族たちの好みをみたした。また、16～18世紀のバロック美術は過度の華やかさをもって皇帝や宗教的主人公を理想化し、虚偽の誇張をこととした。舞台芸術の一形式として出現したレビューは、抑圧され、さげすまれている貧し

い庶民の生活を粉飾し、富裕な人たちや貴族層、ブルジョアジーのためのキャバレーやレストランの装飾物として利用された。腐敗堕落した世紀末的な美術の猖獗は、今日、極度に達している。一部進歩的な美術家によって当代社会の人民生活を描いた作品も出されはしたが、それらも歴史の主体としての人民大衆の生活とたたかいの本質を描くまでにはいたらなかった。

金正日将軍は、チュチェの美術は勤労者大衆をおし立て、かれらの生活と思想・感情を忠実に反映することで、自主的で創造的な生活をきずいていく数百万人民大衆に力と勇気を与える武器にならなければならないと強調している。

世界でもっとも美しく崇高な生活は、新しいもの、進歩的なものをたえまなく創造している人民のなかにある。したがって、真の美術は歴史の主体であり、創造者である勤労者大衆の真実な姿を描くべきである。将軍はこうした透徹した人民大衆中心の立場から、あくまでも人民大衆の美しい姿を、かれらの思想・感情と好みに合わせて描くことによって、美術が人民大衆に奉仕するものになるようにしている。

将軍のチュチェ美術観の基本的要求はまた、美術を朝鮮画を基本にして発展させることである。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「われわれは、伝統の長い、すぐれた芸術的特性を持つ朝鮮画を基本にして美術を発展させるべきである」(同上 98 ページ)

朝鮮画は朝鮮民族が朝鮮の地で創造し、歴史的に伝統化された美術形式である。朝鮮画は朝鮮民族特有の絵画であり、朝鮮民族に愛されている絵画である。朝鮮画は朝鮮民族の感情・情緒を豊富にこめ、現実を生き生きと描くすぐれた絵画形式とし

て世に知られている。鮮明、簡潔、繊細な画法で描かれる朝鮮画は、力にあふれた、美しく高尚な絵画形式である。

自己の民族をかぎりなく愛し、民族の遺産を重んじる将軍は、朝鮮画を基本にして美術を発展させるべきだとし、美術の他のジャンルも朝鮮画を土台にしなければならないと強調している。

朝鮮画を基本にして美術を発展させてこそ、民族的特性の明確な朝鮮式美術を創造することができ、他の美術形式も朝鮮民族の感情に合わせて発展させていける。北朝鮮の美術は朝鮮画を基本にしているので、民族から愛される、内容の豊かな、意義深い美術として発展しているのである。

金正日将軍は人間中心の文芸哲学を踏まえて、音楽や美術だけでなく、舞踊、歌劇、映画、演劇など芸術の全分野を革新させた。自己の運命と世界の主人としての自負をいだき、力強く前進する勤労者大衆の生活を民族的形式にこめて、楽天的、情緒的に表現するチュチェ芸術の誕生は、全的に金正日将軍の功績に帰せられる。

4　世界でもっとも美しいのは人間である

金正日将軍は、人間も、自然も、社会もすべて美しく作りあげる美の創造主である。

では、世界でもっとも美しいものの創造をめざす将軍の美の哲学は、どのようなものだろうか。それは一言でいってチュチェの美の哲学である。

将軍の美の哲学は、人間を中心にすえて美を追求し、そこから出発して、現実の美的特性とその把握の合法則性を解明する

人間中心の独特な美学観である。
　チュチェの美学観は人間の自主的な本性と人民の志向と要求を基準として、美の本質とその創造の合法則性を新たに解明した科学的な美の哲学である。
　美の本質にかんする思想家たちの従来の見解は、主として、美が客観世界に存在する物質的なものだとする見方と、観念の世界に存在する幻想的なものだとする見方に大別される。
　観念論的な美学は、美の本質を「絶対理念」や「神」の発現、あるいは人間の主観的意思の産物として見ながら、美の源泉を物質世界ではなく、人間の意識ないし超自然的な精神的実体に求めようとした。しかし、当代支配階級の利害関係を反映したそうした非科学的な主張は、唯物論的美学によって完全に論駁された。
　他方、唯物論的美学も、古代社会における初期の素朴な美的見解以来、客観的に存在する事物現象を美しいものと見、その本質を正しく解明しようと試みてきたものの、結局美の客観性を認めることにとどまリ、美の本質を正しく解明するまでにはいたらなかった。
　従来の唯物論的美学は、事物現象の個々の属性から美の本質を見出そうとした。少なからぬ人たちが、均衡、調和、全体と部分の統一、全一性などを美の本質とし、なかには、微妙な曲線にこそ美があるとする主張もあった。そうした見解に共通しているのは主に、事物現象の構造や人間、物体などの外面に現れた自然的な属性に美の本質を求めていることにある。
　その後、美は生活であるとする理解など美の本質にかんする新たな見解が現れたが、それらも美の本質を事物の生物学的属

性に帰着させようとする矛盾に加えて、美を汎人類的なものと見る抽象性を生んだ。

すべての美しい事物現象に貫かれている本質的特性を見ることができず、個々の属性を本質と規定したり、美を客観世界のある一つの部分に極限させたりしたのは、従来の唯物論的美学の歴史的限界性である。

マルクス主義美学は人間と社会の発展を美しいものだとした。しかし、人間を社会的諸関係の総体と理解し、美を人間との関係から見ながらも、人間の本質的特性と結びつけることができなかったために、それは美の認識と創造の主体としての人間の地位と役割を科学的に解明することができなかったのである。つまり、マルクス主義美学においてもまた美の本質にかんする問題が解明されず、美の基準も明確に定立することができなかったのである。

では、美の本質にかんする金正日将軍の見解はどのようなものであろうか。

金正日将軍はこれについてつぎのように述べている。

「美は人間の自主的な要求と志向に合い、人間によって情緒的に把握される事物現象である」（同上 3〜4 ページ）

美とは人間の志向と要求に合うもの、自主的に生きようとする人間の要求と利害関係を反映したものである。

自由に幸せに生きようとする人間の要求と利害関係に合う事物現象は美しく、反対に人間の自主的な要求と志向、利害関係に合わないものは美しいといえない。なぜなら、事物現象は人間の要求と利害関係に合うとき、情緒的に美しいものとしてとらえられるものだからである。人間の要求と利害関係を抜きに

した美的現象などありえない。美は人間とだけ関連している。これが、金正日将軍の見解である。

人間は世界のなかで生きながら世界とさまざまな関係を結んでおり、自己の要求にてらしてそれにたいする情緒的態度をいだく。その過程で、人間は客観的な事物現象と美的関係を結ぶのである。人間が世界と関係を結ぶ過程で、事物現象の一定の特性についての美的表象がかたちづくられ、美の概念ができあがる。このとき、世界の主人、自己の運命の主人となって自由で幸せな生活を送ろうとする人間の要求と利害関係に合うよう、情緒的にとらえられる事物現象が美しいものなのである。客観的に存在する事物現象は、それが一定の規定性と存在理由を持つにしても、人間の自主的な要求と情緒に合わないなら、価値があり、美しいものだとはいえない。なぜなら、美的要求や美的評価は人間がおこなうものだからである。美的なものを求めるのも人間であり、美的なものを利用するのもほかならぬ人間である。世界でもっとも貴重な存在は人間であり、もっとも有力な存在も人間である。したがって、世界の主人であり、世界でもっとも貴重な存在である人間の要求と利害関係から出発して、美とはなにかを判別するのはきわめて自然だといえる。

美的評価の主体はあくまでも人民であり、美的評価の規準も人民にあるというのが将軍の見解である。

将軍は、美しいもののうちでもなにがもっとも美しいかを判別するのも人民大衆だと指摘している。

将軍は、人民の志向と要求は美しいものと美しくないものを分ける唯一の尺度であると教えている。

美を評価する主体は人民であり、美を評価する規準は人民の

志向と要求である。人民は世界の主人であるために、世界に存在するすぐれたもの、美しいものを自分のものとする権利を持ち、そこから客観世界に存在する、必要なすべてのものの美と価値を評価する要求を持つのである。

世界にたいする人民の要求と志向は、ほかならぬ世界と自己の運命の主人となって自由に生きようという自主的な要求と志向であり、したがって、人民のそうした志向と要求は、美しいものと美しくないものを見分ける基準になる。そのほかにいかなる基準もありえない。したがって美的評価の主体である人民の要求、つまり、自主的に生きようとする人民の要求と志向がただちに美的評価の基準になるのである。人民はまた、すべての美の創造者であり享受者である。

こうした理解から金正日将軍は、勤労者大衆がよいとするものはよいものであり、勤労者大衆が美しいとするものが美しいものだという結論を引き出したのであった。このような美にたいする将軍の理解は、将軍が人間を中心にすえて科学的な解明をなしたことによって正しく定立されたのである。

金正日将軍は､美の本質にかんする科学的な理解を踏まえて、具体的に美しいものがどこにあり、また、なにが美しいものであるかを明らかにした。

将軍の見解によれば、世界でもっとも美しいものは人間であり､勤労人民大衆である。これは将軍の美の哲学の核心である。

では、なぜもっとも美しいものが人間であり、勤労者大衆であるのか。それは、人間が世界でもっとも貴重な存在であり、世界の主人だからである。人間があっての世界であり、世界に存在するすべてのものの価値は人間によって評価される。それ

に、人間は世界で美しいすべてのものを創造する能力を持つ有力な存在である。美的評価の主体も人間であり、美の創造者もほかならぬ人間である。したがって人間は美しいすべてのものの創造者であり、その体現者である。だからこそ人間は世界でもっとも美しい存在なのである。人間が世界でもっとも美しい存在であるというのは、抽象的な人間一般を指しているのではなく、自分の創造的労働によって美しく偉大なものを創造している人民大衆を指していう言葉である。

人民大衆はどの歴史的時代にも社会の絶対多数をなす、もっとも知恵深く、創造的な社会的集団である。

歴史的に搾取階級、支配階級は無為徒食する非創造的な勢力であったが、人民大衆は自分たちの誠実な努力をもってもっとも美しく、崇高な精神的および物質的富を創造してきた社会的集団である。

もっとも美しいものを創造してきた人民大衆は、当然そのすべての享受者にならなければならない。

人民大衆は世界でもっとも創造的な知恵深い社会的集団であるがゆえに、かれらはもっとも美しいものの代表である。世界でもっとも美しいものが人間であり、人民大衆であるという金正日将軍の美的見解は、人間の自主性を重んじ、人民大衆をこのうえなく愛する将軍の偉大な思想と高邁な徳性の哲学的精華である。

人間の尊厳を無視し、人民大衆を抑圧し、さげすみ、ないがしろにする非人間的、反人民的な階級や勢力は世界でもっとも美しいものをうとんじているがゆえに、もっとも卑劣な醜い存在なのである。

金正日将軍は美にかんするチュチェの理解を定立したばかりでなく、具体的に人間の美しさと自然の美しさがそれぞれどのようなものであるかについて、完璧な解明をおこなった。

では、人間の美しさとはどのようなものであろうか。それは人間の持つ思想と道徳的風格の美しさである。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「人間の美しさは容姿にあるのではなく、その思想的・道徳的風格にある」(『映画芸術論』日本語版 184 ページ)

人間の美しさは容姿にあるのではなく、かれの思想と道徳的風格にあるというのが将軍の見解である。

人間が他の物質的存在とは違ってもっとも貴重な存在となる理由は、思想意識をもって自己の生活を目的意識的にきずいていく存在だからである。思想的・精神的風格は人間に特有な性質である。したがって人間の価値と美しさを評価するときは、人間だけが持つ属性、人間の本質を規定する性質がどのようなものであるかを規準にし、そのような性質がどれほど高い水準で発現されるかを基本にして見なければならない。そうした見地からするとき、人間の美しさは、その容貌や姿かたちによってではなく、その内的な性質である思想、精神的・道徳的品性を基準とし、評価するのが科学的である。

どのような思想を持ち、どのような精神的・道徳的風格をそなえているかによって、人間の人格とその活動の水準の高さが規定される。人間憎悪思想、腐敗堕落した思想を持つ人間は、非人道的、非道徳的な行為をおこなうがゆえに醜い存在なのである。反対に人間を愛し、祖国と民族、人民を愛し、重んじる思想の持ち主は、社会と集団、国と民族のために献身するりっ

ぱな品性の持ち主であり、そのことのために美しく崇高な高さに達した人間として万人の尊敬を受けるのである。一言でいって、人間の自主性を重んじ、人民大衆の自主的な要求と利益のために献身する人間こそ、もっとも美しい人間なのである。いかに容貌がすぐれ、派手なみなりをしていても、精神的、道徳的に汚れ、理想や実践のうえで人道に背き、正義にもとる人間であれば、そんな人間を美しいとはいえない。人間の容貌や姿かたち、衣装は内面世界とマッチするときにはじめて美しく感じられるのである。人間の真の美は精神的にも肉体的にも調和よく発達した自主的な人間に見られる。人間が真に美しい存在になるには、人間性と人情味にみち、人間らしい香気がただよう人間にならなければならない。金正日将軍はこのように、もっとも美しい人間の姿、人間の美しさにかんする哲学的見解を定立し、人間をもっとも美しい存在とならせたのである。

　では、自然の美しさとはどのようなものであり、その美しさをはかる尺度はなんであろうか。金正日将軍は、自然の美しさと価値も人間を中心にすえて見るチュチェの立場を堅持している。

　金正日将軍はつぎのように述べている。

「芸術では美しい自然も、人間と生活を有意義に見せるのに作用するときにのみ、意味を持つようになる」(同上 217 ページ)

　客観世界の事物現象は人間の自主的な要求と志向にそうとき貴重な価値を持ち、美しいものとなる。

　美は人間との関係で現れる事物現象の物質的規定性であるから、人間の自主的な要求と志向にそうかぎりにおいて評価され、保存されるのである。

美しい事物現象の本質的特性は、人間の美的感情を呼び起こすことにある。美しいものは客観的に存在する事物現象ではあるが、人間の主観的な情緒を通してのみその美しさが感得される。事物現象は人間の美的感情の体験対象となったときにのみ美しいものになりうるのである。

自然の美はそれを体験する人間の自主的な要求と志向に合い、人間に有益で、その生活の意義を深めるものであってこそ意味があり、価値があるのである。

金正日将軍はこうした立場からつねに自然の美を評価している。

将軍がもっとも美しいとしている花が綿花であることを念頭におくとき、美についての将軍の限りなく深い世界をうかがい知ることができるのである。

1969 年 9 月 22 日、安州郡（アンジュ）元豊（ウォンプン）里を視察していた金正日将軍は随員たちに、どんな花がいちばん美しいと思うかと聞き、人びとはもちろん香りのよい花を好む、みなさんの言うように、バラはきれいで香りがよいので人びとに好かれている、しかし、バラよりもっとすばらしい花がある、これは綿花だ、わたしは綿花が好きだ、と意味深く語った。

では、将軍が綿花を好む理由はなにか。将軍はそのわけをこう話した。

「綿花はたいへんりっぱな働きをしながらも、人びとに自分を誇ろうとしません。かえって、恥ずかしそうにして満開するようなこともせず、地面ばかり見ながら咲いています。わたしは綿花が大きな働きをしながらも、自分の姿を見せびらかそうとしない花だからよけい気持がひかれ、愛するのです」

将軍が綿花を愛する理由は、それが見た目にはさして美しくなくても、人びとに暖かい綿を提供し、民衆の生活の向上に役立つ花であり、それに、そんなにりっぱなことをしながらも、自己顕示などせず、素朴に咲いているからである。

なんと価値の大きい崇高な美の世界であろうか。美の基準を外見やその生物学的香りではなく、人間に、民衆に奉仕する価値、利用度の大きさにおく将軍の崇高な美の世界は、世界美学思想史上かつて見られなかった美的哲学の世界である。

金正日将軍は、こうしたチュチェの観点から自然の美を評価し、人間の自主的な要求と志向に即して自然を美しく改造していくようにしている。

ある日の早朝、将軍は幹部たちと一緒に平壌の日の出を眺めながら、平壌の日の出はいつ見てもすばらしい、人びとは叢石亭（チョンソクチョン）の日の出が壮観だと言うが、そこには人間がいない、平壌の日の出はそこに創造に励む人民がいるから、いっそう輝かしいのだ、と言った。

実に意味の深い言葉である。この言葉には、人民を中心にすえて自然の美を評価する透徹した人間中心の美学観がこもっている。自然の美の中心には人間、勤労人民がいるべきであり、また、人びとに喜びを与え、人民のための自然であってこそ、意義があり価値あるものとなり、美しいものになるという美学思想は、将軍の指導する大自然改造と誇らしい建設に具現されている。

将軍は、チュチェ思想にもとづく建築の新しい歴史を開き、建築美も自主性を生命とする人間の崇高な思想・感情と結びついた美、自主性を志向する人間の高邁な理想と結びついた美で

ある、と指摘している。

今日、平壌が壮麗な建築群で彩られた世界屈指の都市になったのは、将軍の偉大な美学思想が建築分野に具現されているからである。将軍は人民大衆の要求と利益に即して設計し、建設するようはからい、そのすべてを人民大衆のためのものとならせている。将軍の正しい指導を得て建設された大建築群はいずれも、人民の要求と利益に即して人民に便利なように建設されており、多くの建物が「人民」という崇高な名をつけて呼ばれている。「人民文化宮殿」「人民大学習堂」などなど。人民のためにもっとも美しいものを創造していく将軍の愛情と配慮には際限がない。

将軍は美しい崇高な美の哲学を創始して人間関係ももっとも美しい関係に高め、社会を人間的な美が日を追ってますます多彩に咲き誇る愛の花園に作りあげている。

金正日将軍の美の哲学は、人間も自然も社会もあくまでも美しく作り変えていく思想的・精神的武器である。

V　自主的人間の人生原理

人間は誰しも有意義に生きることを望んでいる。しかし、それは誰にもおのずとかなえられるものではない。意義ある人生は、りっぱな社会的風土と、それを培う指導者の正しい啓培と深い心づくしによってのみ実現されるのである。

北朝鮮には、絶望と悲哀、利己と堕落、腐敗と詐欺などの現象がなく、すべての人が社会と集団、国と民族のために誠実に働く美しい風潮がみなぎっている。

金正日将軍が科学的な人生原理を定立し、それを精神の糧とならせて真に人間的な生の大地を美しく豊かに培養しているからである。

将軍が明らかにした人生原理は、人間の自主的な本性にもとづいて生の価値を最上に高める真の人生原理である。

1　もっとも大切なのは社会的・政治的生命

人生とはなにか、という設問ほど多くの論議を呼んでいるものは、おそらくほかにないであろう。中国の荘子は、人生は「チョウの夢」であるとし、ロベスピエールは、死は「永遠な眠り」ではなく、「不滅のはじまり」であるから、生を捨てて大胆に死を選ぶべきだと主張した。

南朝鮮における人生の論議を見れば、概して虚無主義かまた

は人間個人の人生賛美が大勢を占めているといえよう。各人各様な定義をくだしてはいるが、それはフロイト主義、実存主義、プラグマティズムの領域から抜け出せずにいる欧米の人生論の踏襲であるか、不条理な南朝鮮の現実に安住し、個々人の肉体的生命の保存と利益だけを追い求める安易で無責任な論議で貫かれている。矛盾にみちた不条理な現実から顔をそむけることを説教するそのような人生論がなんのために強調されているのか理解に苦しむほどである。人びとに生の真の意味を教え、正しい人生行路を指し示すためには、透徹した科学的な人生観を定立すべきであろう。

　では、人生とはなにか。厳密な意味で、人間が生きるというのは生命活動をおこないながら、自己の運命を開拓するために不断にたたかっていくということを意味する。自己の存在を維持し、発展させ、自己の運命を開拓していく人間の活動がほかならぬ生であり、人生であるといえる。人生とは生命と生活によって規定される哲学的範疇である。それは存在の見地からすれば生命であり、運動の見地からすれば生活である。したがって、人生問題はとりもなおさず生命と生活にかんする問題ある。

　人生の意味を規定する基礎、原点は生命である。なぜなら生命活動がほかならぬ生活だからである。

　人間の生命がどのような性質のものであるかによって、生活の性格と内容が規定されるのであり、したがって人間が真の生を享受するためにはなによりも、生命にたいする正しい見解を持ち、真に人間的な生命を保持するために努力すべきである。

　では、人間の生命とはなにか。これまで人びとは、人間の生命をたんに肉体的生命としてとらえ、多くの場合、人間の生命

が動物のそれとは比べようもなく貴重であることを強調してきた。

人間の生命がそのように貴重であるため、世界的に著名なフランスのシュヴァイツァー博士は、アフリカの原始林で自然の脅威にさらされている黒人たちの生命を守るために一生をささげたのであった。「生命への崇敬」こそかれの人生のすべてだったのである。人間はすべからく人間的な生命を保持すべきであり、それは無条件保護されるべきであること、黒人をあなどり、殺戮すべきではなく、かれらの生命を保護すべきであるというのがシュヴァイツァーの座右の銘であった。

人間の生命をこのように重んじる人たちがいるかと思うと、それをまったく踏みにじり、なぶりものにする者たちもいる。

ヒトラーは人間生命の横暴な破壊者であった。かれは「生命とは自分以外のものがこの闘争によって殺されるときに保存されるものである。この闘争で強いほう、有能なほうが勝ち、無能な弱いほうは負けるほかない。人間が生き、あるいは動物界に君臨するのは、人間性という原理のおかげではなく、ただ、もっとも残忍な闘争のおかげである。生きるためにたたかわなければ結局生命をかちとることができないであろう」と放言した。かれにとって、生命とは人間性に属するものではなく、自分以外の他の生命を殺すことによって保存される非人間的なものであった。かれの生命観はいわば野獣の生命観である。かれはこのような野獣の生命観を持っていたために、「アーリア族」以外のすべての民族の生命を奪う残虐な討伐に踏み出したのである。かれのこうした暴虐な生命観のもとごえになったのは、ニーチェの生の哲学すなわち「生─これは権力の意志」であった。人間

の生命は強者の所有物であり、野獣によって踏みにじられ、食われるものだというのである。

人間の生命とはなんであるかを正しく解明するためには、それを人間の外で究明すべきでないのはもとより、人間をたんなる生物有機体であるとする立場から考察すべきでもない。

ところが、これまでの人間の生命観は観念論的で、生命を神秘なものとみなしてきた。原始社会では生命は「霊魂」を意味し、そこから人間も動物も樹木も「霊魂」を持っているがゆえに生命を持つという物活論が生まれた。宗教では生命を「神」から授かった超物質的、超自然的なものだと解釈した。

プラトンは、生命と「霊魂」を同一視して、それを「プシュケ(自分自身が自分自身を動かすもの)」と言った。アリストテレスはそれを肉体の「第一インテレイア(運動の目的と結果)」であるとみなした。ショーペンハウアーは、生命は意志であるとした。すなわち意志がすべての存在の基底にあり、生命の原動力をなすとしている。ベルグソンは観念論的立場から、生命を「純粋持続」であるとした。

宗教や観念論が生命を非物質的・精神的現象として神秘視したのにひきかえ、唯物論はそれを物質的現象としてとらえた。デモクリトスは、生命はもっとも微細な原子からなる、と説いた。

エンゲルスは、科学が生物体の解明でおさめたそれまでの成果を踏まえて、「生命とはタンパク質の存在様式」であると規定した。エンゲルスが考察したタンパク質の存在様式としての生命とは、生命有機体一般の生命である。ウィリアムズが人間の生命を「遺伝子の運送車」と言ったのも、本質的には、生命を生

物有機体の存在様式としてとらえたのだといえる。もちろん人間も生物学的存在であるために、人間の生命を自然科学的見地から論ずるのは妥当ではあろうが、人間という存在の意味と貴さはそれが生物学的存在だということよりも社会的存在であるというところにあり、したがって人間の生命を論ずる場合は、摂取と排泄によって維持される生物学的生命ではなく、社会的存在としての生命を論ずるべきである。

こうした見地からすれば、金正日将軍の生命観はとくに重要な意義を持っている。将軍は、人間の貴さはそれが生物学的存在であるということにあるのではなく、社会的存在であるということにあるとし、社会的存在としての人間にはそれに固有な生命があるということを明らかにした。

では、社会的存在としての人間の生命とはなにか。それは自主性である、というのが将軍の生命観である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「社会的存在である人間にとって自主性は生命であります」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 16 ページ)

人間の生命は自主性である。自主性とはいかなる従属や束縛も排して自由に生きようとする性質である。人間が生きるということは、世界と自己の運命の主人として生きようとする性質を備えているということである。世界と自己の運命の主人になれず、外部の条件や要因に束縛され、順応して生きる性質は、非自主的な性質であり、動植物に固有なものである。動植物は環境に順応しまたは適応しながら生きるが、人間は環境に順応ないし適応して生きるのではなく、それを改造し、支配しながら自由に生きようとする存在であるために、自主性を失えば屍

と変わりがなくなる。つまり自主性こそ人間の生命だといえるのである。自主性は、人間が人間として存在し、発展することを可能にする、人間の本質的属性であり、人間の存在を質的に規定する根本的な性質である。

人間が人間として生存し発展することを可能にする性質としての自主性は、人間が社会的存在になることによってはじめてそなわったものである。人間が個々別々に生活を営む生物学的個体としてのみ存在していれば、周囲の世界に束縛され、従属して、それに順応する生存方式から抜け出せないであろう。

いかなる従属や束縛も排して世界と自己の運命の主人となり、自由に生きていこうとする性質は、人間が社会的存在になってはじめて可能である。そのような意味で、人間の生命である自主性は社会的存在としての生命であるというのである。

社会的存在としての人間の生命は、社会的・政治的生命である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「肉体的生命が生物有機体としての人間の生命であるとすれば、社会的・政治的生命は社会的存在としての人間の生命である。社会的・政治的生命は社会的存在である人間に固有な生命である」(同上 369 ページ)

人間の生命には肉体的生命とともに社会的・政治的生命があり、ここで、人間を人間とならせるもっとも本質的な生命が社会的・政治的生命であるというのが、将軍の生命観である。もちろん、人間の存在と発展において肉体的生命それ自体を否認したり無視することはできない。しかし、人間は動物や植物とは違って、互いに社会的関係を結んで生きる存在であるがゆえ

に、人間に特有な生命があるのである。社会的関係を結んで生きる社会的存在としての人間の生命がほかならぬ社会的・政治的生命である。自主性が人間の生命であるという見地からすれば、人間にのみ特有の社会的・政治的生命は社会的・政治的自主性である。社会的存在としての尊厳をいだかせ、社会的存在としての役割を果たすようにする社会的・政治的自主性が、人間を人間とならせる本質的で根本的な生命であり、したがって、人間にとっては肉体的生命も貴重であるが、より以上に貴重なのは社会的・政治的生命つまり社会的・政治的自主性である。社会的・政治的生命の要求をかえりみず肉体的生命の要求だけを追求すれば、いかに豊かな物質生活を営んでいても、そのような生活は真に人間らしい生活とはいえない。

将軍は、このようなチュチェの生命観を踏まえて、人びとを肉体的生命よりも社会的・政治的生命をよりいっそう重んじる、崇高な美しい生命の所有者に育てている。

今日、北朝鮮の人民が、南朝鮮でのように物質的欲望をみたし、肉体的生命を維持するためにだけ生きるのではなく、社会的・政治的生命を重んじ、人間らしい有意義な生を送っているのは、将軍によって正しい生命観を与えられたからである。

実に金正日将軍は、人間に新しい生命を授けた人間的な真の生命の創造主であり、保護者である。

2　もっとも美しい生活は自主的な生活

ジョン・スチュアート・ミルは「満腹したブタになるよりは腹をすかした人間になるほうがよい」と言った。かれの警句は、人

間はブタのような動物的な生ではなく、真に人間的な生を営むべきであるということであろう。

では、真の人間的な生活とはなにか。この問題については長年にわたって論じられてきたが、人間の本性に即した正しい解明はなされなかった。人間的な生にたいする理解は、搾取社会では多くの場合、支配階級の利害関係にそってなされていた。

支配者、略奪者は例外なく、人間の生を野獣のようなものとみなし、他人を憎悪し、殺し、略奪するのが人間の生の本性であるかのように喧伝してきた。その代表的な人間はヒトラーである。

ヒトラーは「戦争こそ生活」であるとして、「すべての争いは戦争であり、戦争は万物の根源である。戦争と暴力は生活と生命のもっとも単純な肯定であり、人間成就の絶頂である」と放言してはばからなかった。ヒトラーにとって生活はすなわち戦争であったし、戦争こそ人間がかちとりうる最高の快楽であった。世界の支配をもくろむ狂信的な征服欲が、かれをして人間の生を暴虐な殺人的なものとしてとらえさせたのである。

しかし、歴史はそのような野獣じみた生活観が非人道的な正義にもとる生活観であり、その行きつくところは自滅であることを示した。ローマの暴虐な皇帝ネロは、自分の母と妻まで殺して享楽にふけり、ローマ市の 3 分の 2 が炎上するのを眺めながら歓声をあげ、詩を吟じたという。そこからは支配者、狂信者の生活観がいかに非人道的なものであるかがうかがえるのである。

そうした狂信的な野獣の生活観があるかと思うと、絶望的な生活観もある。ハイデッガーは「死ぬことがすなわち生きること」

であるとし、サルトルは人間の生とは死に向かうことであるとして、人間的な生の空しさを口をきわめて説きたてた。またショーペンハウアーは、人間はただ生命を維持するために「餌を求めて広野をさまようけだもの」のような存在だとして、人間の生を低劣なものと見た。

今日、米国における生活哲学はプラグマティズムである。米国の歴代の統治者たちは「西部開拓精神」と「有用なものが真」だとする「哲学」を生活観として、世界の他の国、他の民族への侵略と略奪をほしいままにしている。このようなけだものや強盗と変わりのない堕落主義的、厭世主義的な生活観がはびこっているところでは、人間の真の生などありえず、美しく高尚な人間的生が営めるはずのないことは改めて論ずるまでもないであろう。

強大国を誇っていたソ連が崩壊し、相ついで東欧社会主義諸国が終焉を告げた理由の一つは、これらの国で思想的変質とともに人びとの健全な生活観がブルジョア的毒素で汚染されたからである。ソビエト時代のロシア人の生活観は実にりっぱなものであった。オストロフスキーは「人生のもっとも美しいものは、自分が生を終えたあとも自分の創造したすべてのものが依然として人民のために奉仕するようになること」であると言った。かれのこの言葉は、ソビエトの人びとの大きな共感を得、生活のかてとなっていたものである。

人びとをあれほど強くしていたソビエト愛国主義は、ブルジョア個人主義的生活観によってむしばまれ、あれほど強大であったロシアは砂上の楼閣のように崩壊した。

金正日将軍は歴史上のすべての人生観を批判的に検討、総括

し、人間の自主的本性にたいする科学的な理解を踏まえて、真の生活観の真髄と要諦がなんであるかについて科学的な解明をおこない、人間がどのように生活すべきかを明らかにした。

将軍の人生観の本質的内容は、第 1 に人間的な生の本義についての解明であり、第 2 に真の人生観は集団主義的人生観であるということの解明であり、第 3 に生の価値についての解明である。

将軍はまず、真の生活は新しく進歩的な、美しいものを創造する人民のたたかいのなかにあるとし、たたかいのなかでおこなわれる生活はもっとも高尚で美しい、いっさいの古く保守的、反動的なものを排し、新しい進歩的なものを創造するたたかいのなかでおこなわれる生活は、志向が高尚であるばかりでなく、その過程が戦闘的で、楽天的で、美しいものだと指摘している。

もっとも美しい生活は、人間が自己の自主的な要求を実現していく生活つまり自主的な生活である。

自主的な生活とは、いかなる従属や束縛も排して世界の主人、自己の運命の主人として自由に生きていく生活である。

自主的な生活は内容上二つの意味を持っている。一つは、自己の運命の主人として自由に生きようとする志向と要求をもって自主的に生きる生活であり、いま一つは、自由に生きようとする自己の要求を自らの創造的なたたかいによって実現していく生活である。自己の運命の主人としての権利を持って生きる生活、自己の運命の主人としての役割を果たしていく生活は、その性格において自主的であり、創造的である。そのような人間の生活は美しい生活である。

自主的な生活と相いれない生活は、事大主義的、従属的な生

活、奴隷的な生活である。人の奴隷となり、人のおかげをこうむって生きる生活は、人間本然の生活ではない。外国の植民地となり、あるいは人の奴隷となっても裕福にさえ暮らせればよいとする生活は、人間的なものではなくイヌやブタのような動物的な生活にすぎない。外部勢力に追従して国を売る事大主義者、売国奴たちの生活は、非人間的で醜悪な生活である。

外部勢力に寄生し、おもねりながら一身の栄華のみを追い求める事大主義的、従属的な生活は人間的な生活とはいえない。真の生活は肉体的生命の維持のみを考えて生きる生活ではなく、社会的存在として社会的・政治的生命を維持し、社会と集団、国と民族のために献身的に働く生活である。そのような生活こそ、社会的存在としての本分を全うしていく生活なのである。

人間の真の生活は、その性格において、あらゆる古い保守的、反動的なものを一掃し、新しい進歩的で美しいものを創造するたたかいである。自主的で創造的な人間の本性に反するものとは、古い保守的、反動的なもののすべてである。したがって、人間が自己の自主的な要求と志向を実現するためには、それらとたたかわなければならない。それらを克服するたたかいを通して新しく進歩的で美しいものが創造されるのであり、そうしてこそ人間は自由に、創造的に、幸せに生きようとする自己の要求、念願を実現していけるのである。したがってあらゆる非人間的なもの、正義にもとるものに反対し、人間的なもの、正しいものを創造するためのたたかいは、人間の生活の本質をなすのである。

新しく進歩的で美しいものを創造するためのたたかいは、内容上自然を改造し、社会を変革することである。人間は自然お

よび社会を改造していくなかで自主的な要求を実現することができる。そうした不断の闘争過程を通じて、古い保守的で陳腐なものが克服され、新しい進歩的で美しいすべてのものが創造されるのである。それゆえ人間が人間らしく生きるためには、無為徒食や堕落的な生活、略奪や侵略をこととするのではなく、自らの自主的な要求に即して自然と社会をたえず自分たちのためのものに作り変えていく活動を積極的に進めるべきである。古い保守的、反動的なものに反対し、新しい進歩的で美しいものを創造するためのたたかいこそ、人間の自主的な本性にかなうもっとも美しい真の生活なのである。

南朝鮮のような社会で、真の人間的な生活は、外部勢力の支配と干渉を排し、奪われた民族的自主性を取り戻すためのたたかい、ファッショ独裁政治に抗して人民の自由を獲得するためのたたかいをおこなうことにある。なぜなら、そのようなたたかいこそ、国と民族と民衆のためのたたかいであるからである。

オルレアンの英雄少女ジャンヌ・ダルクは国を守るため 19 歳の幼い青春をささげた。人びとが彼女の生をそれほどたたえるのは、彼女がわが美しい青春を祖国のためにためらいなくささげたからである。世界的な大文豪ヴィクトル・ユゴーは 68 歳という高齢の身で勇躍プロシア侵略軍との戦いにいでたった。このような人間の生はなんと高貴なものであろうか。

今日、われわれ南朝鮮に住む者たちにとってもっとも切実に求められる生、もっとも高く評価されるべき生は、米国の干渉と支配に抗するたたかい、反米自主化のたたかいである。なぜなら、わが国と民族、民衆の運命は外部勢力米国の植民地統治を排してこそ正しく開拓できるからである。米国が南朝鮮を支

配しているかぎり、われわれはこの地の真の主人になれず、人間らしい生を享受することができないからである。

反米自主化のたたかいに青春をささげた愛国者たちの生は、祖国の歴史に永遠に輝く生であり、それはきょうも息づいていることを忘れてはならないであろう。

ニーチェは、新しい社会をめざす労働者階級のたたかいを「低劣に組織された」「奴隷」たちの「脆弱な生の発現」「人種奴隷どもの運動」だと冒瀆し、人間の本性は「殺戮精神」であるから「わたしは諸君を戦争へ呼びかける」と言ったが、これは労働者、農民など勤労者たちの正義のたたかいを阻止し、戦争を好むブルジョアジーの利益を擁護することをもくろんだ発言である。しかし、われわれは人間であるがゆえに、非人間的なものとのたたかいを中断して安逸な生活を追い求めるわけにはいかないのである。

金正日将軍は真正な人間生活の本義と内容を科学的に解明したうえで、真の人生観は個人主義的な人生観ではなく、集団主義的な人生観であらねばならないとする古典的理解を定立した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「個人主義的人生観が個人の安逸と享楽を最高の目的とする人生観であるなら、集団主義的人生観は、自己の運命を集団の運命と結びつけ、集団のためのたたかいに真の生きがいと幸福を求める人生観です」(同上 202 ページ)

真正な生活はその性格上集団主義的なものである、というのが将軍の生活観である。このような見解は、人間の本性とその生存方式の特性を正しく理解したうえで出された科学的な見解である。なぜなら、人間は孤立的、個体的に生存する動物とは

違って、社会的にのみ生きていける存在、団結と協力を生存方式とする存在だからである。人間が社会的存在であるということ自体がすでに、団結と協力を生存方式にするということを意味している。団結と協力を前提とする条件のもとでのみ、人間は、まわりの世界に順応し、あるいは服従して生きる動物や植物とは違って、まわりの世界を自己の要求に即して支配し、改造していけるのである。

人間が自然の脅威と災厄をコントロールし、自然を自分たちに有利に作り変えていけるのは団結と協力のたまものである。人びとの集団的な知恵と力が大いに発揚されるときにのみ、自然を改造し、社会を変革していけるのである。ロビンソン・クルーソーが絶海の孤島でも船を作り、穀物を栽培し、動物を飼い慣らしながら生きていけたのは、かれが社会的存在だったからである。このように、人間は、本源的に、集団主義的に生きることを生存方式にしているのである。

個人主義的生活観を主張するのは、そのこと自体が人間の本性を冒瀆し、人間的な生を堕落へ導くことになる。ヤスパースが「社会的なわたしとしてのわたしは、わたし自身ではない」「わたしは、たとえわたしが任意の時間にそのなかに同時に存在していても、自分の社会的なわたしときみは一致しない」と主張したのは、個人主義的人生観を説教したものである。

「社会的なわたし」が存在しないとすれば、わたしはただ自分のためにのみ生きることになり、社会と集団のためのものはいっさい不要になるであろう。

フロイト主義、実存主義、プラグマティズムその他あらゆるブルジョア派えせ理論が「わたし」と「個人」のみを熱心に主張す

るのは、堕落し、未来のないブルジョア的搾取階級の利害関係を反映したものにすぎない。搾取階級、支配階級にとっては、古い保守的、反動的なものに反対し、集団的に団結した勤労者大衆の革命的進出が恐ろしいのである。また、勤労者大衆にたいするあくなき収奪と搾取を通じて享楽にふける有産者たちにとっては、その生存方式を合理化するために個人主義的な人生観の説教が必要なのである。

かれらは社会的集団の力によって創造された精神的・物質的富を自分のものにしながらも、集団の力を否認しているわけであるが、なんとナンセンスなことであろうか。

それにもかかわらず、フォイエルバハは個人主義的人生観を哲学化しようとした。かれにとって、人間は個人である。それは、かれが肉体を基本にして人間を考察し、肉体が人間の本質をなすとみなしたことに現れている。フォイエルバハは、「わたしはつねに、頭から足の爪先までとことん個体的な存在である」として、人間の本質を生物学的個体、徹底した個人的存在であるとみなした。これは個人主義の哲学的基礎を根拠づけるものである。現代ブルジョア哲学において、個人主義はその絶頂をなしている。アダム・スミスは、社会における個人主義、利己主義を人びとの相互関係の原則としてかかげた。かれは「わたしに必要なものを与えよ。そうすればきみもわたしから必要なものを受け取るであろう」と主張している。この言葉は、かれが人間を自然的存在、純粋な個人的存在とみなして、社会を各個人の機械的な結合体であるとし、個人主義、利己主義こそ社会生活の原動力であるとみなしていたことを語るものである。

個人主義的人生観は、人間が野獣になることを説教する非人

間的な人生観である。

今日、米国人たちは一歩外へ踏みだせば銃撃される危険にさらされている。米国には、いつ射撃されるか知れない、500 万挺の武器が野放しになっているのである。米国人は自分個人のために銃器を自由に所持する権利を持っている。それでいま、警護会社が好景気のさなかにあり、ニューヨークだけでも 100 もの警護会社があって 2 万名の人びとがそこに勤めているという。49 秒当たり 1 件の強盗事件、22 分ごとに 1 件の殺人事件が起きている社会が米国である。個人主義が極限に達している米国の社会では、人びとは安心して生きていけない。

人間は孤立的な存在ではなく、社会と集団の一員として生きているのだから、自分一人のためにだけは生きられない。生活の価値は自分のためではなく、社会と集団、隣人のためにどれほど尽くすかによって評価される。もし社会や集団と離れて自分一個人だけのために生き、そして死ぬとすれば、そのような人間の生活はなんの価値もない。そのような人間は社会と集団のためになにか寄与することも、残すものもないために、その生涯は無意味なものとなる。

人間の価値が財産と名誉、個人主義的活動の「自律性」のレベルによって規定されると見るブルジョア的価値観は、人びとを腐敗堕落させ、ひいては社会をも腐敗変質させる有害な毒素である。歴史には自分一個人よりも社会と人類のために献身した人びとの美徳が多く記録されている。エディソンは多くの発明をし、「もしわたしの仕事がこの世界に快楽を増加させることができるとすれば、わたし自身も満足に思う」と言った。古代ギリシアの数学者アルキメデスは、やいばを首に突きつけられたと

きも、一心に円を描いた。バルザックは心臓病が発作し、臨終が間近いことを知りながらも、寸秒を惜しんでペンを取りつづけた。そんなかれであったから、96 編もの中・長編小説を世に残すことができたのである。かれらは集団主義的人生観の真理を把握していたわけではなかったが、人のために自らをささげるべきだとする人生観の持ち主であった。かれらの人生観は、社会的富を独占し、社会と民衆を愚弄する億万長者の個人主義的な生活観とはまったく対照的である。

世界をあれほど驚嘆させたアインシュタインは、ヨーロッパを訪問した際、ベルギーで同国女王の招待を受けたときも、古いかばんをさげて歩いて行き、女王がかれをたたえる詩を作って贈ると、それを受け取ったあと、紙の裏面に物理問題の解答を書きだしたという。これは有名な科学者たちの真実で素朴な生活観を語るエピソードである。かれらには功名や私利私欲などなく、ただ科学的発明だけが生活のすべてであった。確かにかれらの生活観と価値観は個人主義、利己主義を生存方式とするブルジョアジーの堕落した生活観とは比べようもなく美しく、すぐれたものであった。

人間の真の生は、自分自身よりも人のため、社会と集団のためのたたかいのなかにある。真の集団主義的人生観は個人の生命よりも集団の生命がより貴重であり、人生は個人の一生で終わるのではなく、集団とともに永遠に生きるという人生観である。国と民族のために、勤労者大衆の自主性のためにより多く貢献した生活であればあるほど価値の大きな生活であり、そのような生活をする人だけが真の生き甲斐を感じる。まさにここにこそ真の生の価値、人間の価値があるのである。

金正日将軍は、個人主義的人生観に比べた集団主義的人生観の本質的優位性にもとづいて、真の生、人間の真の価値にたいする正しい解明をおこない、大衆を教え導くことによって、もっとも美しい人間的な生が花咲く社会を作りあげたのであった。自分一人のためだけでなく、おのれを犠牲にしてでも同志と社会に尽くす高潔な生、国と民族、社会と集団のために自己のすべてをささげる美しい生の価値観をいだく人びとの世界が、今日、北朝鮮に見られるのである。

3　一生を人民のために生きよ

真の人間の生活は、祖国と人民の前に清く誠実に生きる生活である。人民を裏切り、歴史に逆行する人間の生活ほど醜悪な生活はない。ゴルバチョフがソ連を崩壊させた「褒賞」として「ノーベル平和賞」を授与され、数十万ドルを手にしたとき、人びとからどれほどあざ笑われたか知れない。ところが、その後、かれが人間殺戮、不正蓄財の元凶として裁判にかけられている南朝鮮の盧泰愚(ロテウ)から 10 万ドルのカネをもらったということが暴露されて、またも世間の指弾を受けた。

ソ連を破壊し、同志を裏切ったことで褒賞され、なにがしかのカネにありついたゴルバチョフは、もはや人間を失格し、人間としての価値を失った。

ベリア、マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチを除去し、自分の権力基盤を作りあげたあと、ソ連を修正主義の奈落におとしいれたフルシチョフの息子セルゲイ・フルシチョフは、国と民衆を裏切った父親のおかげで、いま米国のブラウン大学で「奨

学金」まで支給されながら米国式教育を受けている。このような生活が果たして人間らしい生活といえようか。否である。

金正日将軍は、真正な生活とは社会的・政治的生命を持って生きる生活であり、集団主義的な生活であることを明らかにし、そのような生活が民衆のためにささげられるとき、もっとも美しい崇高な生活になるという理解を確立した。

将軍は、人民に奉仕し、一生を人民のために献身するのがわれわれの人生観である、と指摘している。

人民に奉仕せよ、一生を人民のために献身せよというのが将軍の人生観である。人民に献身的に奉仕する人生観が真の人生観であるという思想は、人民にたいする科学的な理解を踏まえたものである。

では、将軍が念頭におく人民とは誰であろうか。それは、国民の絶対多数を占める人たち、自分たちの自主性と尊厳を重視し、そのためにたたかう人たち、搾取し支配する階級、権勢をふるう勢力ではなく、自分たちの誠実な努力によって精神的・物質的富を創造し、祖国を支えていく人たちである。

自分たちの誠実な労働と闘争によって新しい社会をきずいていく勤労者大衆、われわれすべてがそのなかにあり、そのなかで思想と意志をともにする人びとの集団が、ほかならぬ人民である。人民はどの社会においても、自主性の代表、進歩的なもの、新しいものの代表である。

人民はまた創造性を持つ社会的集団である。どの社会でも社会の絶対多数をなす勤労者大衆が精神的および物質的を創造する。人民はつねに知的で創造的であり、人民の力は無尽蔵である。人民を抜きにしては創造などありえず、新しいものをめざ

す闘争もありえない。したがって社会と集団のために生きるということは具体的には、人民のために生きることを意味する。人民は自主性と創造性の体現者であり、代表であるために、世界でもっとも貴重で有力な存在なのである。人間の生は世界でもっとも貴重で有力な存在である人民とともに生き、そして人民のためにささげられるとき、もっとも美しい価値あるものとなるのである。

こうした見地からして、金正日将軍の人生観は人民大衆中心の人生観だといえる。

生の目的と志向、その価値を人民への献身的な奉仕に求める人生観こそ将軍の人生観の核心である。

まさにここに一生を人民のなかで生き、人民のために活動する将軍の崇高な徳性が読み取れるのである。

将軍は「以民為天」の思想をもって生涯人民行き列車に乗ってきた偉大な金日成主席の崇高な思想と人徳をそのまま体現して、人民のためにすべてをささげている。

働く人民が世界でもっとも貴重で美しい存在であり、もっとも知的で有力な存在であるというのが、人民への献身的奉仕を生活観とする将軍の哲学的信念の根源である。将軍はこのような哲学的信念を踏まえて、党と国家の幹部や活動家をはじめすべての人に、人民大衆中心の人生観の基本的要求を示したのである。

将軍がうちだした「人民に奉仕する!」というスローガンは、幹部をはじめすべての人が人民のために自分をささげる生活観を持つことを求める革命的なスローガンである。このスローガンには将軍の愛国、愛民、愛族の人生観がこもっている。

大衆に君臨し、大衆を軽んじて官僚風を吹かせ、権勢をふるうのは許されない。権勢をふるい官僚風を吹かすのは、人民に背を向けている者たち、支配階級、搾取階級の生存方式であり、生活態度である。権勢をふるい、官僚風を吹かすのは毒を飲むのと同じことである。人民に尽くし、人民と一心同体となって苦楽をともにしてこそ、人民のために献身する真の人生を送れるのである。

将軍はつねに、幹部たちはみな人民の政治生活と物質生活に関心を寄せ、かれらがより豊かで幸せな生活を営めるよう、たえず思索し実践することを要求している。

将軍の薫陶を受けた鄭春実(チョンチュンシル)英雄は、人民のためにすべてをささげるのを真の人生観とするすぐれた女性である。慈江(チャガン)道前川(チョンチョン)郡商業管理所の所長を勤める彼女は、山間の郡の住民生活の向上をはかって、百数十ヘクタールの荒れ地を開墾し、多くの家畜を飼い、そこから得た収入のすべてを残らず住民たちのために使っている。郡内住民の生活を向上させるために、彼女が数十年間尽くした労苦は、はかり知れないほど大きい。自分自身のためではなく、人民のために労苦を惜しみなくささげたために、金日成主席は、生前、つねに彼女を大事にし、おし立てていた。自分一個人の安楽のためにではなく、人民のために力と知恵を尽くす崇高な愛国心によって、彼女は北朝鮮人民から尊敬され、慕われる美しい人間となったのである。

金正日将軍は人びとを人民のために献身する真に愛国的な人間に、崇高な生の享受者にならせるために、鄭春実英雄に見習う運動を発起し、それを正しく導いている。実に、この運動は、すべての幹部と活動家、すべての人たちが人民のためのたたかいのなかに人生の真の意味を求めるようにする有意義な運動で

ある。自分一個人のためではなく、人民の幸せのために熱情と知恵のすべてをささげ、一生を人民のために生き、たたかうこのような人生観は今日、北朝鮮民衆のなかに深く根をおろしている。

4　あすのためのきょうを生きよ

金正日将軍の人生観は、その志向と実践において美しく崇高である。それは未来志向的で未来創造的であることに根本的な特徴と活力がある。いかなる困難をも勇敢に退け、信念と楽観にみち勇気百倍してたたかう北朝鮮人民の姿は、未来への希望を失い、悲哀と絶望にもだえる人びとに大きな希望を与えている。1995 年、日本では 2 万 2,400 余名が自殺したと公表されている。経済大国をもって任ずる日本で自殺件数が年々増加の一途をたどる理由は、日本人の絶望的、厭世的な人生観にある。

南朝鮮は自殺件数で断然世界のトップを占めているが、このことからも南朝鮮の人びとの人生観がどのようなものであるかは容易におしはかれるであろう。

人間の美しく崇高な理想はいずれも、未来志向的な生活とたたかいのなかでのみ実現されるものである。しかし、人間誰もがあすのため、未来のためにおのれの生をささげているのではない。ソクラテスは、「哲学は死と対向するもの」だと唱え、アテナイの青年を堕落させたとして、死刑に処せられた。しかし、これは当時の奴隷所有者階級がギリシア人たちを明るい未来に向けて鼓舞したことを意味するものではない。今日の生も、未来に向けられた生も自分たちだけにあり、下層の勤労者大衆に

は未来などありえない、というのが搾取階級の主張であった。
　人類の生は本質において永遠である。個々の人間の生には時間的限界があるが、人類の生には限界がない。そうした意味で、人間の生、人類の生は未来志向的で、永遠であるといえる。もしすべての人が自分の世代のためにだけ生きるとすれば、あすというものはなく、歴史はそれで終わるであろうが、人類は出現して以来未来に向けて不断に創造し、闘争してきた。未来は、きょうのたたかいによって開かれていくのである。
　1950 年代の半ばまで宇宙科学は、地球上から望遠鏡やレーダーを利用して宇宙空間を観察し、解釈する程度にすぎなかった。ところが、今日ではすでに、地球を取り巻く空間だけでなく、月や他の惑星にも人工天体を数千個も送りこんで宇宙の秘密を調べ、利用する段階にいたっている。人類はいま、もっとも「幻想的な出来事」とされていた宇宙征服の途についているのだ。やがて人間は宇宙を舞台にして生き、働くようになるであろう。最初の人工衛星を打ちあげたときから 30 年たらずのあいだに達成された宇宙征服への大きな前進は、人びとに未来への希望を強くいだかせている。未来を愛する科学者たちの血のにじむような努力がなかったとしたら、今日の人類は宇宙征服を目前にした喜びを味わえなかったであろう。
　ところで、そのような未来志向とは逆に、地球村には希望も未来も放棄することを主張する雑多な哲学がはびこっている。「宇宙の熱的死滅論」が叫ばれて久しく、近代にいたっては、宗教的観念論者たちによる「終末論」が人びとに生の放棄と厭世、堕落を説教している。「新人間機械論」者たちは、現代的技術が「人間を疎外」し、いまや人類は「難破船の乗客」となったと騒ぎたて

ているが、これは未来のない搾取階級、支配階級の不安な心理を反映した非科学的な主張にすぎない。

歴史は過去から現在へ、現在から未来へと不断に前進しながらあくことなく新しいもの、未来を創造しつづけており、人間はその新しい世界に向けて熱心に創造し、闘争しているのである。

このとうとうたる歴史の流れのなかで異常気流が発生し、いま地球村に旋風を起こしている。「社会主義の終末」説がそれである。ソ連をはじめ東欧諸国における社会主義の崩壊は確かに現実ではあるが、それが歴史を逆行させているとはいえない。一部の国における社会主義の崩壊と資本主義の復帰は、歴史発展の見地からすれば、部分的で偶発的、一時的な現象にすぎない。もしこれを誇大視し、絶対化すれば、人びとは新しいものである社会主義の理想を放棄し、個人主義的な生活様式、「富益富、貧益貧」の法則が作用する非人間的な資本主義への幻想にとらわれて、新しい進歩的な歴史を創造する歩みを止めてしまうであろう。新しいもの、未来への志向を放棄すれば、人間の生活は無力な、絶望的なものとなり、結局は歴史と人類を破局へと追いこむほかなくなるであろう。現実は、未来を放棄した人びとの思想的・精神的堕落と無気力が、どんなに恐ろしい破局をもたらしているかをまざまざと見せつけている。

われわれの時代は、今日の波瀾にうちかち、人びとに新しい希望と信念と活力をいだかせる革命的で戦闘的な人生観、生活哲学の出現を切実に求めたが、これに解答を与えたのがほかならぬ金正日将軍である。

将軍の新しい人生観とはなにか。それは、きょうのためのき

ょうを生きるのではなく、あすのためのきょうを生きよ、というものである。この哲学は人間の自主的な本性と人類史発展の合法則性を具現した科学的な生活哲学であり、未来に向けた人びとの生への創造的態度を反映した戦闘的な人生観である。

人間の自主的な要求は本性において未来志向的であり、強靭な実践をその前提とする。世界と自己の運命の主人となって自由に生きようとする人間の要求は、一度に順調に達成されるのではなく、自然と社会をたえまなく改造し、変革していくたたかいのなかで実現されるのである。人間は世界を認識し改造しながら自分自身をたえず発展させ、そのような連続的かつ弁証法的発展過程を通じて、世界をますます自分自身に有利に作り変えている。人間の活動できょう得た認識と変革の成果は、より大きなあすの成果のための前提となる。人間の世界支配の過程は真理の果実、実践の成果を一つ一つ蓄積していく過程であり、過去から現在へ、現在から未来へとそれらを固め、拡大していく過程である。

もし、歴史の流れが直線だけでなくジグザグにも経過するということを忘れて、ジグザグの行程に尻ごみし、きょうの失敗に失望して前進と創造を放棄するとか、きょうのためのきょうだけを考え、あすのための準備をおろそかにするならば、人間の発展はありえず、歴史は前進しえないであろう。

金正日将軍は、自主の道にそってたくましく前進するとうとうたる歴史の流れのなかで、人びとが真の生を享受するようにするために、きょうのためのきょうを生きるのではなく、あすのためのきょうを生きよ、という哲学を示したのである。

この哲学は、人びとに自主性が実現される未来への確信と勝

利の信念をもって生きることを求める思想であり、きょうの一時的な苦労や試練に負けて、へたばることなく、それを勇敢に乗り越えて革命をつづけ、たえず前進することを求める思想である。それはまた、たとえきょうは困苦欠乏し、正常を欠く実情にあっても、あすは必ずすばらしいものに変わるという確信を持って勇敢に前進することを求める思想である。

きょうの誇らしいたたかいを通じて希望にみちたあす、未来を創造し、たぐりよせていくべきだという生活と闘争の真理を示した将軍の哲学的人生観は、今日の時代に生きる人すべての生活方式、闘争方式を明らかにした革命哲学である。

この哲学はまた、あとの世代にりっぱなものを残すべきだとする高い道徳的責任感をいだかせる哲学である。人間は自分の代だけでなく、あとの世代のために生きる存在である。動物や植物は盲目的な生存方式をもって子孫を作るが、子孫にどのような遺産や生活資料も残さない。子孫に生存に必要な精神的および物質的遺産を残すのは、ひとり人間だけである。とはいえ、人間の誰もがそうするのではない。「きょうは思いきり食いかつ飲もう。あすは死ぬだろうから」というのが実存主義的生活観であり、実際、多くの人たちがこのような生活様式におぼれているのだ。今日、世界には「未来学会」とか「21 世紀委員会」とかいった多くの研究団体があるが、それらは、例外なく、未来社会に絶望し、人びとに堕落を説教している。

金正日将軍が創始した、あすのためのきょうを生きよ、という哲学は、すばらしい未来を創造してあとの世代に残すべきだとする高度の責任感を現代の人びとに植えつけ、未来志向的な実践へと励ます貴重な思想である。きょうの苦難にみちたたた

かいがあとの世代に美しい幸せを残すたたかいだという自覚と責任感にめざめるとき、人びとは、たとえきょうの現実は苦しくても、それを乗り越えて未来を創造していこうという誇らしいたたかいをくりひろげるのである。

将軍はこのような哲学的人生観で北朝鮮の民衆を啓発し、そのような意志で革命と建設を導いている。北朝鮮が米国をはじめとする帝国主義連合勢力と南朝鮮当局者のたえざる侵略策動と封鎖のなかでも、不屈の意志と勝利の信念を持って自ら選んだ社会主義の道を力強く前進しているのは、そのためである。

きょうのためのきょうを生きるのでなく、あすのためのきょうを生きよ、という将軍の哲学的人生観は、人びとをもっとも勇敢でもっとも美しい、もっとも情熱的な生の所有者とならせ、かれらを自主の新しい世界を創造するたたかいへと力強く励ます、有力な思想的・精神的原動力である。

Ⅵ　愛と信頼の道徳原理

金正日（キムジョンイル）将軍の指導の偉大さは、将軍が北朝鮮の社会をもっとも美しい道徳と信義にみちた理想郷に作りあげたことにある。今日、世界は全国を美しい人間的な道徳と信義が支配する国、指導者と民衆が渾然一体をなし、すべての人がむつまじく暮らしている人間的なすばらしい社会を作りあげた将軍の指導に感嘆を禁じえないでいる。

人間を道徳的に完成させ、美しい社会をきずくことほど困難なことはないであろう。なぜなら、道徳と信義は良心にめざめた人びとの強い自覚を通して守られるものであり、また道徳・信義の人間関係が成立していてこそ社会は美しくきずかれるからである。ところが、人間本然の道徳は長年にわたる搾取社会の存続によって汚され、今日にいたってはさらに破壊され荒廃の様相を呈している。

このような道徳的破壊が絶頂に達した社会がほかならぬ南朝鮮である。国と民族を守る正義の行動をとった人たちが異端者、反国家的な人間として処罰され、民主主義を望み国の統一に向けてたたかう人たちが不徳漢と断罪されている社会が南朝鮮である。カネと権力が人間的な道徳を踏みにじり、良心と正義が潮笑と非難の的となっている南朝鮮の風土は、人間的な道徳をますます荒廃させる悪の要因である。歴代の権力者たちが国民を欺瞞し、国を売るもっとも恥知らずな卑しい人間と決めつけられて投獄され、世界的な指弾と嘲笑の的とされているこの地

で、人間的な真の道徳を見出せないのはきわめて当然なことである。金泳三（キムヨンサム）政権の出現とともに、南朝鮮の道徳的退廃は極限状況に達した。
アリストテレスは、「生まれたときから、ある人は服従する者として、ある人は支配する者として規定されている」とし、奴隷たる者はどのような道徳的自由をも求めるべきでないと言った。このような非人間的な道徳観念が、搾取階級社会を堕落へと導いたのである。
ルソーは、道徳の退廃を回復する方途を、人間が「文明」から脱して「自然」に帰ることだとしたが、人間の自然への回帰が道徳の回復につながるとはいえない。資本主義が毎日、毎時、個人主義、利己主義を助長している状況にあって、退廃した道徳の回復、道徳的な理想社会の建設は至難の課題である。
しかし将軍は、ユニークな人間中心の倫理哲学をもって、北朝鮮に人間的な道徳を全面的に開花させたのであった。

1　人間的な道徳の基礎は愛情と信頼

造園家が美しい花園を作ろうとすれば、花の生理を知らなければならないように、指導者が道徳的な理想社会を建設するには、道徳の原理を正しく定立しなければならない。真の道徳倫理の原理を持ってこそ、人びとを美しい道徳的行為に導き、社会の和合と団結を果たせるのである。
孔子は儒教道徳の原理を示して道徳的な社会の建設を提唱したが、それはまったく実現不可能なものであった。かれの「正名」思想は、人びとの守るべき道徳をもっともらしく説いてはいる

が、それは農民、商工人、手工業者、奴婢などの「賎民」を下層とし、その上に立つ士、大夫、公、国王で構成された身分・等級の秩序に背けば、災厄と騒乱が引き起こされるとし、これを維持するよう説教する欺瞞的なものであった。

封建的な儒教道徳やブルジョア道徳が、人民への抑圧と搾取、差別を合理化し、人民の反抗を抑えるための道具として利用されてきたのは周知の事実である。

レーニンは、道徳の階級的性格を隠蔽するブルジョア倫理学に反対し、共産主義的倫理学を提起してこう指摘している。「誰かがわれわれに倫理について語れば、われわれはこう言うであろう。共産主義者にとってすべての倫理は、結束された連帯的規律と搾取者に抗する自覚的な大衆的闘争のなかにある、と。われわれは永遠の倫理を信じないし、倫理にたいするあらゆる欺瞞的な言辞を暴露する。

倫理は人類社会がより高く向上し、労働にたいする搾取からの解放に仕えるものである」(『レーニン全集』353 ページ)

レーニンは、超階級的な道徳倫理をうんぬんして、共産主義者には道徳も倫理もないと主張するブルジョアジーの誤った見解に打撃を加え、ブルジョア道徳に比べた共産主義道徳の優位性を強調したのである。

レーニンは、人びとが個人主義、利己主義、私的所有の心理を克服し、集団主義精神と労働にたいする共産主義的な態度、社会的所有を重んずる精神を培うことを、共産主義道徳の重要な要求として提起している。

金正日将軍は、真の道徳は人間の社会的本性である自主性と創造性を擁護するすべての人が守るべき普遍的な道徳である、

と指摘している。言いかえれば、真の人間的な道徳とは、人間の社会的本性である自主性と創造性を重んじ擁護しようとする自覚的な行動規範だとしている。したがって道徳的な人間になるというのは、人間の自主性と創造性を尊重し、それに即して行動する存在になるということを意味する。真の道徳的行動とは、人間の自主性と創造性を重んじ、守る行動である。

では真の道徳の基礎はなにか。

将軍は、人間の本性を踏まえて、人間的な道徳の基礎を二つの側面から解明している。その一つは人間の自主性、独自性を認めることである。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「もともと同志愛は、相手がたを自主的な存在とみなし、その独自性を認めることを前提とします。支配者と被支配者のあいだに同志愛というものはありえません」(『チュチエ思想の継承発展について』日本語版 198 ページ)

道徳とは人びとのあいだで守られるべき普遍的な規範であるから、人びとのあいだに道徳的関係が成立するためにはなによりもまず、相手がたにたいする正しい態度をとるべきである。道徳的関係とは尊重と信頼の関係である。相手がたを尊重しないでは、どのような道徳的・信義的関係も成立するものではない。

人びとはお互いが道徳的・信義的な関係をもって信頼し助けあうようになるとき、人間の自主性を認め、尊重するようになる。すなわち相手がたの自主性を尊重し、その独自性を認めることにこそ真の道徳的関係を成立させる基礎がある。相手がたを無視し、認めないところに道徳的・信義的関係など生まれる

はずがない。自主性はどのような従属をも排して自己の運命の主人として生きようとする性質である。人間は自主性を生命とするがゆえに貴重な存在であり、そのために他人との関係を重んずるようになるのである。

自己の自主性を重んずるだけでなく、他人の自主性と独自性を認めること自体が道徳的であり、そのような関係が成立してこそ、人びとはお互いに尊重し助け合う道徳的・信義的関係を発展させることができる。

支配者と被支配者のあいだには道徳的・信義的関係などありえない。支配者は被支配者の自主性や独自性を認めない。被搾取階級にたいする抑圧は、それ自体がすでに、相手がたの人格や尊厳を認めず、無視するものである。人間の自主性を重んじ、守ることこそ道徳と倫理の内容をなし、その最高の表現となるのである。

人間的な真の道徳の基礎はまた、愛情と信頼である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「人間への愛情と信頼は、真の人間関係、人間道徳の基礎であり、自分自身よりも人のために、社会と集団のために献身するのは、人間の高尚な道徳・信義です」(『革命の先輩を尊敬するのは革命家の崇高な道徳・信義である』5ページ)

道徳が社会的に守るべき人びとの普遍的な行動規範であるとすれば、愛情と信頼はその性格と内容を規定する基礎である。自主性、独自性を認めることが人びとのあいだに道徳的関係を成立させる前提になるとすれば、愛情と信頼は、真の道徳のありかたにかかわるものである。

愛情と信頼が人間的道徳の基礎であるというのは、それなし

には人びとのあいだに真の道徳的関係が成立しえないということであり、真の道徳とはその性格と内容において、人びとがお互いに愛し信頼するということを意味する。

人間を愛するということは、人びとの政治的生命を重んじ、保護し、その生活に配慮をめぐらすということを意味し、人間を信頼するということは、人間を世界でもっとも有力な存在とみなし、運命を開拓するたたかいで思想と行動をともにしうる友、同志とみなすことを意味する。したがって、愛情と信頼は人間関係を真に美しい、信頼のおける確固たるものとならせる道徳的基礎となるのである。

愛情と信頼を前提としない道徳・信義は成立しえず、真実なものになりえない。愛し信頼する心と行動こそ人びとのあいだで守られるべき本分と義務を実務的なものではなく、道徳的、信義的なもの、良心的なものとならせるのである。

ニーチェは、「真の道徳は生の本能によって支配されるべきだ」とし、生の本能とは、より強いものとなって人を支配しようとする「生存意志」「権力意志」であると言った。もし、「生存意志」や「権力意志」が生の本能だとすれば、このような本能によって結ばれる人間関係は、人を支配し、殺戮し、略奪する関係とならなければならないであろう。これは非人間的、野獣的な行為の説教である。

かれは真の道徳は「生の本能」によって支配されるべきだとする理解に立って、「他人への配慮、同情、自分の本能の抑圧を前提とする道徳は非人間的なもの」であると主張した。人に同情し配慮することが自分の本能を抑圧する反人間的な道徳だとするそうした主張は、道徳そのものを認めないものであり、人間相

互の関係をけだもののあいだの関係に変えようとする行為にほかならない。かれのこのような道徳観がナチズムの狂乱と非人間性を生んだのである。人間の相互関係が自主性にもとづく関係、愛情と信頼にもとづく関係にならなければ、人間社会は破壊され、人間は荒廃する。このような非道徳的な関係は、政治生活はもとより、経済生活でも人びとが互いにだましあう関係を生み、搾取と収奪、憎悪と背信を助長する。

米国が法治国家だと自任しているのは、人間の倫理が荒廃し、法による統制が強力に作用する国家であることを示している。米国は弁護士王国として世に知られている。天文学的なカネが訴訟費などの法律関係に費やされている。米国には法律家がおよそ 80 万名にのぼり、世界の弁護士資格所有者の 70%が米国にいるのである。一言でいって、米国は「訴訟志向的」社会である。

米国がこのような社会になったのはなぜだろうか。それは、この国では人間的な良心と道徳が姿を消し、個人主義、利己主義にもとづいて人びとが互いにだましあう略奪的な法則が作用する社会だからである。人びとは互いにだましあい、個人が会社や国家をだまし、会社が会社をだます欺瞞と恥知らずの法則が社会を支配しているために、米国は弁護士王国となっているのである。

真の道徳的関係は思想と志を同じくする社会的集団のなかでのみ成立する。

運命をともにする社会的・政治的集団内の人間関係は、まったく平等な自主的関係であるとともに、お互いが献身的に助力する同志愛の関係である。したがって真の道徳は個々の人間の

自主性を十分に発揚させると同時に、集団の統一と団結の強化に寄与するものになる。このような道徳が具現された社会こそ、正義にみちた社会となり、同志愛によって結ばれたもっともむつまじい団結した社会となるのである。

北朝鮮が人間的な道徳が花咲く、人倫の花園となっているのは、金正日将軍によって自主性と愛情と信頼にもとづく真の人間的な道徳にかんする思想が創始され、それがりっぱに具現されているからである。

2　良心と信義を大事に

人間は良心と信義に生きるといわれている。良心も信義もない人間は人間とはいえない。

良心と信義の貴重なことをわきまえてこそ、人びとはその本然の意味にそって美しい道徳の世界に生きることができるのである。

金正日将軍は、社会の完成とはその主人である人間自体の完成であり、人間の完成とはほかならぬ道徳的完成であるとし、人びとが道徳的な完成をとげるためには、良心と信義に徹するべきだとする新しい道徳観、倫理観をうちだした。

発展した社会とは良心と信義が支配する道徳的な社会である。こうした見地から「成熟した社会」を標榜する米国を見れば、そこでは人間的な道徳が否定されていることがわかるのである。

米国の青年が軍隊に入るとパンフレットを配布されるが、その第1ページにはこう書かれている。

「諸君は無慈悲な腕利きの殺人者にならなければならない」ま

た、かれらに配られる『兵士とはなにか』という本にはこう書かれている。「国家は諸君のために 3 万ドルを支払っている。きみはきみの受け持つ人間を殺すことでこれに報いることができるのだ」これがまさに現代文明を誇る米国の姿である。一言でいって、人間を殺人者に作りあげ、無慈悲な殺戮へとそそのかす国が米国である。

米国人はこのような非人間的な野獣の道徳観で馴らされているのだ。現実がこうであるにもかかわらず、かれらは米国こそ「成熟した民主社会」のモデル、人権が最高のレベルにある発展した国だとし、他国の「人権」に言いがかりをつけているのである。

真に成熟した民主社会を建設するには、人間の尊厳が生きており、人間の良心と信義が重んじられる社会をきずくべきである。

真実な人間の世界は道徳と信義の世界であり、それが成熟した国が世界でもっとも美しく発展した国である。

金正日将軍は真の人間社会の建設と関連して、良心と信義を守ることが道徳的完成の基本的な要求であるとする貴重な思想を示したのであった。

良心と信義に生きよ。これが将軍の教えである。

良心と信義は人間に特有の美徳であり、人びとを自覚的な美しい行動へと動かす精神的力の源泉である。先進的思想を持っていても、良心に欠け信義を守れないような人間には高尚な人間的風格が備わらず、したがってそのような人間は真の人間にはなれない。

旧社会においても、良心ある人びとは、道徳と信義を重んじ、それで人びとの人格を評価し、道徳・信義に反する行動を人間

らしくないとして忌みきらった。搾取社会では真の道徳はありえない。搾取者と被搾取者のあいだには良心的、道徳的な関係がなりたたない。道徳的偽善は搾取階級の本性であり、道徳的腐敗はブルジョア社会の必然的な産物である。

キルケゴールが「わたしはヤヌス」（古代ローマの大神）のように二つの顔を持っている。一つの顔では泣き、一つの顔では笑っている」と言ったのは、搾取階級の道徳的偽善と両面性を端的に表現したものだといえる。

また、パスカルが「すべての人間は本来、互いに憎みあうものであり、愛情や憧憬なども根本においては憎悪にほかならない」としたのは、かれの階級的な限界性の表出である。人間は、本来、互いに憎みあうものだとする主張は、搾取者、富める者の勤労者にたいする抑圧と搾取を合理化する詭弁にすぎない。

世界にはキルケゴールやニーチェの野獣のような倫理観より以上に恥知らずな倫理観を持つ人びとがいることを強調する必要がある。その代表的な人たちが日本の政客である。

周知のように、日本の政治家たちは、第 2 次大戦当時、日本軍がはたらいた性奴隷行為が道徳的な過ちであることを認めていない。日本の閣僚たちは、挺身隊に引っ張られた女たちが「性行為」をしたにすぎず、またそれには国家が関与していなかったために、国家的な償いも謝罪もする必要がないと放言している。元法務大臣奥野は「太平洋戦争は自衛の戦争」であったと言い放った。これは、日本の政治家たちが最低の良心や道徳さえそなえていない無頼のやからであることを示すものである。

もちろん、そのような非人間的なやからに良心や道徳を期待すること自体が無意味かも知れない。

先にも強調したが、真の良心と信義は正義に生きる人だけに特有のものである。人間を大事にする人、自主性を重んじる人だけが、良心と信義の世界に生きられるのだ。

良心と信義は、人間の本性である自主性と愛情と信頼を踏まえていてはじめて真実なものとなる。

人間は自主性を生命のように重んじる存在であるがゆえに、自主性をめざすたたかいに良心的に参加し、そこでは人びとの協力が必要であるために、信義ある行動をとるのである。

金正日将軍は、人びとに良心と信義の貴重さを悟らせ、それを全社会的なものに高めることによって、領袖、党、大衆の渾然一体をもっとも真実かつ強固なもの、社会の発展を促すもっとも活力ある原動力とならせたのである。

「アサにつるるヨモギ」と言われるが、将軍が導く北朝鮮の社会で、人びとは良心と信義を重んずる道徳的人間として完成されつつある。

北朝鮮の人たちの良心と信義にはくもりがない。それは真の人生を取り戻し、幸せをもたらしてくれた領袖と祖国への報恩と忠誠の心として特徴づけられている。そうした清い良心と信義が、かれらの生活と活動の隅々にしみこんでいるのである。

金日成(キムイルソン)主席への北朝鮮人民の忠孝心は最高の境地に達している。奪われた祖国を取り戻し、人民を主人とならせた国を建て、価値ある人生を送れるようにしてくれた民族の英雄、慈父である金日成主席に忠誠を尽くすのはかれらの良心と信義の当然の発露なのである。

金正日将軍への北朝鮮人民の忠孝心もまた、その気高さと美しさにおいて最高の境地に達している。

将軍は主席とまったくおなじ方であり、主席の生前の志を継いで、国防と人民の幸福のために献身している。そのために、北朝鮮の人びとは将軍を敬慕してやまないのである。

世界帝国主義列強の悪辣な侵略策動と封鎖がつづいているきびしい情勢のもとでも、革命の赤旗を高くかかげて国と人民を守っている将軍の崇高な労苦を思って、北朝鮮人民は将軍と運命をともにすることが自分たちの良心であり、当然の道義だとしている。

かれらはまた、自分を生み、育ててくれるありがたい祖国にいささかでも報いようとし、誠実に働くことを当然の義務としている。

人民の慈父である将軍は、人民の生活の隅々にまで思いをいたし、細心の配慮をめぐらしている。

深い山間の村で生まれた三つ子、名もない鉱山や炭鉱で長年働き還暦を迎えた労働者、100 歳の誕生日を迎えた全国の老人たちに、お祝いの贈り物をし、また、戦傷栄誉軍人を人生の伴侶とする若い女性たちには親心をもって謝意を表し、ペン字の上手な子どもたちが送った手紙にも丁寧に目を通して、返事を寄こす人間味にあふれた義理がたい方である。だからこそ将軍にささげる北朝鮮人民の忠孝心は、たとえようもなく清く、真実で、美しいのである。

不慮の事故で南朝鮮側の領海に漂流した金哲鎮（キムチョルチン）、金慶哲（キムギョンチョル）、鄭光善（チョンゴワンソン）ら人民軍兵士が軍関係者たちの執拗な圧力と懐柔、欺瞞にも屈せず、強くたたかいぬいて北朝鮮に帰ったことからも、良心と信義に生きる北朝鮮の人たちの心情がおしはかられるのである。金哲鎮は審問中、軍関係者たちが敬称抜きで金正日将軍

の名を呼ぶことに強く抗議して、かれらを屈服、謝罪させ、ついに最高司令官金正日将軍のもとへ帰ったのであった。

南朝鮮の人たちはテレビで、休戦ラインを越えた 3 人の兵士たちが「敬愛する最高司令官金正日将軍万歳!」と唱える姿を見て、清い良心と信義をもって将軍を高くいただくかれらの高邁な精神に圧倒されたのであった。

実に金正日将軍は清い良心と信義をもって人民のために献身する慈愛深い指導者であり、それゆえに、人民のくもりのない良心と信義に支えられ、敬慕されているのである。

良心と信義をもって人間を道徳的に完成させ、忠孝心を通して社会の一心団結、渾然一体を固めていく将軍の指導力こそ史上かつてない美しい人間愛の花園をきずきあげた偉大な原動力である。

3　革命の先輩を尊敬せよ

ヨーロッパではいま、被抑圧大衆の社会主義偉業に大きく貢献し、人びとの尊敬と称賛の的となっていた労働者階級の領袖たちをそしり、その業績につばを吐く奇怪な騒動がくりひろげられている。

社会主義に敵意をいだいていた帝国主義者やブルジョア論客たちは、時を得たとばかりにマルクス、レーニン、スターリンを攻撃し、その思想・理論が「非科学的」であると喧伝し、かれらの業績を否定する大キャンペーンをくりひろげており、なかにはかれらの人身攻撃をあえてする者までいる。

世界の人びとはそうしたアブノーマルな動きを道徳的な、正

義の目で見ており、かれらの愚かな騒動はいずれそれなりの代価を払うことになろうと警告している。

では、労働者階級の領袖や革命の先輩を冒瀆するそのような没理性的、背徳的な行為の元凶は誰であろうか。それは、労働者階級の領袖のおかげでソ連共産党の指導部に居座れたゴルバチョフのような政治ブローカーたちである。かれらの背信行為と時を同じくして、マルクスとレーニンが「にせの予言者」であったとし、かれらの社会主義・共産主義理論が「実現不可能な妄想」にすぎなかったことを「証明」しようとする「理論」が、いま西側の世界に氾濫している。

今日の事態は、労働者階級の先行領袖や革命の先輩にたいする正しい態度を定立することをさし迫った時代の要請として提起したが、人びとはなすすべを知らず沈黙を守るのみであった。

このようなときに、真の人間的道徳・倫理の哲学をもって堕落した道徳と信義を正常なものに戻そうと決心し、革命の先輩を尊敬すべきであること、そうすることが真の共産主義者の崇高な道徳・信義であると宣言したのが偉大な金正日将軍である。

革命の先輩を尊敬せよ！　これが将軍が時代と人類の前に示した革命的倫理の大課題である。

革命の先輩を尊敬すべきだという将軍の思想は、革命と道徳の相互関係にたいする新しい科学的解明にもとづいている。

将軍は、道徳・信義にかんする問題をたんに人格の完成と社会の和合の実現問題として考察したのではなく、革命の運命にかかわる根本的な問題だと認めた。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「革命の先輩を尊敬するのは、革命の要求であり、革命家が守

るべき崇高な道徳・信義です」(同上3ページ)

道徳・信義は人間相互の一般的関係だけでなく、先輩たちとの関係ではっきりと現れる。人間関係で先輩と後輩関係はとくに道徳と信義にかかわる関係である。ここで師弟関係や先輩後輩の関係は、弟子や後輩が師や先輩に尊敬と信義をもって対する関係になるべきだとするのが一般的な理解であろう。もちろんこのような要求は、人間生活で容易に受け入れられ、またそうあるべき問題だといえる。

しかし、金正日将軍は革命の先輩にたいする道徳・信義の問題を、たんに先輩と後輩のあいだで守られるべき道徳・信義ではなく、革命の運命にかかわるより高度のレベルで履行されるべき、きわめて重要な意義を持つ問題だとしている。

革命の先輩とは、人民大衆の自主性および国と民族の解放をめざすたたかいの草分けであり、たゆみない闘争をもって貴重な歴史的業績を積んだ先輩たちである。かれらは祖国が日本帝国主義の植民地に転落したとき、国と民族の解放をめざしてたたかった抗日愛国烈士であり、その高貴な伝統をうけついでわれわれの前の時代を輝かせた人たちである。

したがって、革命先輩を尊敬する問題は、国と民族、人民のために献身的にたたかったかれらを積極的におし立て、かれらの思想と業績をかたく守り、継承発展させる問題となる。

かれらの崇高な革命思想と苦しいたたかいを通してなされた業績は、革命の貴重な獲得物であり、革命偉業を継承、完成するための貴重な元手である。革命の代をつぐすべての世代が、革命の先輩たちの思想と業績をかたく守り継承し、発展させてこそ、革命偉業は次代にうけつがれて前進し、最終的に完成さ

れるのである。

革命先輩への尊敬は、人民の自主性をめざすたたかいが一代で終わるのではなく、代をついでおこなわれる長期のたたかいであるがゆえに、おろそかにできないのである。革命の先輩を尊敬しないのは革命の継承を拒み、かれらの業績を無視し、革命を放棄することにつながる。

東欧社会主義諸国の崩壊は、革命の先輩を尊敬する問題がいかに重要かつ深刻な問題であるかを語っている。かつての一部社会主義国で、党と国家の指導的地位を占めた日和見主義者や俗物たちが革命の先輩を冒瀆し、その業績を抹殺する背信行為をはたらいた結果、革命の先輩たちの栄誉が損われ、社会主義のイメージが汚され、あげくのはてに社会主義体制そのものが崩壊したことは、革命の先輩にたいする観点と態度が革命の運命、社会主義運動の発展にかかわるきわめて重大な問題であることを確証している。

革命の先輩を尊敬するのはもともと、真の人間、革命家にとっておろそかにできない革命的信義である。革命の先輩後輩の関係は、革命に先に参加するかあとから参加するかという違いはあるが、革命の道でともにたたかう革命家のあいだの同志的な関係である。親と子の関係が主として肉体的生命を与え授かる血肉の関係だとすれば、革命家たちのあいだの関係は、志を同じくし生死運命をともにする革命同志のあいだの関係である。

革命の同志を熱烈に愛し、同志のあいだの革命的信義を守ることを崇高な義務とし、栄誉とするのが革命家の真の道徳的風格である。したがって、革命の同志を裏切り、同志にたいする良心、信義を捨て去るのは、もっとも恥ずべき背信行為である。

国と民族のために革命の草分けの道を歩き、大きな功績を残して世を去った革命の先輩たちを尊敬するのは、革命家の道徳・信義のうちでももっとも崇高な道徳・信義だといえる。抗日の聖戦で革命闘士たちが生死をわかつ戦場や断頭台で最期を遂げながらも「未来を愛せよ」と叫んだのは、かれらがあとの世代を愛していたからである。こうした意味で、独裁政権に抗し、自主、統一をめざす聖戦に身をささげた愛国烈士たちを忘れず、かれらの遺志を継ぐことは、人間の道義からしても、後輩の立場からしてもきわめて当然であろう。

金正日将軍はこうした意味から、民族史に名を残した歴史的人物にたいしても公正な評価をおこない、尊敬するようにしている。北朝鮮で古朝鮮の元祖檀君(タングン)の墓を発掘し、檀君陵を壮大に建造したことや、強大国高句麗の始祖東明(トンミョン)王の陵と高麗の太祖王建(ワンゴン)の陵をりっぱに復元したことは、民族の先祖を尊敬するようにという金日成主席の崇高な志をうけついだ将軍の愛国・愛族思想と賢明な指導によるものである。

南朝鮮は北朝鮮とはうらはらに、先祖を冒瀆し、抗日闘争で功労のある愛国烈士をそしり、中傷する行為がためらいなくおこなわれている。国と民族を裏切った親日分子が愛国者としてたたえられ、事大・売国の先頭に立っていた人たちが功労者として崇められるという逆立ちした道徳的行為が政権当局によって奨励されるなど痛憤すべき現象がはびこっているのである。

金正日将軍は、、革命の先輩を尊敬すべき新しい倫理を示し、革命の領袖への忠誠心が革命的信義の最高表現になるという思想をうちだした。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「革命の先輩の最高代表は領袖であり、領袖への忠実性は革命的信義の最高の表現です」(同上 7 ページ)

労働者階級をはじめ人民の領袖は、革命の最高の脳髄であり、最高の指導者である。人民は歴史の主体ではあるが、すぐれた領袖の指導を受けてはじめて自己の運命の真の主人、歴史の自主的な主体としての地位を占め、主体としての役割を果たせるのである。なぜなら、領袖は科学的な革命思想と戦略戦術をうちだし、大衆を意識化、組織化してたたかいを勝利に導くからである。また、領袖の指導のもとに自主性をめざす人民大衆のたたかいが開かれ、勝利のうちに前進して最後の実りがもたらされるからである。このことは、人民大衆の自主偉業がほかならぬ領袖の偉業であり、革命の先輩の思想と業績の継承とは領袖の革命思想と指導業績の継承であるということを意味している。したがって、革命の先輩を尊敬するのは、領袖への忠実性に集中的に表現されるといえる。領袖に代をついで忠誠を尽くすのは、真の人間、革命家の本分であり、最高の革命的信義である。

こうした見地からして、領袖に忠誠を尽くし、その偉業を継承することを個人崇拝だとして冒瀆し、領袖をそしるのは、正常な思考方式を持つ人間の行為とはいえない。

これまでにも帝国主義者や革命の裏切り者たちは、社会主義偉業に反対し、攻撃のほこさきを労働者階級の領袖と先行世代の革命家たちに向けていた。それは、社会主義偉業が領袖の指導と先行世代の革命家たちの犠牲的なたたかいによって開かれ、勝利してきたし、社会主義の尊厳がかれらの名誉とつながっているからである。

歴史は革命の領袖への背信行為がいかに醜悪なものであるかを示している。マルクスの死後、ベルンシュタインをはじめ第2インターナショナルの修正主義者たちは、マルクスを冒瀆し、その思想と業績を修正するなどの裏切り行為をおこない、トロツキーら日和見主義者もまた、レーニンとその思想、業績を冒瀆し反旗をひるがえした。このような変節と裏切りは革命が勝利したソビエト・ロシアで公然とおこなわれたのである。

スターリンのおかげで国家首班の地位についたフルシチョフは、権力を握るや師であるスターリンをそしる行為をはたらき、先輩たちのおかげでソ連共産党書記長の地位についたゴルバチョフはレーニンと社会主義的ソビエトの伝統を裏切り、帝国主義に屈服して社会主義を崩壊させ、資本主義を復帰させる大罪を犯した。

フルシチョフは、スターリンの生存中はかれを師として崇め、自分はかれの「忠実な弟子」だとして、かれに忠誠を誓い、こびへつらっていた。この野心家は自分が正直な人間であるかのように見せつけるために、スターリンの前に立つときはいつもウクライナの民族衣装を着ていた。ところが、フルシチョフはスターリンが死亡して20分もたっていないときに、死体のそばに坐って毒々しい目を光らせ、スターリンが死んだからには自分がその地位を占めなければと、政敵たちをひそかにねめまわしていたという。スターリンの葬儀の日、かれの柩をかついだフルシチョフの姿について、外信はつぎのような論評を加えている。「かれの目や口もとにはどこかただならぬ色が漂っていた。かれは柩をかつぐともかつがないともいえる格好で、顔をしかめ、おぼつかない足どりでついてゆくだけだった」と。権力を握

るとかれは豹変してスターリンを中傷しはじめ、工場や企業所、街頭にあるスターリンの名をことごとく消してしまい、スターリンの銅像や記念碑をとりこわし、はては赤い広場に安置されていたスターリンの遺骸まで火葬に付してしまった。その後、スターリンの息子に姓を改めさせ、さらに自由剥奪刑に処したあげく死に追いやり、娘からはソ連の公民権を奪って追放するということまでした。

ゴルバチョフは、かれがソ連共産党書記長の地位についたとき、「わたしはレーニン党の路線を実行することを約束」すると「涙ながらに誓約」し、1986 年 2 月のソ連共産党第 27 回大会では、党の綱領に「マルクス・レーニン主義の旗のもとにソ連人民は共産主義社会を建設するであろう」という条文まで入れるようにしておきながらも、やがてそれを裏切って社会主義を誹謗中傷し、強力なソビエト連邦を解体し資本主義を復帰させる裏切り行為をはたらいた。ソ連では野心家、陰謀家である現代修正主義者たちによって社会主義が脱線し、内部瓦解を起こして、ついには崩壊してしまったのである。

金正日将軍は、正義と道徳の原理をもって、このような俗物たちの道徳的低劣さと背信的罪状を歴史と人類の前に告発した。

労働者階級の先行領袖たちのおかげをこうむり、マルクス・レーニン主義の旗を高くかかげることで共産党の最高の地位についたかれらが、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの思想と業績をそしり、かれらを中傷するという恥知らずな現実を目撃して、人びとは革命の先輩を尊敬する将軍の崇高な道徳・信義の世界に驚嘆を禁じえないでいるのである。

将軍は革命の先輩にたいする尊敬を道徳的な座右の銘として

いるがゆえに、全人類があれほど敬慕してやまない金日成主席の逝去に深く心を痛め、その業績を後代に末長く伝え、主席を永遠な太陽として崇めるよう、錦繍山(クムスサン)記念宮殿を最高の聖地として雄壮に建造したのである。

錦繍山記念宮殿は将軍の倫理哲学の大きな精華であり、道徳・信義の化身である将軍の崇高な徳性の最高結晶体である。それは人びとに将軍のもっとも高邁な道徳・信義の世界を見せる歴史的な宮殿である。

将軍は敬慕してやまない主席の思想と業績をそのまま継承していく偉人である。主席の逝去後、世界に向けてつぎのように宣言している。「わたしからどのような変化も期待するな!」

これが主席の志を汚れなく継承し、主席に無限の忠孝を尽くす金正日将軍の思想であり、意志である。

革命の先輩を尊敬すべきだとする将軍の崇高な倫理思想と先行領袖にたいする深い尊敬と評価は、将軍こそ人間のなかの真の人間であり、聖人のなかの大聖人であることをわれわれに痛感させている。

4　同志愛を大事に

金正日将軍の倫理哲学の主要な内容をなすのは、同志愛を道徳的義務として重んずべきだとする思想である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「すべての人は集団内で平等な資格をもち、同志的に愛し助けあうことを道徳的義務とすべきです」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版198ページ)

真の人間関係は良心と信義の関係になるとともに、同志愛の関係になるべきだとするのが将軍の倫理観である。同志愛は将軍によって新たに定立され、道徳の世界における重要な栄養素となった。

将軍は、真の道徳は同志愛にもとづくべきであり、そうしてこそ真の人間的な道徳的関係が成立するという重要な思想をうちだした。

元来、愛情とは人間の本性に根ざした美しい崇高な感情であり、品性である。人間は協力を生存方式とする社会的存在であるために、互いに心を交流し、行動をともにするのは当然なことである。ところでこの相手がたを重んじる心と行動がほかならぬ愛情である。フォイエルバハは「きみ」と「わたし」のあいだの愛情を核とする「新しい宗教」を作ろうとしたが、それは超階級的な愛情へのアピールにすぎなかった。フロイト主義が唱えている愛情は、動物的なセックス本能にもとづく低劣な堕落した非人間的な愛情である。

もっとも美しく崇高な愛情は同志愛である。

同志愛とは思想と目的、意思を同じくする人たちのあいだに交わされる愛情である。たんなる血縁関係にもとづく愛情とかエゴを本心とする愛情、裏切りの気持をこめた偽りの愛情でなく、運命をともにすることを前提とする、私心のない不変の愛情が同志愛なのである。

思想と理念、目的と志向、そして運命をともにするなかで結ばれた人びとのあいだで交流する心と共同行動こそ同志愛の本質的内容をなすのであり、したがって同志愛はその性格と志向においてもっとも美しく崇高なのである。

労働者階級の最初の領袖であったマルクスにたいするエンゲルスの愛情は格別なものであった。かれはマルクスを人類史の発展法則を発見し、労働者階級の解放偉業を畢生の使命とする傑出した領袖であったとして、わが戦友を誇り、支持した。マルクスの死後、エンゲルスはいっさいの仕事をなげうって、十数年間マルクスの遺稿である『資本論』第 2、第 3 巻を整理、執筆して出版し、親友の「もっとも偉大な記念碑」(レーニン)を建てた。エンゲルスはマルクスとの多くの共同著述を通じて実に価値の大きい思想・理論を世に問うたにもかかわらず、かれは謙虚にも、「歴史科学に変革をもたらした発見は、周知のように、基本的にはマルクスの業績であり、わたしがなしえたのはごく少部分にすぎない」「マルクスの生存中わたしは第 2 バイオリンをつとめた」と言った。これについてレーニンは、「二人の関係は人間的友情についてのもっとも感動的な、どの昔語りよりもいっそうりっぱなもの」であったと指摘している。思想と志を同じくする人びとのあいだに交わされるこのような愛情がほかならぬ同志愛である。

われわれはこの世界でもっとも美しい同志愛の精華を金日成主席の高貴な生涯に見出すことができる。同志愛についてのかずかずの逸話のなかでも、主席の金策（キムチェク）にたいする愛情は実にはかり知れないほど高い境地の、もっとも崇高なものであった。

主席には生前とても大事にしていた金庫があったが、主席の逝去後それを開けてみると、なかには金策と並んで撮った 1 枚の写真が入っているだけだったという。金策は抗日革命闘争時代から主席とともにたたかい、解放直後の多難な時期にも主席を補佐した革命の戦友であった。主席はかれをどれほど深く愛

していたからと、すでに世を去って久しい金策と一緒に撮った1 枚の写真を、半世紀もの間金庫の中にしまっておいていたのであろうか。主席の金庫には大金や金塊が保管されていたのではなく、同志愛が大事にしまっておかれていた。これが主席の同志にたいする愛情である。

同志愛は私欲やエゴを超越した偉大な愛情である。同志愛にエゴが含まれ、わずかな曇りでもあるとすれば、それはすでに同志愛ではない。

アダム・スミスは、「わたしに必要なものを与えよ。そうすればきみもわたしから必要なものを受け取るであろう」と言ったが、これは個人主義に根ざしたブルジョア的な人間関係がどれほど低劣醜悪なものであるかを示唆する端的な例である。

同志愛はもっとも美しく清いものとなるべきであり、そのうえに立った人間関係こそ真実なものであるとするのが将軍の見解である。

将軍は、同志愛がもっとも美しい真実な人間的愛情であるという見解を踏まえて、すべての人間関係すなわち上下関係、家族関係、男女関係も同志愛に根ざして結ばれるべきだとする思想をもって、それを実現するためにあらゆる労苦を尽くしている。

将軍は、上下関係で同志愛と革命的信義が具現されなければならないと指摘している。真の人間関係の見地からすれば、上部と下部のあいだの関係は決して、支配し支配される関係になってはならない。社会主義社会における上下関係は支配と被支配の関係ではなく、同じ目的を遂行する同志たちのあいだの関係である。自主性をめざし、運命を開拓する闘争過程で互いに

任務の分担を異にしているだけであって、そこに垂直的な物理的力が作用する関係が許されるべきではない。したがって下役は上役をより重要な任務を遂行する貴重な同志として尊敬し、補佐すべきであり、上役はより高度の責任感を持って下役を重んじ、導くべきである。各人は社会的責務の遂行過程で自主的で平等な関係を結んでいる。同一の目的を実現するために、同一の権利と資格を持ってたたかう人たちのあいだには、高位と低位の関係、差別関係などありえない。社会の発展過程は、本来権力の作用がしだいに縮小し、道徳の作用が不断に拡大する過程である。このことからして、上下関係が同志愛の関係となるべき必然的要請が生まれるのである。

上下関係が同志的なものでないと、真の人間関係はなりたたない。実存主義者オルテガ・イ・ガセットは、社会はつねにエリートと大衆という2本の枝の道徳的統一体をなしているとし、「社会が命令を下す者と服従する者に分かたれるのは必然的」であると言った。ニーチェも人間は幼いときから「力」を求め、人を支配しようとする本能的要求を持つ存在であるとし、「より強いものになろうとする意欲が唯一の実在性」であり、「人間は権力の獲得に努める存在」であるとして、支配と服従の関係を正当化しようとした。このような論議は搾取社会に存在する支配と服従の関係を合理化するための詭弁にすぎない。周知のように、資本主義社会で支配階級は、そのかぎりない権力と支配の行為を合理化するために、このような歪曲された非科学的な論理を利用しているのである。

金正日将軍はつねに、自らを平凡な人間とみなして、下部の活動家をわけへだてなく対し、国事を相談している。

将軍はある日、活動家たちとの談話の席上、人間は権力にへつらってはいけないとし、「わたしがいつも言っていることですが、みなさんがわたしを組織担当書記だからといってわたしに従うなら、それは正しくありません。人間金正日に従うべきであって、地位を見て従ってはなりません。官職を見て人に従うのは、既に権力に迎合しているのです」と意味深い話をし、権力にへつらう人間は、相手が地位を占めているときはへつらうが、地位を失えばふりむきもしないと言った。

このような将軍の思想には、同志愛にもとづいて上下関係が結ばれるべきであるという貴重な教えがこもっている。

職位ではなく、人間金正日に従うべきだという将軍の謙虚な言葉を通して、将軍の謙虚と人民的徳性のはかりしれない高さ、けだかさを知ることができるであろう。将軍はこうした思想と意志をもって北朝鮮で人民大衆中心の政治をおこない、党と国家を導いているのである。

家族関係も同志愛にもとづく関係となるべきである。家族関係はそれが血縁関係から成り立っているという点で他の社会的関係と異なる特性を持つが、それも社会的関係であるだけに、家族のあいだには当該社会に共通する道徳的原理が作用する。しかし、もっとも重要なことは、家庭生活における夫婦、親子、兄弟姉妹のあいだの肉親的な愛情は大事にすべきであるが、それも真の同志愛となるようにすべきだということである。

自分を生み育てた父母を愛し、尊敬するのは、人間の基本的な道義である。もっとも近い肉親である父母や妻子も愛せない人間は、祖国と民族、人民を愛することができない。だからといって、家族間の肉親的愛情を絶対視してはならない。肉親的

生命よりも社会的・政治的生命のほうがより貴重であり、血縁関係よりも同志的関係のほうがもっと貴重であるのだから、家族間の肉親的愛情は必ず同志愛に高められるべきである。真の人間は家族を深く愛しながらも、家族たちがこぞって国と民族、人民のためのたたかいに忠実であるよう、同志的に極力援助すべきである。

人間的関係の道徳が破壊され、家族のあいだにも個人主義と生存競争の原理が作用する資本主義社会でやむことなく発生している惨事は、家族間の関係が真の同志愛によって結ばれるべきだとする思想の意味の深さを痛感させるものである。

男女間の関係で道徳を守るのは、家庭生活、社会生活を健全に営むうえで重要な意義がある。

金正日将軍は男女関係は真の愛情にもとづいて成り立つべきであり、お互いに人格を尊重し、信頼し、心から助けあう同志的関係になるべきだと指摘している。男女関係をセックスの問題とのみみなして、それを美しく高尚な思想と意志にもとづくものに変えないならば、それは真の人間的な関係になれず、強固なものにもなれない。

男女関係が真実なものとなるためには、同志愛にもとづくものとならなければならない。国と民族のために、祖国のために思想と意志を同じくし、心から助けあい、大事にしあう心が一つにとけあってこそ、男女関係は真に美しい愛情関係となり、いつまでも変わらぬ強固な関係となる。

男女関係が真に人間的なものとならなければ、社会は腐敗を免れなくなる。

今日、米国では幼児の 40%が結婚前妊娠によって生まれてい

る。未婚女性 4 人のうち 1 人が母親だということからも、米国の男女間の道徳的危機がどんなに深刻な状況にあるかがおしはかれるのである。米国のブレディンスキー博士は、21 世紀における米国の危機は、「道徳的危機であり、これは具体的には家族解体現象」として現れるであろうとしている。

金正日将軍は、男女関係が真に美しい人間的関係になるためには、お互いに相手を同志として重んじ愛する関係とならなければならないという思想を示して、人びとを導いており、その結果、今日、北朝鮮で男女関係はもっとも美しく真実なものとなっている。

南朝鮮の社会であれば、身体障害者としてさげすまれ、軽蔑の対象となる戦傷栄誉軍人が、若い美しい女性を人生の伴侶に迎えて幸せな愛の巣を営み、国を支える礎石の一つとなっている北朝鮮の現実は、真実な愛情とはかけはなれた生活をしている南朝鮮の人びとに多くのことを考えさせている。みだらな性行為、強姦など非道徳的行為の盛行、離婚率の急激な上昇、妻が夫を、夫が妻を殴打し、殺害までする惨事が日常茶飯事となっている南朝鮮は、それこそ真の愛情の失踪地帯、不毛の地である。

金正日将軍は、全国に真の同志愛の花園をきずき、それをいつまでも朽ちないようにするために、たえず太陽の愛情を注ぎ、配慮をめぐらしている。北朝鮮の民衆は将軍を太陽のように慕い、もろ人が太陽の家族となって、同志愛をさらに美しく花咲かせている。太陽の愛は永遠であり、北朝鮮の人間愛の花園はとこしえに咲きつづけるであろう。

Ⅶ　自衛の軍事原理

金正日(キムジョンイル)将軍は強い。なぜなら将軍には百戦百勝の軍事哲学があり、その思想で武装し、鍛えられた無敵の大軍があるからである。

1890 年、帝政ロシアの財政省が発行したパンフレットには、つぎのような 1 節がある。「朝鮮軍の特徴は、すぐれた指揮官のもとでは恐ろしい力を発揮することである」 1950 年 6 月に起きた朝鮮戦争を取材したオーストラリアの記者パーチェットは「朝鮮人民軍が強大な敵と戦って勝利をおさめたのは、第 1 に、偉大な指導者がいたからである」と書いている。

確かにそのとおりである。

歴史的に朝鮮は外敵の侵略をしばしば受け、はかリ知れない惨禍をこうむった。その主因の一つは、侵略軍との戦いを指揮する傑出した民族的名将がいなかったからである。そのような民族が、希世の統帥者金日成(キムイルソン)主席を民族の救世主にいただくことによって、日本帝国主義の植民地支配をくつがえし、つづく朝鮮戦争では帝国主義列強の侵略を撃破して国と民族の自主権を守り抜いたのである。

今日、朝鮮人民軍が無敵の強軍に育って同胞の運命を擁護できるようになったのも天下の名将金正日将軍を最高司令官にいただいているからである。将軍はすぐれた指導で人民軍の戦闘力を最上の水準に高め、霊妙な軍事戦略で敵の攻撃を撃破する

万端の戦闘態勢をととのえている。

では、金正日将軍の百戦百勝の軍事哲学とはどのようなものであろうか。それは、民衆の自主性を守り、民衆の創意に依拠する人間中心の軍事哲学であり、最高の戦闘力を引き出す自衛の哲学である。

1　戦争で決定的役割を果たすのは人間

世界がデタントの時代に入ったとはいえ、地球上にはいまだに戦雲が低くたれこめ、世界各地で軍事紛争が頻発している。このような事情は、帝国主義侵略勢力がいるかぎり、すべての国が自国防衛の準備を決しておろそかにすべきでないことを示している。

自国防衛の戦いで勝利する秘訣はなんであろうか。これは軍事戦略家の誰もがいだく最大の関心事である。

ところで、米国の軍事原理と戦略はなにかというと、それは一言でいって、力の優位論である。米国は第2次世界大戦時に「空中優位論」を標榜して26万2,000機もの軍用機を生産し、それを踏まえて世界制覇戦略を追求した。その米国が現在は「核兵器万能論」にしがみついている。「制空権の掌握」と「多武力による打撃」は依然として米国の軍事原理となっている。広島と長崎に原爆を投下した第2次大戦、そして空軍とミサイル攻撃による湾岸戦争の勝利は、米国が「兵器万能論」を絶対視する根拠の一つである。米国の「核戦力優位論」者たちは「軍事力とは原爆と核ミサイル」であると公言している。

「兵器万能論」は帝国主義諸国における普遍の軍事原理である。

英国は 16 世紀にスペインの「無敵艦隊」を破り、19 世紀初にはフランスのナポレオン艦隊を撃破してヨーロッパの制海権を掌握した。このころから英国の軍事戦略家たちのあいだでは、優秀な艦隊をもって海上を支配すれば世界を制覇できるという観念が芽生え、やがて「艦船優位論」を高唱するにいたった。第 2 次大戦前夜まで英国と日本は艦船の建造に総力を傾け、当時世界の航空母艦総数 19 隻のうち、英国と日本のそれが 13 隻に達した。

ナチス・ドイツの軍事戦絡は、戦車兵力が優勢であれば世界を支配できるというものであった。ヒトラーは「戦車優位論」を唱え、重戦車を大量生産して戦車戦による戦勝をもくろんだ。ドイツは戦車兵力によってポーランドを 15 日で、フランスを 1 か月で占領した。これに各国は大きなショックを受け、第 2 次大戦を通じてソ連は 10 万台、英国は 1 万 5,000 台の戦車と装甲車を生産した。こうして戦場は数十万台の戦車の対決場となり、独ソ戦でドイツの戦車軍団はソ連軍によって壊滅した。

イタリアのジュリオ・ドウエ将軍は空中戦の重要性を唱えた。かれは、戦争で決定的優位を占める国は制空権を握る国だとして、人間が空中という 3 次元の世界に突入したことによって、戦争の勝敗とその方法に変化が生じるだろうと主張した。このように帝国主義者の軍事教理は、「艦船優位論」「戦車優位論」「航空機優位論」など兵器優位論で一貫しているといってよい。

クラウゼヴィッツは「軍隊の精神的能力は兵器の発達に左右され」「勝利の最後の決戦は新兵器によってなされ」「新しい軍事技術が新しい軍事イデオロギーを生む」という説を唱えたが、これは帝国主義軍隊の軍事教理と戦術の特徴を的確に表現したもの

だといえる。
　レーニンは帝国主義戦争の非道徳性と反動性をつき、「泥棒同士の喧嘩だから、双方がともに滅びるようにせよ」と言ったが、帝国主義との戦争を経験していなかったので、それを敗亡させる軍事原理を提示するまでにはいたらなかった。
　では、金正日将軍の軍事原理はなにか。それは一言でいって、チュチェの軍事原理である。チュチェの軍事原理とは、革命戦争で決定的役割を果たすのは兵器ではなく、人間、軍人大衆だということである。マルクス・レーニン主義の創始者たちは戦争勝利の要因を恒久的要因と一時的要因とに大別し、恒久的要因が決定的な要因であるとみなした。かれらは、戦争勝利の内的および外的要因についての問題を提起することができなかったので、戦争勝利の内的要因が決定的であることを明らかにすることもできなかった。スターリンは、戦争の勝利で決定的な意義を持つのは師団の質であるという見解を示しているが、師団の質を高める本質的かつ根本的な問題については言及していない。
　金正日将軍は人間中心の軍事原理を示し、戦争勝利の決定的要因にかんする問題を明らかにした。
　では、将軍が明らかにした戦争勝利の決定的要因はなにか。それは一言でいって、主体的要因である。この主体的要因には二つの内容がある。その一つは、戦争参加国の内的要因つまり内部の力であり、いま一つは、戦争は人的要因と物的要因の作用を受けるが、そこでも人的要因すなわち人間、軍人大衆が決定的だということである。
　戦争勝利の決定的要因は外的要因ではなく、内的要因つまり

国の内部の力である。

金正日将軍は、戦争勝利の決定的な要因は戦争遂行国の内部の力であり、外部の支援はあくまでも補助的役割を果たすにすぎない、外部の支援をもってしては現代戦が求める膨大な軍事的要因を円滑にみたすことができない、外部の支援だけで戦争に勝利した例はない、と指摘している。

内的要因、内部の力が戦争勝利の決定的要因になるのは、戦争遂行の主体、担い手がほかならぬその国であるからである。外敵の侵略に抗する戦いは誰かに強要されておこなわれるのではなく、国の自主権と尊厳を守ろうとする主体、その国自らの死活的要求と利害関係にかかわるものであり、また外敵の侵略を撃退する力もその国の内部にある。自己防衛は人間の本性であるが、同様に自主権と尊厳を守ろうとするのは国と民族に特有な本性である。したがって各国、各民族は自主権を守るために外敵の侵略に抗して正義の戦争をおこなうのである。

国と民族の自主権を守るための戦いは、国と民族の構成員の主人らしい強い責任感と意志の現れであり、それが主動的な軍事行動を引き起こすのである。戦争に参加する主体の主動的かつ積極的な闘争なくしては革命戦争における勝利は期待できない。これは周知の事実である。どこかの外部勢力が国と民族の自主権を代わって守ってくれると考えるのは愚かなことである。それぞれの国と民族には自主権を守るにたる革命的能力と力がそなわっている。自国の防衛に責任感を持つのは、ほかならぬその国の民衆であり、国の防衛力もその民衆にある。

もちろん、各国は世界の構成員であることから、ある一国が不当な侵略を受けた場合、周辺諸国が政治的にも物質的にも支

援し、連帯を表明するではあろうが、だからといって国の防衛に必要なすべてのものがそこから生ずるのではない。外部の支援はあくまでも補助的なものにすぎない。

実際、外部の支援だけで現代戦に必要な膨大な軍事的需要を円滑にみたすことはできない。それに、主体の力が強力であってはじめて、外部の支援もいっそう効果をあげるのである。

以上のことは、革命戦争勝利の決定的要因が主体的要因すなわち内的要因であるということを語っている。国の運命をその国が主体となって開拓していくように、戦争の運命もその国内部の力、主体的要因に依拠して開いていくべきであり、またそうしてこそ戦争で勝利するというのは、一つの法則である。

金正日将軍は革命戦争勝利の決定的要因が内的要因にあるというチュチェの軍事原理にもとづいて、自衛の軍事路線を貫いている。今日、北朝鮮がいかなる強敵をも撃破しうる強国になりえたのはそのためである。

将軍が明らかにしたチュチェの軍事原理はまた、戦争で決定的役割を果たすのは人的要因すなわち人間だということである。

将軍は、戦争勝利の要因には人的要因と物的要因がある、この要因のなかで戦争勝利に決定的役割を果たすのは人的要因すなわち、人間である、武器を作るのも人間であり、武器を扱うのも人間である、と指摘している。

戦争には人的要因と物的要因がともに作用する。物的要因とは戦闘技術機材をはじめ物質的軍事手段や戦闘に利用されるすべての物質的・経済的手段である。戦争には軍事的手段とともに物質的・経済的手段が立体的に利用される。

しかし、戦争で決定的役割を果たすのは物的要因ではなく、

人的要因すなわち人間である。それは武器や戦闘技術機材などの物質的手段を作るのは人間であり、それらを利用するのも人間だからである。

現代戦でつねに主動的かつ決定的な役割を果たすのは、その戦争に死活的な利害関係があり、それを遂行する人間、軍人大衆である。戦争の法則を誰よりも科学的に認識し、利用するのも人間であり、戦争に必要な物的資源を十分にととのえ、それを効果的に動員、利用するのも人間である。

軍人大衆は武力の基本的な要素であり、戦争の主体である。軍人大衆をどのように準備させるかによって、軍隊の戦闘力ひいては戦争の勝敗が左右される。戦争は過去も現在も人間がおこなうものである以上、戦争参加者たちに勝利の確信がなく、闘志を失くし、頭を使うようなことをしなくなれば、いくらすぐれた現代兵器を持っていても、それは無用の長物にすぎないのである。

人間が戦争で決定的役割を果たすというのは、具体的に、人間の思想意識が決定的役割を果たすということである。戦争参加者がどのような思想的覚悟と自覚を持つか、軍人の政治的自覚と意志がどの程度であるかによって戦争の勝敗は左右される。こうした意味で、政治的・思想的要因は戦争勝利の他の要因を規定する基礎であり、すべての要因のなかで第 1 位を占めるのである。

しかし、歴史に名を残した名将や軍事家は例外なく、軍人を頭数で計算される人的材料とみなしたにすぎなかった。今日、世界のほとんどすべての軍事家は、軍人を武器の付属物、従属物とみなしている。

現在、世界の軍事界で支配的な訓練観は兵器中心論に立脚している。世界の大多数の軍事家は、人間を兵器の従属物とみなし、どうすれば軍人を武装装備と戦闘技術機材に効果的に利用できるか、ということに関心をそそいでいる。

しかし、金正日将軍は、軍人大衆を革命武力の主人、革命戦争の直接の担当者と見て、軍人中心の訓練観を確立した。軍人は武力の基本的な要素であり、革命戦争の主体である、そのために軍人をよりよく準備させ、かれらが現代兵器や戦闘技術機材の扱い手、コントローラーとしての責任と役割を全うすることに戦闘訓練の基本をおくべきだとするのが将軍の見解である。軍人大衆の政治的・思想的覚悟と創意が高まれば、いかに高性能の現代的戦闘技術機材も巧みにこなせるのである。したがって、軍人大衆の政治的・思想的準備は革命的武力の強化発展に決定的な作用を及ぼすことになる。

政治的・思想的に準備できた軍隊は、技術的に優れた兵器をもってしても、自己の偉業の正しさを確信し、自覚的、目的意識的に戦いにのぞむため、精神的および物質的力を最大限に発揮できるのである。

金正日将軍は、政治的・思想的要因すなわち人間が戦争で決定的役割を果たすという軍事原理を踏まえて、朝鮮人民軍を不敗の隊伍にきずきあげた。人民軍の領袖決死護衛精神と熱烈な祖国愛、献身的な犠牲精神は、世界のいかなる強敵をも一撃のもとに撃滅しうる威力の源泉である。

軍人大衆を戦争勝利の決定的要因とみなし、兵器万能主義ではなく、政治・思想第一主義にもとづき人民軍の威力を高めていくところに、金正日将軍の軍事哲学の核心があり、一当百を

誇る人民軍の威力の根源があるのである。

2　侵略戦争には解放戦争で

北朝鮮は 2 度にわたる戦争、「無敵皇軍」を誇る日本帝国主義 100 万大軍との抗日戦争と、米国をはじめとする 16 か連合国との朝鮮戦争をおこなった。

2 度にわたる帝国主義との戦争で勝利したのは、老練な大軍事戦略家金日成主席のすぐれた指導のたまものである。不正義の帝国主義侵略戦争には断固としてこたえ、それに決定的な打撃を加えるべきである、というのが、金日成主席の革命的戦争観である。この革命的戦争観は、今日、北朝鮮でかたく守られている。

ローズヴェルトは、朝鮮人は自国の防御に無能、無力な民族だと冒瀆した。その後の 1945 年 9 月 6 日、米軍先発隊が金浦（キムポ）飛行場に降り立ち、米第 24 軍司令官ホッジの指揮する 2 個師団兵力 4 万 5,000 名が仁川（インチョン）に上陸し、9 日、ソウルに入りこんだ。このときから米軍の朝鮮半島占領がはじまった。

そして、その後半世紀がすぎた今日までに、3 年間の戦争をはさんで、ここでは緊張した軍事的対時状態がつづいているのである。

その間、北朝鮮はずっと単独で、軍事大国米国とにらみあっている。ところで、その気にさえなればどんな国でも征服するという米国が、どうして北朝鮮攻撃の決心をつけないでいるのだろうか。それは、北朝鮮の強力な軍事力と世界に名声の高い指導者たちの特出した軍事戦略に怖れをいだいているからである。北朝鮮

には帝国主義との 2 度の戦争で勝利したすぐれた軍事伝統と経験があり、世界が驚嘆してやまない軍事の英才金正日最高司令官がいる。それゆえに北朝鮮は自衛に満々たる自信を持ち、必勝の気象にあふれている。

北朝鮮が米国を旗がしらとする帝国主義列強の威嚇にも勇敢に立ち向かっているのは、金正日将軍の革命的戦争観があるからである。

将軍の革命的戦争観とは､侵略者には容赦のない懲罰を加え、報復するというものである。

正義にもとる非人道的な暴力には容赦なき報復と懲罰を加え、侵略戦争にたいしてはその根元を一掃するというのが将軍の鉄の信念であり、軍事的意志である。

金正日将軍はこれについてつぎのように述べている。

「民族の独立と平和を守り、革命偉業の勝利を達成するもっとも正しい道は、帝国主義者の侵略戦争に解放戦争で対抗し、反動派の反革命的暴力に革命的暴力で対抗し、帝国主義者の侵略と戦争策動につねに万全の備えをもって対処することであります」(同上 48 ページ)

将軍は侵略戦争、反革命的暴力の首謀は帝国主義だとし、帝国主義が残っているかぎり正義の戦争を準備すべきであり、戦争を望みはしないが、怖れることはない、帝国主義者に平和を哀願するようなこともしないという立場をかたく守っている。

北朝鮮が国際帝国主義烈強のたえざる侵略策動と封鎖のなかでも、民族の尊厳と国の自主権を守り、自らが選んだ社会主義の道を力強く前進しているのは、将軍のこのような革命的戦争観とたぐいない胆力があるからこそである。

北朝鮮は1950年代に1,120余日間の戦争で勝利したあとも、今日までの43年間、強大な帝国主義武力と事実上戦争をつづけている。北朝鮮側の公表資料によれば、1985年から1995年の10年間だけでも、南朝鮮側の挑発件数が43万5,000件にのぼっている。これは1時間当たり5回の軍事挑発があったことを意味している。ところで、北朝鮮はこの砲声なき戦争でつねに勝利している。

1993年、「核脅威」論が台頭し、朝鮮半島での軍事的対峙状態が極度に緊張していたとき、金正日将軍は最高司令官命令で準戦時状態を宣し、全国、全人民、全軍を帝国主義者の侵略戦争にたいする正義の戦争へと呼び起こした。あのとき、10日余りのあいだに北朝鮮では、現役の師団に加えてさらに150個師団を編制しうる数の青年が入隊を志願した。この一事をもってしても、世界は、侵略戦争に対処する金正日将軍のたぐいない胆力と用兵術に感嘆したものである。

カントは『恒久平和論』で、平和のためには「常備軍が廃絶されるべきである」と主張した。しかし、今日の現実は、武力の強化にこそ平和があるという教訓を与えている。

人類史にはこれまで大小1万4,500余回の戦争があった。歴史的に戦争と平和の時間比は4対1である。だから人類史はある意味では戦争史だといえる。第2次大戦後半世紀のあいだに、世界には150余回の武力衝突と局地戦があった。千差万別に戦われた戦争の歴史をひもとくと、どの戦争にも通ずる一つの真理がある。それは戦争の勝敗が、戦争に参加する軍隊と国民を導く指導者に全的にかかっているということである。

戦争が歴史の同伴者となり、人類史に筆舌に尽くしがたい災

厄をもたらしている歴史的現実は、人類に戦争のない世界で暮らしたいという切実な念願をいだかせた。しかし、非人道的、非正義の勢力と要因が存在するかぎり、それに反対する正義の戦争は決してなくなるものではない。カール・シュミットのような「戦争の保存」を力説する人間は1、2にとどまらない。1530年、スペインのピサロが 186 名の兵士を引き連れて、アンデス山脈の高原地帯にあったインカ帝国を占領して皇帝を捕え、数多くの人たちを監禁、処刑したあげく、インカ帝国を滅亡させた。この一つの事実からも、祖国を守るためには軍事の強化をはかり、他方、戦いを勝利へと導く統帥者をいただかなければならないということが痛感させられるのである。徳川幕府末から明治維新初にかけて、日本軍国主義者たちは「征韓論」を唱えて朝鮮の征服を準備し、1875 年には「雲揚号事件」を引き起こした。これは朝鮮人の覚醒を呼び起こしたが、1905 年以来の植民地奴隷生活は、正義の抗日武装闘争を通じて終焉を告げた。日本軍国主義者の植民地的支配に抗する朝鮮民族のさまざまな形態の闘争は、不正義に抗する正義の戦争は必至であり、この戦争で勝利するためには正しい軍事哲学、戦争哲学を持ち、戦争を勝利へと導く傑出した名将をいただかなければならないという歴史の教訓を残した。

軍事がこのように重要であることから、労働者階級の解放闘争に生涯をささげたマルクスは、30 代から軍事問題に深く注目して軍事にかんする数十の論文を発表し、友人たちから「将軍」と呼ばれていた戦友エンゲルスを「わたしの国防相」と呼んだほどであった。

戦争で勝利するためには、軍の統帥者がいなければならず、

その統帥者には戦争にたいする高度の責任感と献身が要求されるのである。そうであってこそ、数万の兵士が必勝の信念と深い知略、戦術と力をもって敵と戦い、勝利をかちとれるのである。

愛国名将李舜臣（リ スンシン）将軍は露梁津（ロ リャンジン）で 500 余隻の敵船との抗戦中、致命傷を負ったが、かれはそのとき、「盾でわが身を隠せよ。敵にわしのしかばねを見せたくない」「戦いたけなわのいま、わしの死を兵士たちに告げてはならない」とかたく言った。愛国の真心をもって国を守った李舜臣将軍の最後の切々たる指示は、愛国名将の風格を示して余りあるが、同時に軍事指揮官の位置がいかに重要かつ責任的であるかを語る一つの史実だといえる。

ヘーゲルは戦争を道徳的なものとして描写し、「戦争の最高の意義」は「人民の道徳的真実性を持続させ」「平和の結果必然的に生ずる腐敗に人民の感情が感染しないよう予防」することにあると言った。

かれは戦争の階級的性格を無視し、戦争一般を道徳的なものと解釈することによって、プロシア侵略戦争を正当化した。

墨子は「罪のない国を侵略する戦争」と「神に従う戦争」を区別すべきだとした。例えば、湯王が夏の桀王を、周の武王が殷の紂王を討ったのは、「侵」ではなく「誅」であるとした。つまり、それは神に従う戦争であったがゆえに非難すべきではないというのである。神意と戦争の可否を結びつけた墨子の戦争観は、あまりにも幼稚だといえる。

レーニンは、帝国主義戦争の侵略性と略奪性を否定するブルジョア理論の誤った見解を批判し、「いっさいの戦争は、交戦国とその支配階級が戦争にいたる長い期間、ときには数十年間実

施してきた政治の、暴力的手段による継続にすぎない」(『レーニン全集』第 22 巻 220 ページ)とし、さらに「政治が戦争を生む」(同上第 12 巻 437 ページ)と指摘した。そして、帝国主義戦争を帝国主義の反動的政治と分離させる日和見主義者の誤った主張を批判し、戦争は特別な暴力手段による政治の継続であり、延長であるとした。レーニンはまた、戦争が暴力手段による政治の延長という立場から、戦争の本質を解明するためには戦争前の政治、戦争をもたらした政治を究明する必要があると見た。

そして、政治が帝国主義的であれば、そのような政治から生まれる戦争は帝国主義戦争であり、政治が民族解放的であれば、そこから生まれる戦争は民族解放戦争であると規定した。そして帝国主義列強間でおこなわれる戦争はどの側面から見ても侵略戦争であるため、この戦争についてマルクス主義者は、「泥棒同士の喧嘩だから、双方がともに滅びるようにせよ」(同上第 35 巻 29 ページ)という原則を守るべきだと指摘している。

レーニンの戦争観を一言で集約すれば、戦争の根源は帝国主義にあり、戦争は帝国主義の同伴者だということである。こうしてレーニンは、「軍備廃絶」の要求の反動性と弊害をつき、「プロレタリアートは、ブルジョアジーを武装解除したあとはじめてすべての兵器を破壊することができ、またプロレタリアートは必ずそうするであろう」と指摘した。これは戦争にたいするレーニンの原則的で断固とした立場を示したものだといえる。

金正日将軍は、戦争の根源が帝国主義にあるというマルクス主義的理解にとどまらず、国と民族の生命である自主性と自主独立国の機能の要請を踏まえて、戦争とその性格にたいする新

しい理解を定立した。

自主性が国と民族の生命であるために、戦争の性格はどちらがどちらの自主性を侵すかによって、そして戦争に参加する国の本質的属性がどのようなものであるかによって規定される。

金正日将軍は、戦争の性格はどちらが先に攻撃し、どちらが防御したかによって規定されるものでないとしている。将軍の見解によれば、ある階級や国家が他国、他民族の自主性の侵害、民族的抑圧と搾取を目的とし、あるいは勤労民衆の抑圧と弾圧を目的としておこなう戦争は不正義の戦争である。

反対に、民族的および階級的抑圧と搾取に反対し、国と民族の自主性、民衆の自主性を守るためにおこなう戦争は、どのような形態であれすべて正義の戦争である。

将軍は戦争の性格にたいするこのような理解にもとづいて、不正義の戦争に自衛的に対応するのは当然であるとし、帝国主義的戦争に対処するうえで守るべき革命的原則を明らかにした。

その原則はなによりも、帝国主義者に平和を哀願しないということである。

将軍は 1993 年に発表した最高司令官命令第 0034 号で、「民族の自主性と国の平和を重んじる朝鮮人民は、戦争は望まないが自国の尊厳をじゅうりんされてまでも平和を哀願するようなことはしない」とし、敵が共和国の一寸の土地、一茎の草も勝手に侵すことを許さないであろう、と宣告した。

戦争は望まないが平和を哀願するようなことはしないという思想は、人間の自主性にたいする深い哲学的理解にもとづいている。人間の生命としての自主性は、それ自体があらゆる束縛と支配に反対する。自主性は自由に生きようとする性質である

とともに、平和で幸せな生活を送ろうとする志向、意志をそれ自体のなかに含み持っている性質である。自由に生きようとする性質そのものが人びとのあいだの平和的で平等な関係を求め、暴力の行使を許さない。自由に生きようとする人びとのあいだには、戦争のようなものを必要としない。同様に自主性を重んじる国と民族にとっても、平和は本性的な要求である。戦争は自主性と両立しない。このことからどのような結論が引き出されるであろうか。戦争は望まないが国と民族の自主権を侵す侵略戦争には断固として対処しなければならないということである。また、平和がどんなに貴重であっても、国と民族の生命である自主権と尊厳に傷がつけられてまでも平和を哀願してはならないということである。

将軍はこうした原則的な立場から、つねに帝国主義的侵略戦争に断固対処している。平和は哀願したり、妥協したり、へつらうことによってではなく、たたかいを通して獲得しなければならず、銃剣の上に平和があるというのが将軍の軍事的信念であり、意志である。

将軍のこのような透徹した軍事的信念と意志は実に重要であり、貴いものである。

北朝鮮のように小さな国が、米国とその同盟国の圧力と軍事的攻勢にも微動だにせず、国の自主権と尊厳を守り、平和建設を中断せずにつづけているのは、全的に金正日将軍の断固とした革命的戦争観と、不正義を許さぬ鉄の意志と胆力によるものである。

将軍の戦争哲学は、また、報復には報復で、全面戦争には全面戦争でこたえるということである。

将軍は、国と民族の自主性を擁護する戦争は正義の戦争であるという透徹した戦争観にもとづいて、侵略的なすべての形態の不正義の戦争には真っ向から立ち向かっていくことを根本的な原則としている。

正義の戦争、国と民族の自主性を守る革命戦争においては断固たるべきであり、しりごみし躊躇すべきではないというのが将軍の信念であり、意志である。

「報復」には報復で、全面戦争には全面戦争でこたえるという戦争戦略は、戦争の正義の性格と強力な自衛的武力にもとづく革命的戦争戦略である。敵の「報復」と全面戦争に対処しうる十分な自衛的武力を持たずには、報復打撃、全面戦争の戦略を具現できるものではない。

この戦略は、その革命的性格からして、軍隊と民衆を正義の民族解放戦争へと政治的・思想的に、軍事技術的に、物質的にしっかり準備させる戦争戦略であり、敵の侵略企図を一撃のもとに粉砕し、決定的勝利をかちとる革命的な戦争戦略である。

ヒトラーは、「最善の防御は攻撃」であると言った。かれのこの主張は侵略的性格をおびた攻撃を「最善の防御」として合理化しようとする試みにすぎない。ヒトラーにとって「防御」も攻撃も正義のものとはなれなかった。かれは「最善の防御」が攻撃という美名のもとに、他国、他民族に攻撃を加えた。だからヒトラーの戦争哲学は結局敗北と滅亡につながったのである。

民族解放的性格をおびた戦争は強力な武力にもとづいて、「報復」には報復で、全面戦争には全面戦争でこたえるのが原則であり、またそうしてはじめて戦争で勝利できるのである。

金正日将軍はこうした戦争哲学でつねに勝利をおさめている。

1976年8月、「板門店（パンムンジョム）事件」のさい、米軍部首脳が「軍事的対応措置」をうんぬんして北朝鮮を威嚇した。そのとき、人民武力省の総合的な敵情資料報告を受けた将軍は、「敵が武力を集結しても恐れるほどのことはありません。襲ってくれば断固戦いましょう」と決然とした口調で言った。

「プエブロ」号事件のさいも米国は膨大な武力を北朝鮮周辺に集結させ、威嚇的言辞を弄したが、北朝僻は米国の挑戦に攻撃態勢をとって応じた。

1993年3月、ありもしない「核問題」で朝鮮半島に戦争の危機がかもしだされたときにも、金正日将軍は米国の挑発に準戦時状態の宣告をもってこたえ、さらには核拡散防止条約(NPT)からの脱退という爆弾宣言をもって世界反動派の顔色をなからしめた。朝鮮人民軍は敵の侵略に対処して万端の戦闘準備態勢をととのえた。そのとき将軍は、敵の侵略の脅威に満々たる自信をもってのぞみ、いったん敵が襲いかかってくれば、完膚なきまで撃滅する決心であった。

準戦時期間のきびしい日び、敵の動きを注視しながら部隊を指揮していた人民軍の指揮官たちは、ある日の早朝4時、最高司令部からコーヒーを贈られた。金正日将軍が敵情を鋭く注視するかたわら、作戦に余念のない人民軍指揮官たちにコーヒーを贈って激励したのである。百戦百勝の将軍の軍事戦略の偉大さと、余裕しゃくしゃくとした態度を物語るエピソードである。

簡単に言って、平和を重んじるがそれを哀願せず、闘争を通じて平和を守らなければならないということ、敵が祖国の一木一草であろうとも侵害することは許さず、侵害すれば決して容赦しないであろうということ、敵の「報復」には報復で、全面戦

争には全面戦争でこたえるということ、これが金正日将軍の革命的戦争観であり、戦争哲学である。

ペンタゴンの軍事戦略家も多分これを十分に承知しているものと思う。

3　自衛の準備を

地政学的軍事理論によれば、海上勢力(島および海岸)と陸上勢力(大陸)間には戦争が不断に起こるものだという。しかし必ずしもそうなるとはいえない。地政学的軍事理論からすれば、朝鮮半島は海上勢力に属するであろうが、朝鮮が陸上勢力に向かって戦争をしかけた例はない。逆に朝鮮半島は大陸から、そして島国からたえず侵略を受けてきたのである。

日本帝国主義からの8・15解放の喜びも束の間で、米国は朝鮮半島の南半部を不法占領し、それ以来半世紀以上ものあいだそこに居座っているばかりか、核兵器をはじめ膨大な殺戮兵器を南朝鮮の全地域に配置し、北朝鮮を威嚇している。こうした状況のもとでも、北朝鮮は米国とその追随勢力と対峙して自主権を堂々と行使し、社会主義を堅持している。北朝鮮の強さは、強力な軍事力と人民軍そして全人民大衆の高度の軍事重視精神に根ざしている。軍事を重んじる全人民の精神状態、侵略の脅威に対処して万端の戦闘態勢をととのえている、任務に忠実な人民武力、こうした強大な防衛力の基底にある指導哲学はなにか。それはほかならぬ自衛の軍事哲学である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「国防において自衛を実現するのは、自主独立国家建設の根本

原則であります」(『チュチェ思想の継承発展について』日本語版 47 ページ)

国防における自衛は、金正日将軍の軍事哲学である。国防における自衛とは一言でいって、国の防衛を主体である自国が責任をもって自力でおこなっていくということである。つまり、国防において自衛の原則を堅持するというのは、自力で自国を守るということである。

国の自主権を自らの責任で自力で守っていくのは自主独立国存立の必須の要請である。自己防衛は人間の本性であり、同様に国と民族が自らを防衛するのも本性的な要請である。

人間が自己の運命を自力で開拓していかなければならないのと同様に、国と民族も自己の運命を自らの責任で開拓し、国防も自力でおこなわなければならない。自国を守るにたる自衛武力の欠如した国は、完全な自主独立国だといえない。ここから国防における自衛は自主独立国建設の根本的原則であるという結論が導き出される。

国防の基本はあくまでも自力であり、そうした力が備わっていてこそ外部の支援も効果を発揮するものである。したがって国の防衛ではなによりも自国民衆の力と自らの防衛力に依拠すべきである。

北朝鮮は自衛の哲学を徹底的に具現し、その結果、軍事を重視し、優先視する軍事強国となった。

もし北朝鮮が強力な自衛的国防力を備えていなかったとしたら、米国や日本など帝国主義列強の北朝鮮攻撃は強行されていたであろうというのが世界の判断である。

ニクソン・ドクトリンは、「平和は力を必要とする。われわれ

の基本的利益と、わが盟邦の基本的利益を武力で脅かす者がいるかぎり、われわれは強力な力を備えなければならない。もし米国が弱ければ、潜在的な侵略者は危険な見込み違いへの誘惑を受けるであろう」として、力の政策を公然と宣言した。

米国は国内経済事情の悪化と新たなデタントを迎えた世界経済という内外条件の変化にもかかわらず、従前の軍備拡大路線にしがみついている。巨大にふくれあがった軍産複合体からの反発が軍備拡大路線の廃棄を妨げているのだ。

軍備の拡大による経済的利益を追い求めてきた軍産複合体内の保守強硬右派の軍部および官僚、独占資本家勢力は、軍縮による経済的利益の縮小ないし消失に強く反対している。それに軍事力を背景に政治的・軍事的影響力を行使してきた米国の世界支配力が軍縮によって弱化する恐れがあるため、米国が絶対に軍事力の使用を放棄しないであろうことは明らかである。

米国の高等学校の教科書は現在も、1871 年の「辛未洋擾(5 隻の米艦隊が江華湾(カンホワ)に侵入し、撃退された事件)」を米国の「朝鮮探険」として美化し、朝鮮の占領を正当なものと主張している。日本も再侵の機会を狙っている。20 世紀初の日本の情熱の詩人石川啄木は、軍事侵略と強権に反対してつぎのようにうたった。

地図の上
朝鮮国にくろぐろと
墨をぬりつつ秋風を聴く

軍国日本の後裔は「大東亜共栄圏」という昔日の夢を捨てずにいる。

日本は、1996 年会計年度も軍事費を 2.58%増やし、莫大なカネを戦争の準備につぎこんでいる。

以上の事実は、金正日将軍の自衛の軍事哲学が、軍事的覇権が幅を利かしている現世界において、自力で国の自主権と尊厳を守ることを可能にするもっとも革命的な軍事哲学であることを語っている。

将軍の自衛的軍事思想で特別に注目すべきことは、国の自衛を実現するための課題と方途が示されていることである。将軍は、国の自衛を実現するためには、第 1 に自衛的な武力を建設し、第 2 に全人民的・全国家的防衛体制を確立し、第 3 に人民武力の政治的・思想的優位性を高く発揮し、第 4 に自らの国防工業を建設し、第 5 に後方を強化すべきであると指摘している。

自衛的武力の建設、全人民的・全国家的防衛体制の確立、人民武力の政治的・思想的優位性の発揮、自らの国防工業の建設、後方の強化という 5 大課題は、国の自衛路線を貫く基本的な方途である。この 5 大課題が統一的な過程として有機的につながりあって強力なものとなるとき、国家は国防を自力でおこなえるのである。

金正日将軍はこの 5 大課題を踏まえて勤労人民の優秀な息子、娘たちで自衛的武力を固め、全軍幹部化、全軍現代化、全民武装化、全国要塞化をおし進めて、全人民的・全国家的防衛体制を構築した。

さらに、全軍を政治的、思想的に固め、その政治的・思想的水準を不断に高めることによって、人民武力の政治的・思想的優位性を最上の水準へと引きあげ、民族国防工業をたぐいなく強化、発展させた。

とくに将軍による強力な自衛的国防工業路線の提示と正しい指導によって、今日、北朝鮮は現代戦に要するすべての優秀な最先端兵器、通常兵器を自力で生産する強力な自衛的国防工業を持つにいたった。

今日、世界の紛争地域で使われている武装装備の 90%は米国から提供されている。米国の膨大な軍事産業は世界制覇をめざしているのである。

米国とロシアはいまも世界の核兵器の 97%を統制している。世界にはまだ 4 万 5,100 個の核弾頭があるが、それらは世界の人口一人当たりおよそ 1.7 トンの火薬に相当するものである。

こうしたことは、個々の国が自国を守るためには自らの国防工業を建設しなければならないという思想と、それにもとづいて強力な自衛的国防工業を建設し発展させた金正日将軍の天才的英知と指導がいかに正しいものであるかをはっきりと実証している。

将軍は強力な自衛力をきずきあげていかなる侵略軍をも一撃のもとに撃破する軍事的裏付けをととのえた。

将軍は人民軍を強化しその戦闘力を高めるために、主体性、政治・思想性、戦闘性、科学性を軍事訓練の 4 大原則とし、「一当百」のスローガンを高くかかげ、人民軍の戦闘力の到達すべき目標を明らかにした。

将軍は国防における自衛の路線を示し、それが現代戦における勝利を裏付けるようたえず高い水準へと引きあげる独創的な方針をうちだしてその実現をエネルギッシュに指導している。

現代戦の進行状況を鋭く見抜いた将軍は、現代戦の特徴を明快に定義し、戦争に勝利するためのユニークな軍事戦法をうち

だした。

現代戦にたいする理解と戦闘力の準備でとくに意義があるのは、電子戦の準備に万全を期すべきだとする将軍の思想である。

先の湾岸戦争の経験を通して、世界の軍事戦略家は現代戦の基本的な機動打撃手段は航空機だとし、また現代戦では決定的にミサイル迎撃システムを強化し、さらに迅速な兵力の展開が求められるなどの見解を示しているが、金正日将軍は、電子戦をりっぱにおこなうのが現代戦を勝利に導くカギであるという、独創的な戦法を示したのである。

湾岸戦争では、交戦双方の動員兵力が200万近くにのぼった。師団80、旅団82、独立連隊4、独立大隊25が集結し、1万5,000台の戦車、3,000余機の戦闘機、ほぼ200隻の戦闘艦船、1万2,500余門の砲が動員された。ところで、世界はこの戦争が長期戦になるだろうと予想したが、金正日将軍はそれが短期戦で終わり、決して拡大しないであろうと断言した。結局戦争は将軍の予言通り43日目に終わった。、

湾岸戦争のさい、米軍は開戦4〜6時間前にイラク前線全域にわたって、1,300 キロメートル先まで影響を及ぼす強力な電子障害を造成し、イラク軍の指揮体系を麻痺させた。これは、米軍以下多国籍兵力がイラク軍を決定的に制圧する重要な要因となった。

このことは、将軍の電子戦の準備にかんする思想の正しさを確証している。朝鮮人民軍の電子戦能力が現代戦を成功裏に遂行する非常に高い水準に達していることは疑いをいれない事実である。

近年、北朝鮮の閲兵式で公開された現代的軍事技術手段を見

ても、人民軍の現代的武装装備がきわめて高い水準にあることがわかる。

強力な自衛手段を持つ北朝鮮が、虚勢をはる米国の極右戦争狂たちにきびしい警告を与えているのは、決して口先だけのことではないであろう。

Ⅷ　自主の外交原理

1994 年 6 月、平壌（ピョンヤン）を訪問した元米大統領カーターは、帰国後記者たちに「北朝鮮は自主という政治哲学を持つたいへん独特な国だ」「このような北朝鮮に制裁を加えるのはきわめて逆生産的」だと語った。

北朝鮮はいかなる圧力や兆戦にも屈せず国家的自主権と民族的尊厳を守ることを最高の原則とする国である。

社会主義諸国の崩壊以来帝国主義列強の支配論理がいつにもまして強まっている状況にあっても、北朝鮮は挫折も動揺もせずに自ら選んだ人民大衆中心の社会主義の道にそって力強く前進している。

これは、あくまでも金正日（キムジョンイル）将軍のユニークな外交哲学があるからこそである。

では、金正日将軍の外交哲学とはどのようなものか。それは一言でいって自主の外交である。

1　自主性を守れ

現在、世界には 170 余の独立国が存在する。これらの国は、国の大小や発展程度にかかわりなく、独自の主体として世界各国と並存している。しかし、今日の世界は平穏でなく、国家間にも自由平等の関係は成立していない。

自然の世界に見られるような、弱肉強食の法則が弱小国や発展途上国を苦しめており、世界を不安に陥れている。世界の秩序は依然として強大国によって左右されており、社会主義諸国の崩壊後米国をはじめ帝国主義列強の力の外交、強権外交はいっそう暴威をふるっている。このような状況のもとで、各国が自らの正しい外交戦略を構築するのは、重大な課題であらざるをえない。

元来、外交は一国の国内的環境と国際的環境間の相互作用によって成り立ち、その具体的な内容、方法は国家政策の選択として表現される。ところが今日、平等な性格を持つべき外交は、ある国家の他の国家にたいする尊重にもとづいて構成されているのではなく、威嚇から武力の使用にいたる正常とはほど遠い公然たる専横によって本来の性格を喪失しているのである。

金正日将軍の外交哲学は一言でいって、自主の外交である。つまり、自主性を守れ、というのが将軍の外交哲学の核心であり、根本的な原則である。

将軍は、対外活動で自主性と革命的原則性を徹底的に守るべきだとしている。

外交が国家間の相互関係、相互作用であるとすれば、自主性はその基礎にあって、それを規制する根本的な性質である。それは自主性が国と民族の生命だからである。

将軍は、自主性が国と民族の生命であることを明らかにし、外交の基礎と原理、原則を科学的に定立した。

自主性が国と民族の生命であるということは、それが国と民族の存在と発展を規制する根本的な性質だという意味である。

国と民族が独自の主体として存在し、発展することができる

のは、自主性を生命としているからである。自主性を喪失すれば、そのような国や民族はすでに独自の主体としての存在理由を失うことになる。したがって自主性は国家相互の関係の基礎となる。

中東諸国が相互支援をうたってアラブ民族主義を主張しているのも、このような自主性の原則にもとづいているからであろう。

金正日将軍は、自主性が国と民族の生命だという科学的な原理にもとづいて、国家間、民族間の関係は徹底的に自主的な関係にならなければならないという原則を示した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「国家と民族にとって自主性は生命であり、かれらのあいだに支配と従属、命令と服従の関係は容認されません」(同上 72 ページ)

自主性の堅持は外交で守るべき根本的原則である。自主性は民族の生命であり、人類共同の生命であるがゆえに、国家間、民族間の関係では各国、各民族の主体がその自主性を守りつつ、相手がたの自主性をも尊重する原則が守られなければならない。

わが自主性のみを絶対視して他者の自主性を侵し、あるいは自主性を奪われながら他者を崇拝しそれに屈服するならば、そのような関係は平等で正常なものとはいえない。したがって、すべての国と民族はその自主性が侵されることに反対するだけでなく、他者の自主性をじゅうりんし抑えることにも反対すべきであり、そうしてはじめて自主性を擁護する真の立場に立ったといえるのである。もし国家間にこうした自主性の原理が具現されないなら、紛争や戦争など非正常な事態の発生は防げな

いであろう。
　ノルウェーの平和学者ヨハン・カルトゥンは、国家間紛争の主因を国際構造におけるランキングまたは位相の変化にあると見た。つまり、各国の国力および国際的な位相は固定されているものではなく、時間とともに変化するものであるが、国家間の摩擦や紛争はこうした位相の変化を互いに認めようとしないことから発生するというのである。もちろんかれの主張には一理があるといえるが、民族間、国家間の紛争や戦争はそれらの国の国力や位相の変化よりも、各国、各民族が他民族、他国家の自主性を認めないか、尊重しないところに根本的な原因があるのである。いくら国力が伸び位相の変化が生じたとしても、各国、各民族がその自主権を守るだけでなく、他国、他民族の自主性をも尊重する立場に立つならば、いかなる紛争や戦争も発生しないであろう。
　世界には大国と小国、発達した国と発展途上国の違いはあっても、支配し支配される国、命令し服従する国があってはならず、各国、各民族間の関係は自主的でなければならない。そうあってこそ国家間、民族間、党間の関係は真に平等、健全な関係になるであろう。これが金正日将軍の自主的外交哲学の根本的な要請である。
　将軍は自主性にもとづく外交関係の根本的原則を明らかにし、いかなる場合にも対外関係に自主性の原則が貫かれるようにし、国と民族の自主権をじゅうりんするいかにささいな要素も容認せず、徹底的に対処するようにしている。
　ニクソンはその教書で、「わが米国人は意地っ張りといえる性格で、自分のことは自分でやることをモットーとする人たちで

ある。ひとにどのようにせよと教えるよりも、むしろ自分がそれをやってしまおうとする。このような米国人の特質はわれわれの外交政策にもそのまま反映されている」「米国の外交政策は、米国は世界でもっとも富裕かつ安定した国であり、その指導ないし支援を離れては安全と進歩が期待できないという事実を前提とするものである」として、他国にたいする支配と干渉が米国の対外政策であることを公然と宣言している。

歴史的に見ても、1947 年のトルーマン・ドクトリンやマーシャル・プランがそうであった。米国のこの強盗的な外交政策が強行されているところが朝鮮半島の南半部であり、なかんずく北朝鮮にたいするかれらの圧殺・孤立・封鎖政策は絶頂に達している。

しかし、米国のこのような高圧的、強盗的な外交は北朝鮮には通じなかった。それは、北朝鮮が自主の外交哲学を不変の原則としているからである。

近年、北朝鮮は「核問題」をはじめ帝国主義列強の威嚇・強圧策動によってきわめて緊迫した状況にあったが、北朝鮮は平然としていた。北朝鮮には自主性の原則があったからである。北朝鮮は米国が操作する国際原子力機関の不当な圧力にいささかも屈せず、強制的な核査察圧力を受けつけなかったばかりか、それがいっそうあらわになると NPT から脱退するという自衛措置をとった。帝国主義共同体は茫然自失した。自主権を守るためには可能なすべてのことを自らの決心でおこなうのが、北朝鮮の立場であり、態度である。

北朝鮮はまた、米国が平和協定の締結に応じないと、自衛的措置として、停戦協定に明記された非武装地帯における規制措

置を白紙に返した。米軍と南朝鮮軍が早くから停戦協定に背き、非武装地帯に兵器や武装人員を配備して危機をかもしだしたからである。度重なる警告を米国側が無視しつづけたので、自衛的な実践的措置を発表したのであった。米国はろくに抗弁もできずに屈服した。これと関連して、南朝鮮側が国連に、北朝畔が停戦協定に背いたとして提訴したが、国連は受けつけなかった。北朝鮮の自衛的措置の正しさを認めたのである。

あのときの北朝鮮外務省スポークスマンの声明は、国連が北朝鮮の非武装地帯放棄にかんするいかなる決議を採択しようとも、全然意に介せず自分がすべきことをするというものであった。なんという堂々とした威厳ある措置であろうか。北朝鮮は空言を吐くことなく、自主権を行使したのである。

そのとき、「VOA(アメリカの声)」放送は、「民族の自主権を守ろうとする金正日最高司令官の腹の太さと決断力がどの程度のものかよくわからないでいる」とクリントン政権に警告した。これが高名な金正日将軍の自主外交である。

米国の前ではまるで頭があがらず、ワシントンの顔色をうかがいへつらう南朝鮮の屈従外交に思いをいたすと、虚脱感にとらわれるばかりである。

朝米会談の結果が発表されたとき、金泳三(キムヨンサム)は米国から疎外されたわが身を嘆き、「頼りになる者は一人もいない」と憤慨した。それと関連して南朝鮮の『ハンギョレ』紙は、「南の外交が哲学の貧困、一貫性の貧困、自主性の貧困のなかであえでいると思うと、なんとも嘆かわしい」と書き、『新東亜』誌は「北・米会談の結果は予測されていたもので、金泳三政権の外交的孤立と外交政策の失敗を意味している。金泳三政権のかずかずの失点の

うち最大の失点は外交政策の失敗だ」と評した。これと関連した一軍事評論家の論評は興味深い。かれは『週刊韓国』（1994 年 5 号）で「北と南、米国が核ゲームで示した能力を主観的な点数で現すことができる。北朝鮮を 150 点とすれば米国は 100 点である。しかし、南朝鮮は甘く見ても 30 点であろう」と書いた。採点がどれほど正確であるかは論じないが、明らかなことは、北・米協商で北朝鮮が米国に圧勝し、南朝鮮は捨ててかえりみられなかったということである。かれが指摘したように、北・米協商のさい、「南韓の外務部長官はからっぽのかばんを熱心に持ち歩いた」

この一つの事実からも、金正日将軍の自主外交がいかに正しく堂々たるものであるかがわかる。

南朝鮮の人たちは概して洋犬を持ちあげ国産犬をばかにしている。米国の高官がシェパードを連れて政府庁舎を闊歩しても一言の抗議もできない始末であり、元米国防長官シュレディンガーは、パイプをくわえて大統領官邸の青瓦台を「表敬」訪問した。ある駐韓米大使は南朝鮮の人びとを「野ネズミ」だと冒瀆したが、誰一人怒りをあらわにできなかった。

民族の尊厳も国の体面も眼中にない南朝鮮外交の愚劣さは、金泳三外交でも顕著である。1996 年 6 月に日本の橋本首相を招いて済州（チェジュ）島会談をおこなった金泳三は、会談後日本と「新協力時代の到来」を確約し、北朝鮮を孤立させる「共助体制の樹立」を約束したと語っておのれのイメージをあげようとした。

ところで事態はどうなったか。帰国した橋本首相は、会談の状況をたずねる人たちに、「酒を飲んだ記憶しかない」と答えた。

金正日将軍は自主性の原理にもとづいて、外国との友好も自

主性の原則でおこなうべきだと指摘している。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「友好も自主性のために必要なのであり、また自主的立場に立ってのみ、真の友好を保つことができるのです」(同上 146 ページ)

将軍の友好観は、自主性にもとづく友好観である。友好は国家間、民族間、党間の平和的な友好と連帯、団結を意味する。友好はとりもなおさず平和であり、平和は友好である。暴力的でも敵対的でもない国際関係が友好であり、したがって友好は国家間、民族間、党間の健全で互恵的な連帯と発展の前提となる。このような友好は自主性にもとづいてのみ真実なものになれ、また自主性のためにこそ必要なのである。

自主性を喪失したり、他者の自主性をじゅうりんする状況では友好は成立しえない。各国、各民族が互いに相手方の自主性を重んじ、それを尊重するとき、友好と互恵の関係が結ばれるのである。また、各国、各民族が互いに友好関係を結ぶのは、それ自体に目的があるのではなく、わが自主権をより強く守ると同時に、他国、他民族の自主性を尊重し花咲かせるために必要なのである。自主性のない友好は友好でなく、また自主性を志向しない友好はなんの意味もない。したがって国家間、民族間の友好は自主性にもとづき、自主的なものでなければならない。

力の政策に立った友好などありえず、したがって非自主的な友好は、虚偽、欺瞞にすぎない。米国をはじめ強大国が唱える友好とは、他国、他民族の自主権のじゅうりん、剥奪を前提とする偽りの「友好」であって、本来の意味での友好ではない。

北朝鮮の対日政策は、金正日将軍の自主的外交政策がどのようなものであるかを見せるモデルである。日本が過去を清算せず、謝罪も補償もしないまま、なにかの前提条件をうんぬんしながら修交を論じたとき、北朝鮮はどのような態度をとったか。

日本とは修交をしてもしなくてもよい。日本に国交正常化の意思があればやり、なければやめろ。われわれは日本と国交関係がなくても生きてきたし、また今後も生きていく。絶対に修交を哀願するようなことはしない。しかし、過去の清算と謝罪はきちんと受ける。損害賠償もはっきりとしなければならない。日本はわれわれに難くせをつけて脅威論をうんぬんし、侵略戦争の準備を急いでいるが、われわれは決して座視しないであろう。米国や南朝鮮に調子をあわせ戦争熱にのぼせてなんらかの行動を起こせば決して見すごすことなく、徹底的に報復を加えるであろう。これが金正日将軍が導く北朝鮮の対日政策である。正々堂々とした痛快な外交といえよう。

北朝鮮の自主の原則は、どんな大国にたいしても例外を知らない。南朝鮮が米国の植民地であるのにひきかえ、北朝鮮は米国を手玉にとっている。世界で米国の「文明的利己主義」、棍棒政策に依拠する覇権主義が通じない唯一の国は北朝鮮である。これは周知の事実である。

米国が対外政策でかかげている「文明的利己主義」の原則は、米国式行動原則である。それは米国の対外政策の決定においてアルファーでありオメガである。米国は自己の利益のためにはどのような状況でも、どの方向であれ自由に行動しうると主張し、それを対外政策に適用している。

米国の利益のためなら、時期と場所を問わず好きなように行

動し、どのような国や民族も支配でき、収奪できるというのが米国の外交である。したがって世界は、友好の看板のかげにひそんでいる米国式の「文明的利己主義」「プラグマティズム的利己主義」の正体に警戒心を高めている。それにもかかわらず、今日、南朝鮮の外交はなにも知らず、また知ろうともしていない。米国にたいする無条件的、絶対的な崇拝と依存心は、米国の黒い腹のうちも見すかせない無知の限界にある。南朝鮮が国の自主権を奪われた状況にありながらも、「同盟者関係」「同伴者関係」を叫ぶのは売笑婦が貞節を誇っているようなものである。

金正日将軍は盲目的な友好、従属的な友好を望まず、容認もしない。友好がいかに貴重であっても、自主性を奪われ、じゅうりんされながらもそれにしがみつこうとはしない。自主的、独自的、主体的な立場に立った友好のみを将軍は認めているのである。

将軍の自主性の原則は、いまや現代における国際関係改善の普遍的な原則となっている。今日、世界のいかなる国も自主権を侵されることを快しとせず、強大国の支配論理に従おうとはしていない。

英、独、仏をはじめヨーロッパ諸国は以前のように米国の支配を受け入れようとせず、独自の自主的な立場に立ってヨーロッパを統制しようとしている。中東問題とボスニア・ヘルツェゴヴィナ問題と関連したヨーロッパ諸国の独自の政策は、米国の指揮棒がもはや通じなくなったことを語っている。

最近米国がキューバを圧殺すべく「ヘルムズ・バートン法」や「ダマト法」を制定し、それを盟邦諸国に押しつけたが、英、独、仏をはじめ世界各国がそれを排撃している。

リビア、イランをはじめとする中東諸国やフィリピン、インドネシア、マレーシアなど東南アジアの人たちは、米国の内政干渉と文化的浸透に強く反発している。

戦略的同盟国とみなしている日本でも、米国の圧力と制裁が以前のようには通じなくなっている。沖縄問題をめぐる日本人民の反米感情は高まっており、沖縄をはじめ日本における米軍基地の使用問題はもはや譲歩できない問題となっている。これは、金正日将軍の自主の哲学が、国と民族の本性と時代の要請に即した普遍的意義を持つ外交哲学となっていることを物語っている。

2　主体性を確立せよ

主体性を確立せよというのは、金正日将軍の自主的外交哲学の原則的要求である。

国と民族は自主性を生命としているために、主体としての独自の精神的支柱がなければならないとするのが、金正日将軍の外交思想であり、意志である。

外交で主体性を確立するということは、対外関係で自国、自民族の利益と要求を徹底的に守り、貫き、外国のものを受け入れる場合も、それを自国の実情に即して自国式に受け入れなければならないということを意味する。一言でいって、自国の利益に即し、自国の実情に合わせて外国と関係を結ぶのが、とりもなおさず主体性を確立することである。

金正日将軍は、朝鮮労働党の外交はあくまでも主体的でなければならず、どの一方にも片寄ってはならない、と指摘してい

る。

外交で主体性の原則は、国と民族の生命が自主性であるという原理から必然的に出てくる要請である。すべての国は自主性を生命としているがゆえに、自国の運命を主体的に開拓していかなければならない。対外関係はそれを結ぶ主体の要求に従って結ばれるものであるために、関係主体としての各国は、当然、対外活動で自国の主体的な要求を貫く権利と責務を持つ。主体的立場を守るのは自主独立国の当然の権利の行使である。

したがってすべての国は、対外関係で持ちあがる問題を自国と自民族の要求と利益に即して、そして自己の独自の判断と決心に従って解決していかなければならない。そうしてこそ、各国の人民は自らの利益を守り、その意思と要求を貫くことができるのである。

また、各国の人民は外部からのいかなる圧力や干渉も許してはならない。人に抑えつけられ、あるいは束縛されて自己の問題を自らの決心で処理できないなら、それは主人としての権利を奪われたことを意味し、他方人の言いなりになり、自己の利益に背いて行動するなら、それは主人としての権利を捨てたことを意味する。外部の圧力や干渉を許し、他国の指揮棒によって動くならば、原則性と一貫性を守れず、ついには国を滅亡させる結果を招くであろう。

対外関係で主体性に欠けるとき破局的な結果を招来するのは、東欧社会主義諸国の運命が実証している。ゴルバチョフは、1986年、ソ連共産党第27回大会で「新思考方式」を指導哲学として宣言し、ソ連を全面的に作り変える作業にとりかかった。

ゴルバチョフが標榜した「新思考方式」とは、今日の世界は相

互依存の関係にあるために、国家関係の枠から抜け出して「全人類的な価値」を追求しなければならないというものであった。かれは、国際関係を階級闘争のみをもって類別するのは古い思考方式である、超階級的な「全人類的価値」の追求こそ国際関係の原則になるべきだと主張した。本質において、ゴルバチョフの「全人類的価値」の追求は帝国主義への投降であり、強大国ソ連の利益の放棄であった。

　結局、あの強大なソ連邦は解体され、同時に主体性のない東欧社会主義諸国も続々と挫折する事態が発生した。主体性の喪失は事大主義を助長し、ひいては帝国主義に屈服、従属するという事態を生んだ。このことは、国際関係における主体性の堅持が国と民族の自主権と尊厳を守るための根本的要因であることを確証している。

　主体性の確立の必然性を明らかにした金正日将軍は、そこから、主体性の原則を具現するためには、対外活動を独自の方式でおこなうべきだとするユニークな外交戦略をうちだした。

　独自の方式で対外活動をおこなうのは民族のしんを立て、民族の利益を貫く根本的要請である。それぞれの国がそれぞれ違った歴史的段階にあり、民族的情緒や生存方式も相異なる状況のもとで、すべての国に適用される一律的、画一的な活動方式などありえない。したがって、外国と関係を結び交流を深めるからといって、事大主義的ないし教条主義的な立場と態度をとるべきではない。

　外国の慣例や経験はあくまでもその国の社会・歴史的条件と民族的特性を反映したものである。そこには自国に有益なものもあればそうでないものもあり、また自国の実情に合うものも

あれば合わないものもある。それゆえに他国のもののなかから自国の利益にかなうものは受け入れ、そうでないものは受け入れるべきではない。外国のすぐれたものを受け入れる場合も、それをうのみにするのではなく、自国の実情に即して作り変えて受け入れる立場を守らなければならない。

大国や発展した国だからといって、その国に幻想をいだいてはならない。大国、発展した国が必ずしも正しい道を歩むわけではなく、またそのような国のものがいつも自国の実情に合うのでもない。

大国との友好関係を発展させる必要はあるが、だからといって自主性を放棄して大国に盲従すべきではない。

主体性をなくしてひとのものに心を奪われ、またはひとのものを崇拝し、ひとの力に頼ろうとすれば、やがて自分のものはなにもなくなり、結局は国と民族の滅亡を招くことになる。

主体性のない外交が国を滅ぼすということは、朝鮮が日本帝国主義者に屈服して「保護条約」を受け入れたことからも実証されている。

張志淵（チャンジヨン）は日本帝国主義者の強要で「保護条約」が結ばれると、『皇城（ファンソン）新聞』に「この日に号泣する」を発表して、売国奴が三千里の国土と2,000万同胞を日本の奴隷に転落させたと痛憤した。その日の主体性喪失の歴史が、今日も南朝鮮ではそのまま再現されているのだ。

米国の外交は強権外交である。歴代の米大統領は力の優位にもとづく強権外交で他国を屈服させ、自国の利益を追求した。

ジョージ・ワシントンは、「なぜ外国の立場を守るためにわれわれのものを捨てなければならないのか?　われわれの運命をヨ

ーロッパのある国と結びつけ、われわれの平和と繁栄をヨーロッパの野心、競争、利益、気分、気まぐれという土壌に混ぜこむ理由がどこにあろうか。外部世界のどのような部分とも永久的な同盟を結ばないのがわれわれの真の政策だ」とした。これがほかならぬ米国式外交の本質である。米国の外交は自分に有利であるときは同盟関係を結ぶが、必要がなく不利な場合には、それを捨ててかえりみないのである。

米国の外交の自己中心的狡猾性は、第 2 次世界大戦時に露呈した。当時、米国は戦争の推移を傍観し、双方の勢力のなりゆきを見て有利な側につき、おのれの野望を実現した。これについてローズヴェルトが、1942 年、わが子と語りあった話は、そのよい例証である。ローズヴェルトは息子のエリアードにこう言った。

「サッカーを考えてみよう。われわれを控え席にいるサブプレーヤーだと仮定しよう。いま、グラウンドではロシア・チームが戦っており、中国チームも懸命に戦っている。そしてかれらほどではないが、英国チームも戦っている。われわれがやることは…最後に出る選手のことを普通なんと言っていたっけ。やり手?」と言うと、息子が、「どういう意味かわかります」と答えた。ローズヴェルトは、「われわれは、試合が長びき味方の選手がへたばる前に出場して勝たなければならないのだ。われわれは気力が充実しているのだからね。われわれがタイムリーに出場すれば、味方の選手は大した疲労も覚えずに戦えるはずだ」と言った。これは双方が戦って気息えんえんとしているときに出場して戦果をせしめようということである。これが米国式外交戦略なのである。

米国の外交には真実がなく、野心的で狡猾なのが特徴である。米国の対南朝鮮外交は、徹頭徹尾支配的、強圧的であり、号令式性格をおびている。

南朝鮮の外交は米国の世界制覇戦略の付随物にすぎない。南朝鮮は米国の植民地的支配のもとにあるために、独自の主体的な外交など存在しえない。米国の気にいり、またその承認があるときだけ他国との関係を結び、そのような場合も米国の権益に抵触してはならないのである。

こうして見るとき、外交で主体性を確立し、独自の方式で対外活動をおこなうことが、国の利益を守リ、国のイメージを高めるうえできわめて重要な意義があるといえるのである。

対外活動を独自の方式でおこなうということは、国家主体の要求と利益に即しておこなうということであり、独自の方式で決心をくだすということは、国家主体の判断にもとづいて対外政策と方向を規定するということであり、独自の方式で活動するということは、国家主体の伝統と慣例にならって創造的に対外活動をおこなうということである。

独自の方式で解釈し、独自の方式で決心をくだし、独自の方式で活動するときにのみ、対外関係で主体性の原則が貫けるのである。

金正日将軍は、北朝鮮が大国のあいだにはさまっているという事情が国際関係で自主性・主体性堅持の重要性をさらに大きくしていると指摘している。

北朝鮮が周辺の情勢がきびしい状況のもとでも国と民族の自主権と尊厳を守り、自らが選んだ人民大衆中心の社会主義の道を力強く前進しているのは全的に、金正日将軍の主体的外交戦

略があるからである。

3　自主の世界を建設せよ

1960年代以後、世界の国ぐにには「21世紀委員会」「未来学会」などといった組織がいろいろと作られて、21 世紀の世界像があれこれと論じられている。その内容と性格の多様さにもかかわらず、それらの研究団体はおしなべて来るべき世紀における人類の運命に憂慮を示している。それらの研究組織はほとんどが、科学技術の発展による人間の疎外と、地球生態環境の破壊が人類の生命にとって大きな脅威になるであろうと警告している。しかし、それが現実的に世界を襲う最大の脅威だといえるであろうか。いや、最大の脅威は地球上に存在する帝国主義、支配主義の専横とその極大化である。

支配主義的で略奪的な勢力の専横を阻止せずには、世界は平穏でありえず、人類には幸福と平和がもたらされないであろう。

では、人類はどのような世界、どのような世の中を建設しなければならないのだろうか。

金正日将軍は、人類共同の生命が自主性であるという原理にもとづいて、全世界が共同で実現していくべき外交戦略の青写真を示した。

その総体的目標は世界を自主化することである。自主性を求め、自主の道に進むのが歴史発展の必然的な流れであり、今日ばかりでなく未来の歴史的時代も、全的に自主性をめざす人民大衆のものであるというのが、金正日将軍の見解である。

自主の世界を建設しなければならないとする将軍の見解は、

人類の運命の科学的な理解を踏まえたものである。
金正日将軍はつぎのように述べている。
「人類の運命は一つに結びついています。われわれは自国の人民ばかりでなく、人類共同の繁栄のためにたたかわなければなりません」(同上 203 ページ)
将軍が示した人類の運命観とは、一言でいって、人類共同の生命は自主性であり、それによって人類の運命が一つに結びついているということ、人類の運命が一つに結びついているために、世界のすべての国の人びとは自国、自民族のためばかりでなく、人類共同の繁栄をめざしてたたかわなければならないということである。
このような見地からして、自主的で平和な世界を建設しようという将軍の思想は、実に貴重なものだといえる。
動乱で明け暮れた 20 世紀をしめくくりながら人類は、来る 21 世紀には人間的なすべての念願がいっそうりっぱに実現することを望んでいる。そのなかでももっとも切々とした念願は、平和で自由な世界で生きようという念願である。ある人たちは、世界がデタントの時代に入ったというが、必ずしもそうだとはいえない。
デタントを脅かす帝国主義勢力が厳然と存在しており、米国は世界唯一の超大強国として自らを任じ、世界のいたるところに支配と干渉の魔手をのばしている。それで世界はいまなお列強の角逐の場となり、いつ戦火が燃えあがるか知れない危機状況にある。
かつてファシズム日本とドイツは世界の悪であった。日本帝国主義者は「神権説」をうんぬんしながら日本人が「高等人種」で

あると主張し､｢同化政策｣に熱をあげた｡雑種である日本種を｢神の後裔｣｢神聖｣な人種だとして自らを美化し、｢大和民族｣の膨張説を騒ぎたてたあげく滅亡した日本軍国主義の亡霊がまたしても蘇っているのである。

米国は世界の支配を狙う新たな戦略段階に入っている。かれらは一極世界の帝王たらんとしている。

ルソーが米国人種の｢心理的優位性｣と｢血統的自負心｣を力説して米国の支配的役割を強調し、ボガウスは米国人種が世界を｢指導する使命｣を担っていると言ったが、米国は今日、その実現に力を入れている。

米国の歴史学者フレデリック・ターナーが｢米国的な生の膨張性がもう終わったと主張する者がいるなら、かれは性急な予言者である。運動は米国的な生の支配的な側面である。米国は精力をつぎこんでいっそう広い活動の場を求めるであろう｣と言ったが、かれの言葉は米国の世界制覇野望をそのまま言いあらわしたものだといえる。精力を尽くしてたえず膨張し、いっそう広い活動領域を確保しようというのが、米国的な生であり、野望である。

米国の戦略の基本的な理念としての勢力の均衡は、一定の国際関係に参与している国家間の矛盾を利用して、諸国間の均衡が自国に有利になるようにコントロールする能力をいう。勢力の均衡は、均衡をコントロールする国が最大の努力を傾けずとも、その軍事力の効率をもっとも高めることができるようにする。米国はこのような戦略に従って、互いに競争するヨーロッパ諸国やアジア諸国のあいだで｢大調整者｣としての役割を果たしつつ、自国の利益圏、勢力圏を広げている。中東、ボスニア・

ヘルツェゴヴィナ、アフリカ、アジアなどの地域における米国の狡猾な外交攻勢が、世界制覇を狙うその野心を克明に描き出している。

19 世紀 20 年代にモンローが提唱した「モンロー主義」は、看板は「アメリカ人のためのアメリカ」であるが、内実は「米国のためのアメリカ」であった。米国のこのような野心は、今日も変わるところがない。金正日将軍は、世界に支配主義・帝国主義勢力が存在する状況のもとで、国家間、民族間の真の和解と友好をはかり、自由で平等な繁栄する世界を建設するためには、自主性にもとづいた新しい国際秩序を樹立すべきだとする戦略を世界に示した。それがほかならぬ世界の自主化にかんする思想であり、戦略である。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「自主化された世界は支配と従属、干渉と圧力のない世界であり、すべての国と民族が自己の運命の主人として自主権を完全に行使する世界である」(同上 334 ページ)

将軍が構想する自主化された世界とは、侵略と戦争、搾取と抑圧がなく、すべての国、すべての民族が自主的で平等かつ平和的に生きていく世界である。自主化された世界は地球上で帝国主義、支配主義がなく植民地主義が完全になくなった世界、すべての国、すべての民族の自主権が完全に実現された世界である。

自主化された世界の建設とは、国際関係を民主化し、民主主義の原理にもとづいて、すべての国、すべての民族が共存共栄する新しい国際秩序を樹立するということである。地球上から侵略と戦争、搾取と略奪を生む悪の根源を一掃し、すべての国、すべて

の民族が自主性にもとづいて友好的で平等かつ平和な関係を結んでむつまじく暮らす世界を建設しようというのが、将軍の意図である。

将軍は人類の崇高な理想と念願を反映して、歴史発展の合法則性にそう自主的な新世界の建設を対外活動の総体的目標、戦略的課題とし、その実現をめざして全力をそそいでいる。

人類共同の生命が自主性であることから、人類の自主性の実現に向けて世界を自主化するのは歴史の必然の要請である、という将軍の思想は、きわめて自然なものだといえる。世界的規模ですべての国が自主性を堅持すれば、帝国主義、支配主義の専横も阻止できるのである。

近年、米国の外交界で流行語となっている「拡大」という言葉は、「数千マイル離れた地域の自由を守り、拡大するために、米国の力、圧力を行使しなければならない」という意味である。今日、アジア地域における米国の勢力圏の拡大は、いっそうあらわな様相をおびており、それは日米安保体制の再構築とその内容のいっそうの深まりによっても表現されている。

ニクソンが回顧録で「20 世紀における旧ソ連と東欧の共産主義者の敗北は、21 世紀において世界的に自由が勝利するための第一歩にすぎない」とし、「自由の勝利は、ひとり米国が対内外政策で基本的原則を新たに闡明し、公約するときにのみ確保できる」と言ったのは、「拡大」外交によって世界を支配し平定しようとする米国の野心をあらわにしたものにほかならない。米国の対内外政策の原則とは「拡大」外交であり、米国が狙う「21 世紀において世界的に自由が勝利する」というのは、自由民主主義体制の世界的確立を意味するものである。米国のこのような外

交的発想が恐ろしい災厄をもたらすであろうことは疑いをいれない。

日本は経済大国の地位にふさわしく世界で政治的、軍事的に主導的な役割を果たそうとし、公然と海外派兵などの軍事的進出に熱をあげている。最近日本では小沢一郎の『日本改造計画』や『NO と言える日本』のような本が人気を呼んでいるが、それは日本が憲法を無視して日本国と自衛隊の「国際的貢献」をあからさまに主張しているからである。日本は米国と「日米安保戦略」を論じる段階に入っている。日本はまたしても大東亜共栄圏を夢見ているのである。

世界的にいっそうあらわになっている帝国主義列強の勢力圏拡大策動を阻止し、すべての国の自主権を守る唯一の処方は、世界を自主化することである。すべての国が自国の自主権が侵害されることに反対するばかりでなく、他国の自主権も侵害しないなら、世界には侵略し支配する状況も、従属し略奪される状況もなくなるであろう。

世界における経済的不平等も自主化の旗のもとでのみ除去することができる。今日、富める北と貧しい南の格差は、日とともに大きくなっている。富める北半球が南半球の貧困を阻止できないならば、南半球の不幸が北半球に影響を及ぼすであろうことは間違いない。したがって、世界の経済的不幸をなくすためには、第三世界諸国における不幸をなくさなければならない。この課題は、自主性の旗のもとに、不公平な国際経済秩序に終止符を打ち、公正な国際経済秩序を確立していくときにのみ可能である。自主性にもとづく経済的協力と連帯、自主性にもとづく経済交流の原則が具現されてこそ、経済的平等と経済的平

穏が世界に訪れ、すべての国、すべての民族の平等かつ平和な発展が期待できるのである。

以上のことからして、自主性の原則が平和で幸福な世界を創造する唯一の鍵であるといえる。

世界が自主化の旗をかかげれば、核実験の禁止も兵器の全面的縮減も実現し、緊張した軍事的対峙状態を解消して世界的に戦争を防ぐことができ、他方古い国際経済秩序を崩して公正な国際経済秩序をうち立てることもできるのである。

一言でいって、自主性の旗のもとにすべての国が自国の自主権と尊厳を徹底的に守るとともに、他国の自主権を尊重しそれを守る立場に立つならば、地球上ではいっさいの不正義と悪が一掃され、自主の新しい世界が到来するであろう。

このように、金正日将軍は世界自主化の宣言をもって、正義の支配する平和な世界を建設するための正しい外交綱領を歴史の前に示したのである。

将軍は世界の自主化綱領を示すとともに、それを実現するためには、各国、各民族の自主性、人類共同の自主性の実現を妨げる帝国主義・支配主義勢力に反対すべきであり、そのためにはすべての反帝自主勢力が団結すべきだとする闘争戦略をうちだした。帝国主義者が連合して人民大衆の自主性、国と民族の自主性を奪おうと画策している状況のもとで、反帝自主勢力の国際的団結と連帯を強化し、団結した力で帝国主義とたたかうのは、自主化された世界を建設する不可欠の要請である。このことから将軍は、社会主義勢力と共産主義運動、民族解放運動と民主主義運動、非同盟運動など世界のすべての進歩的勢力と平和愛好勢力が反帝統一戦線を形成し、帝国主義に集団的に攻

撃を加え、最終的には帝国主義、支配主義を一掃しなければならないと指摘している。

「自主性を擁護する世界の人民は団結しよう!」　これが将軍が対外活動で堅持しているスローガンであり、北朝鮮の外交活動の総体的な方向、戦略である。自主性を擁護する国や民族であるならば、政見や信教、思想、制度の違いを越えて、世界のすべての民族と団結して反帝自主偉業を必ず完成しようというのが北朝鮮の一貫した外交戦略である。今日、北朝鮮は自主性を擁護する世界の国ぐにと友好、協力の関係を広げており、世界的にますます多くの支持者、同情者を集めている。

金正日将軍の自主外交、チュチェ外交によって、世界の外交は新しい軌道を進みはじめており、自主の旗のもとに、人類は自主的な新世界建設の荘厳な大長征を力強く進めている。